

28号住遺物出土状況

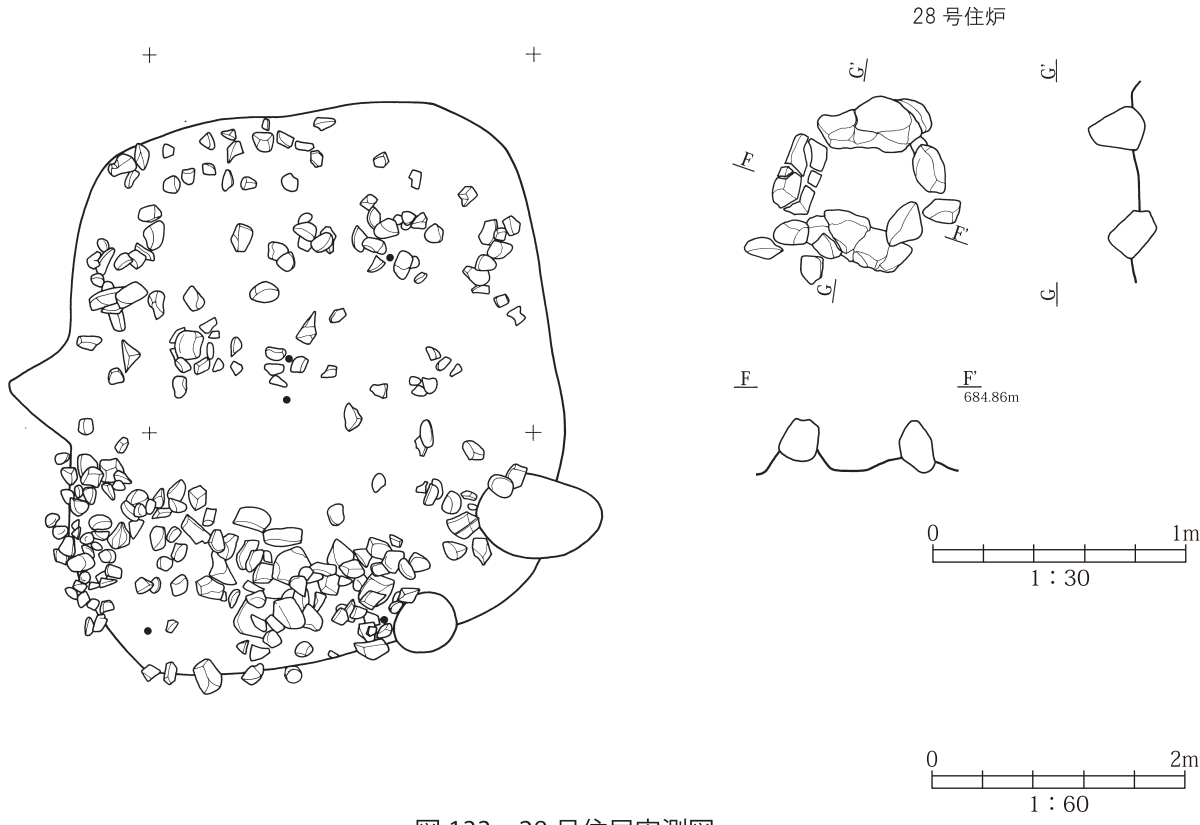


图 133 28号住居実測図

28号住居・関連グリッド出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期					後期					晩期			後晩			
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
28住	33360			5		1			3	142	4	1		4	1	120	2	101
				110		30			30	4120	50	10		100	10	4430	20	4510
S36W21	41320			1					12	84	12	11	9	16	23	129	6	103
					10				210	2800	220	170	120	670	840	1740	40	3950
S36W24 (26・28住)	43210			1	1				3	23	2		31	42	2	190	20	97
					10	10			30	420	20		360	1120	40	3360	350	4570
S39W21	30715			3					3	48	8	3	3	17	17	120	8	62
					190				20	2070	90	60	60	280	400	1960	80	2220
S39W24 (25・26・28住)	20825			2					3	31	6	2	9	3	7	67	3	50
					90				30	770	190	70	170	40	240	2210	30	1690



図 134 28号住居出土土器実測図・拓影(1)

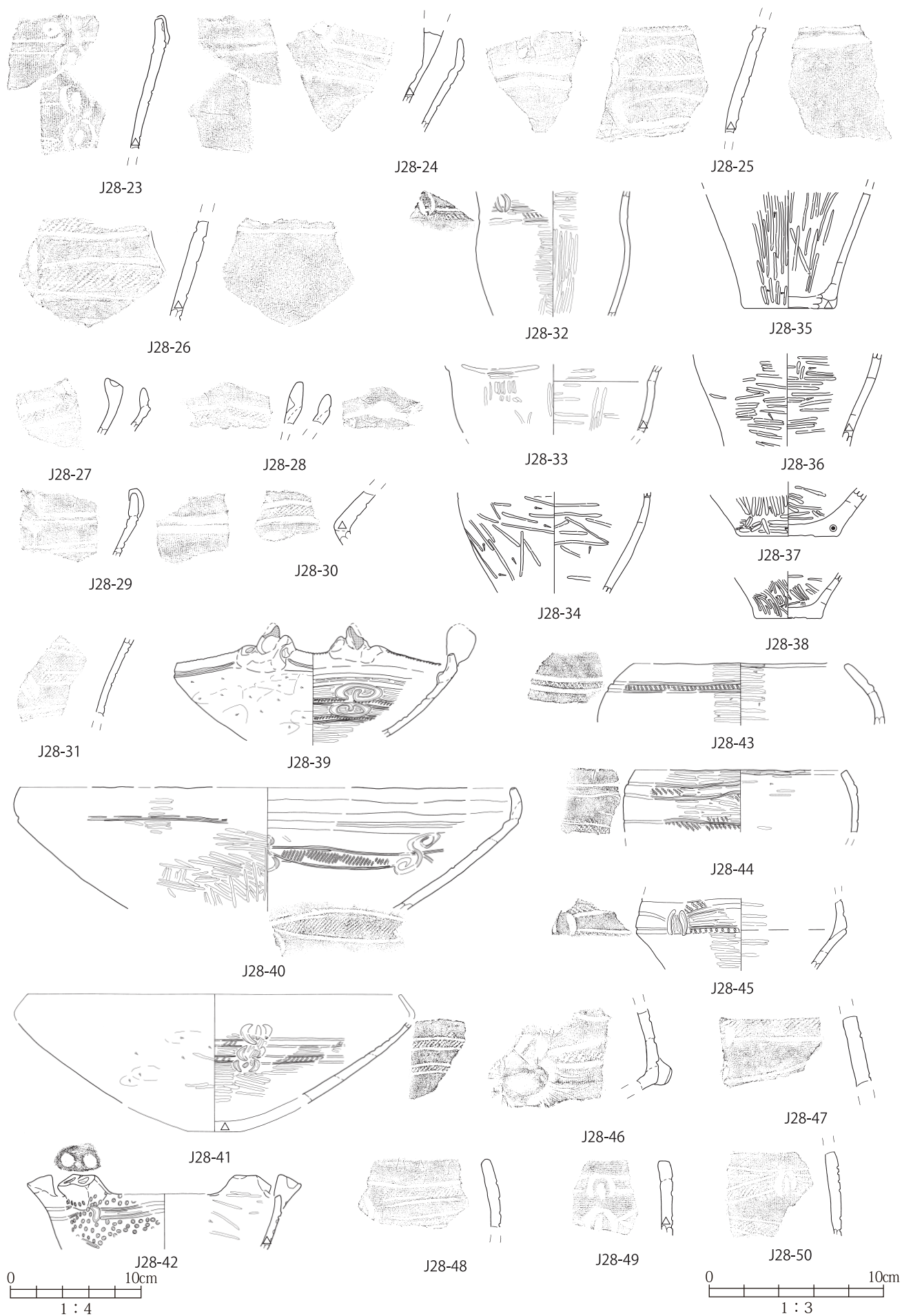


图 135 28 号住居出土土器实测图·拓影 (2)

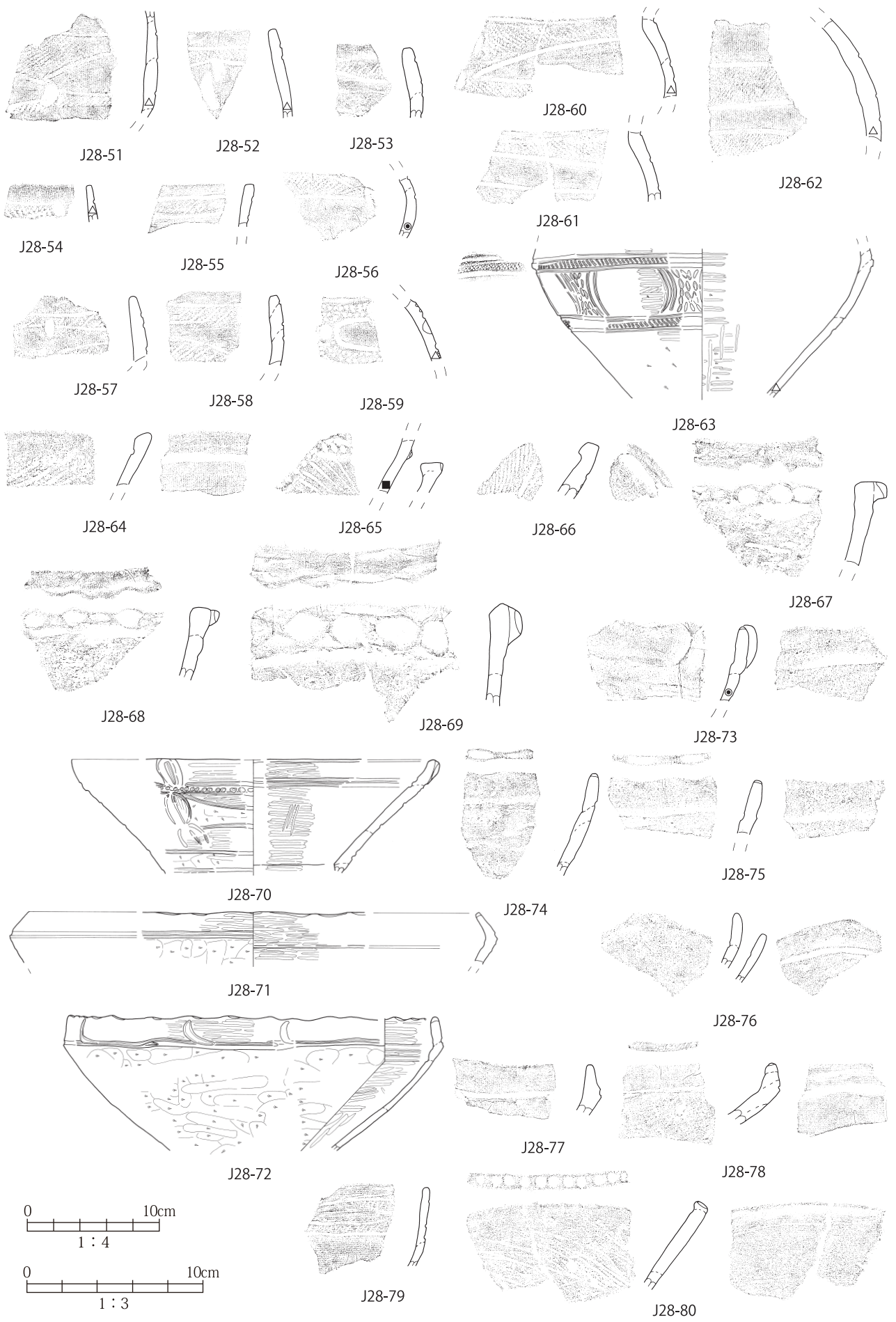


图 136 28 号住居出土土器实测图·拓影 (3)

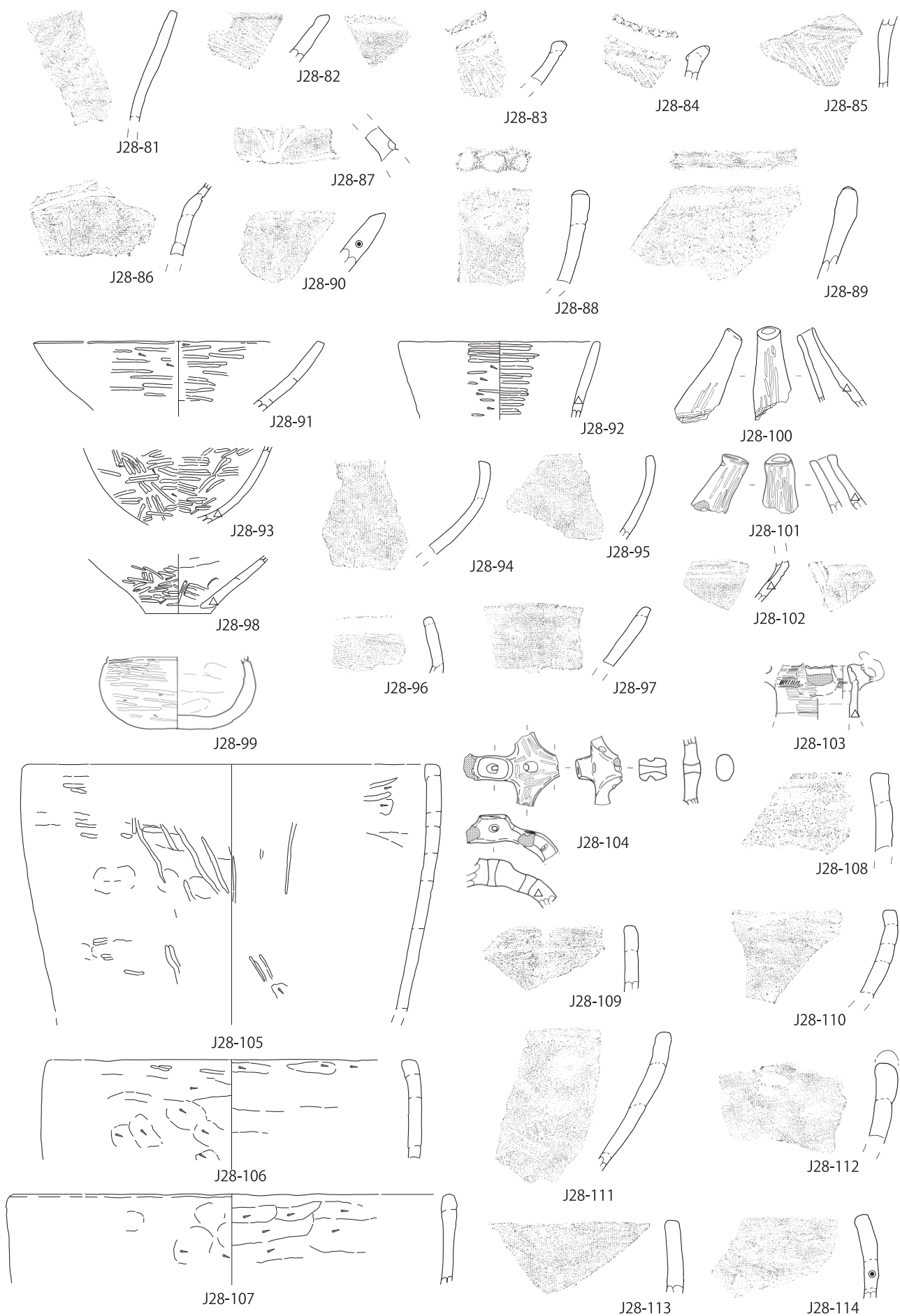


图 137 28 号住居出土土器实测图·拓影(4)

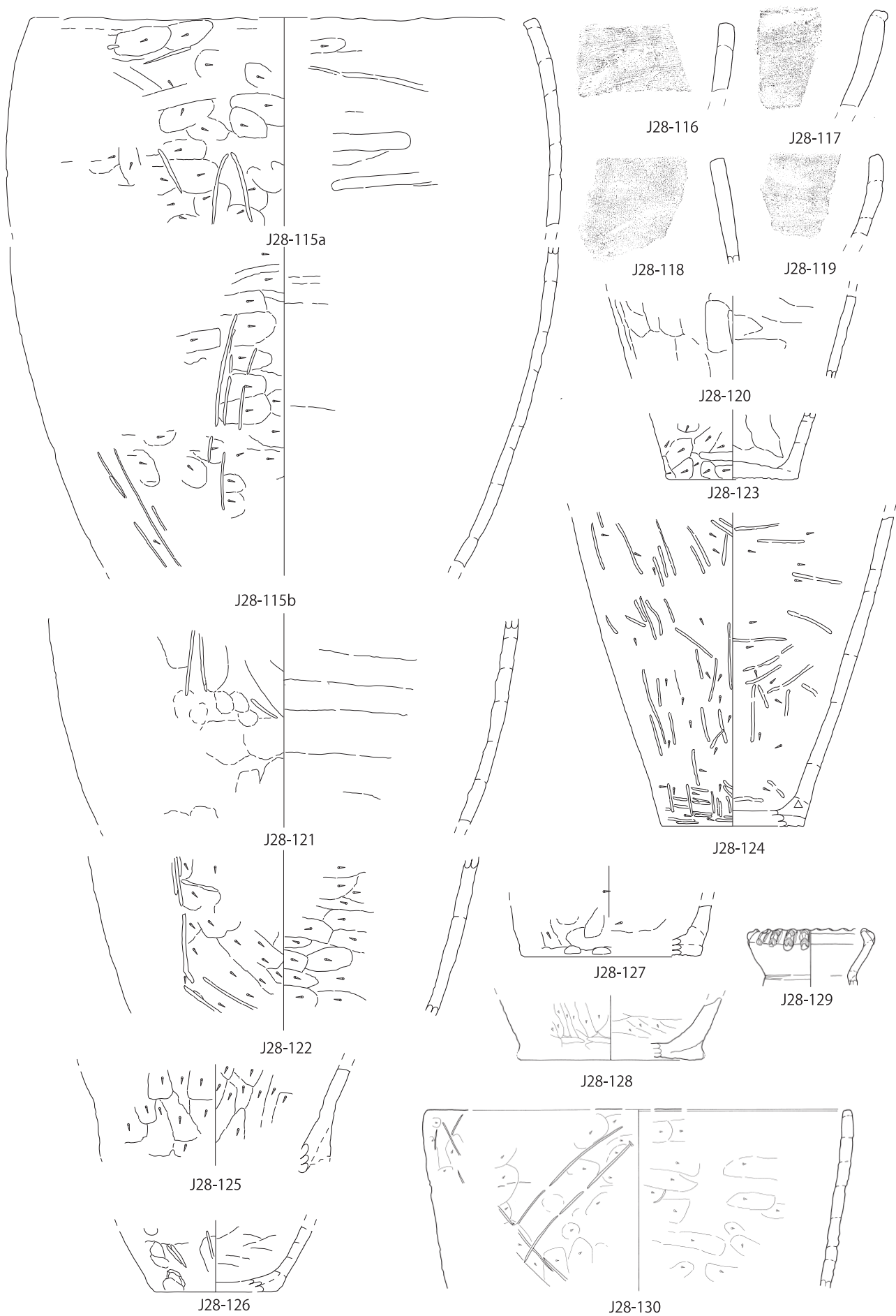


图 138 28 号住居出土土器实测图·拓影 (5)

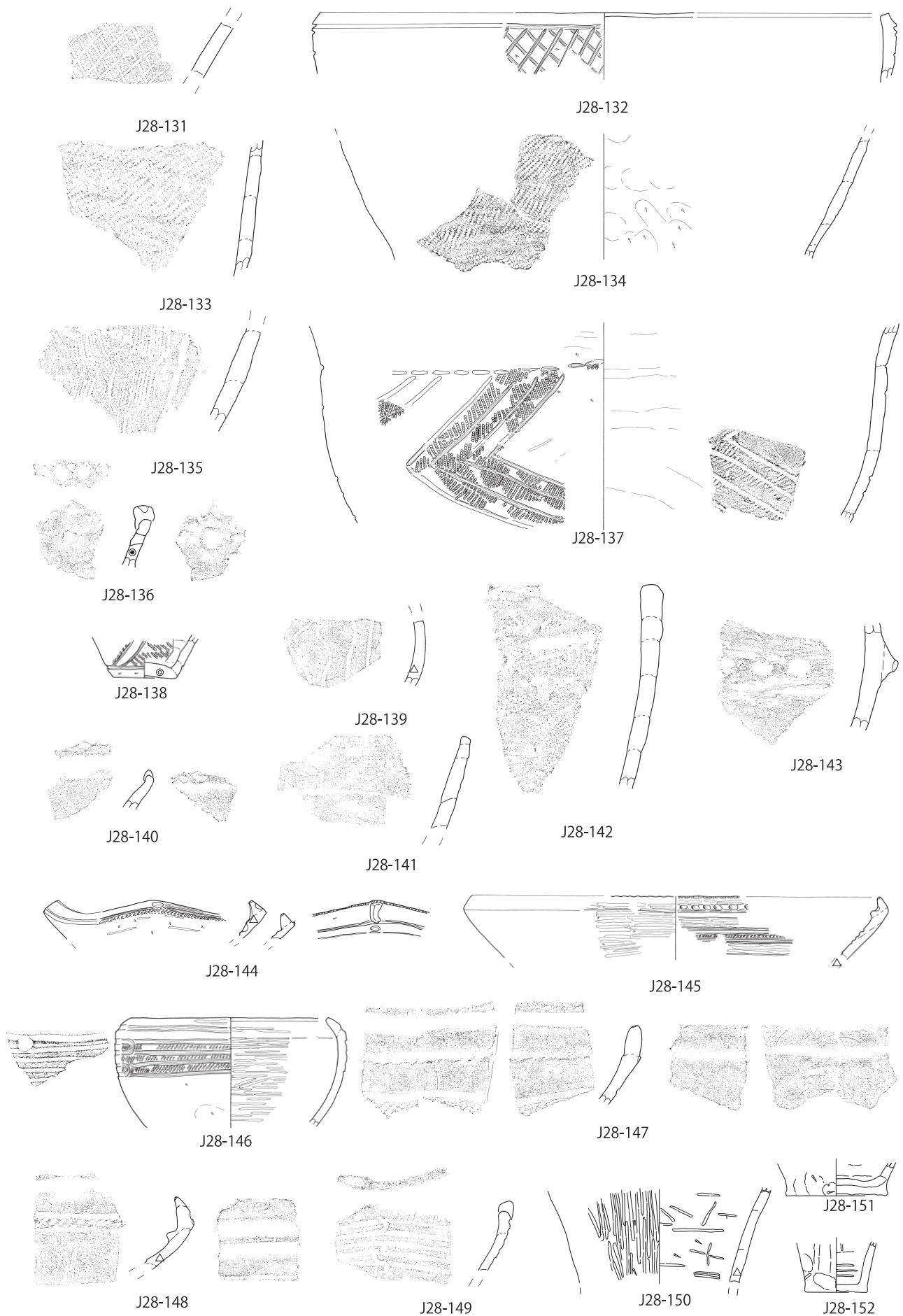


图 139 28 号住居出土土器实测图·拓影(6)

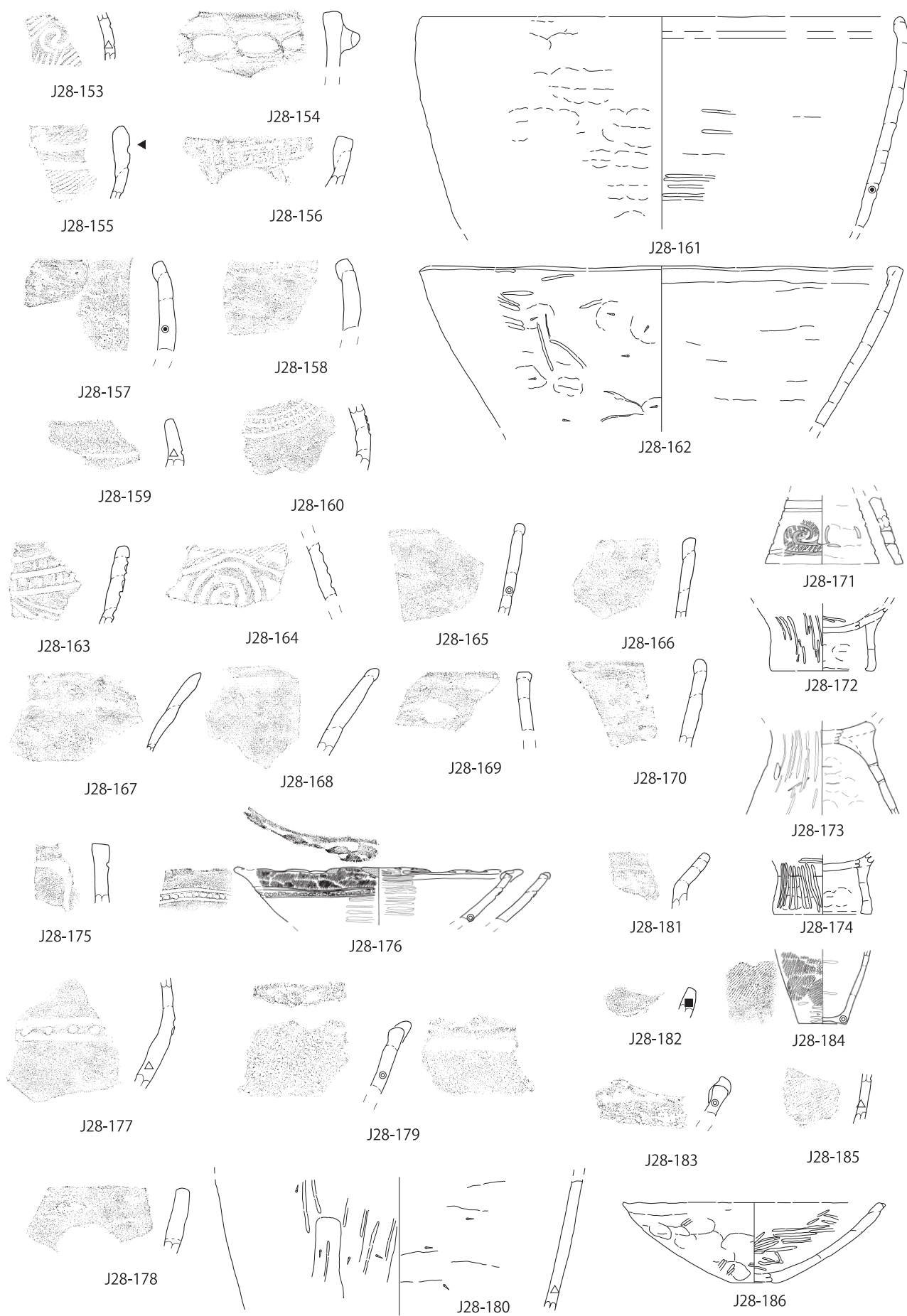


图 140 28 号住居出土土器实测图·拓影 (7)

(22) 28号住居 [図 133～140、写真図版 23、24] 【加曾利 B2 式前半～後半】

S36W18～S39W24の6グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第IV層上面で掘り方を平面的に検出し、ほぼ同時に配石14が住居埋土中に構築されることと、土坑274を切り、土坑569、土坑672、埋甕9に切られることを平面で確認した。また、床面の調査で住居のピットに切られた土坑673を検出した。

南北4.4m、東西3.8mの南北に長い隅丸長方形の平面形を呈する。埋土は水平方向には分層できず、ブロック状の埋土だった可能性もあるので、人的な埋め戻しの可能性も考慮しておきたい。壁はほぼ垂直で、壁高は全周30cmほどと、エリ穴遺跡では珍しく残りが良い。住居中央の床面は礫が多く、硬化面ははっきりしない。住居中央には長辺40cmほどの円礫4個を方形に配置した石囲炉が造られる。掘り方は無さそうで、縁石は被熱のためか割れたり風化が著しいが、炉底面に被熱による赤化は見られない。床面で発見されたピットのうち、P1～P5は50cm以上の深さがある。多くは壁に寄った位置に作られ、柱穴の可能性はあるだろう。ピット出土として取り上げられた土器が少量あるが、どのピットか特定できない。それ以外は埋土出土で、床面出土かどうかは不明だ。

出土土器は加曾利 B2 式前半が質・量とも優れており、同期に帰属する住居だとしていたところだが、そう断ずるには幾つかの難点が含まれる。

どれか特定できないピット出土土器は小破片ばかりだが、上ノ段式 J28-5 と後期末葉前後の可能性のある J28-6 が含まれる。遺物取り上げのミスの可能性、あるいはそのピットが 28 号住居を切る別遺構である可能性など、解釈の余地はあるが、不都合な事実は消しきれない。

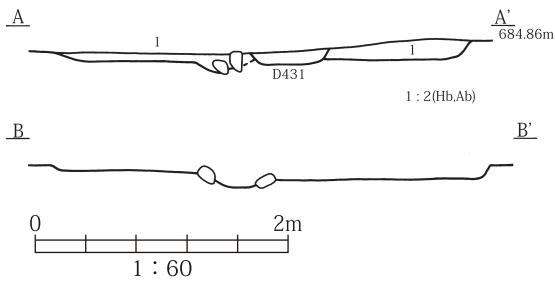
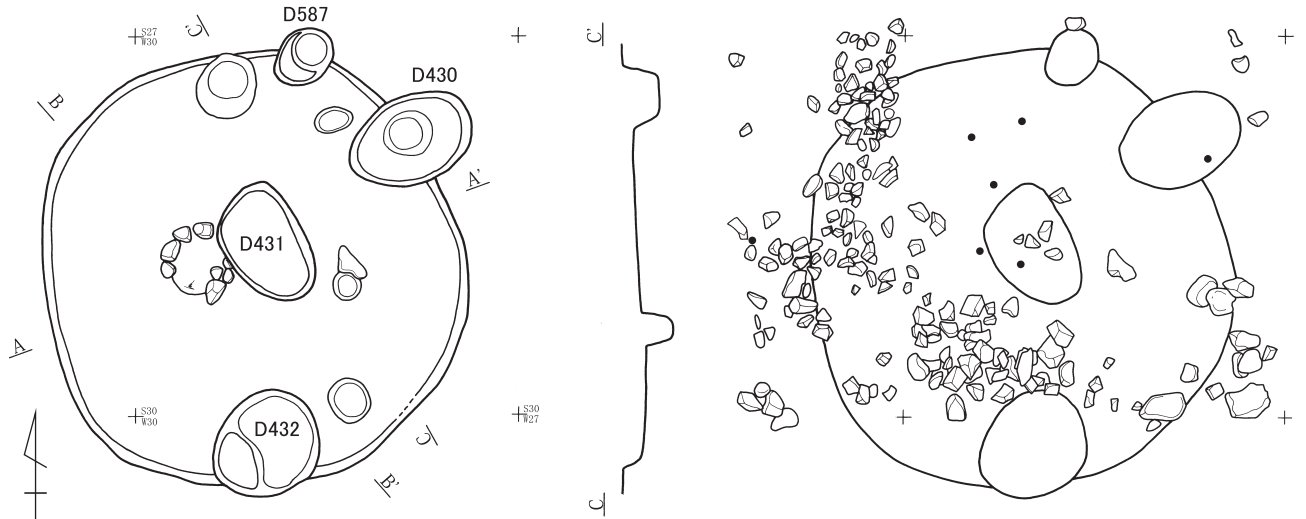
埋土出土の J28-8～J28-63 は、加曾利 B2 式前半八窪遺跡(塩尻市)1号ブロック段階の精製土器・磨消縄文系器種である。同ブロックで一括性が把握された J28-43～J28-63 の屈曲浅鉢の多さが目を引く。J28-64～J28-66 の羽状沈線文系器種は最古相に近く、隆帯文が口縁端部上限に達した関東系の粗製土器(J28-67～J28-69)と合わせ、同ブロックの一括性を信ずれば加曾利 B2 式前半に帰属する。ここまではよいのだが、精製土器・磨消縄文系器種 J28-70～J28-79、最古相からは若干後続すると思われる羽状沈線文系器種 J28-80～J28-87、隆帯を失った関東系粗製土器 J28-88、J28-89 は、加曾利 B2 式後半石神遺跡(小諸市)1号住居段階に帰属する。J28-90～J28-99 の無文精製浅鉢、注口土器(J28-100～J28-103)、釣手土器(J28-104)、J28-105～J28-128 の無文粗製深鉢(J28-127、J28-128 はより後出の可能性を含む)は、前半・後半を問えないが加曾利 B2 式に帰属すると思われ、縦隆帯列深鉢 J28-129、格子目状斜沈線の関東系粗製土器 J28-130～J28-132、全面縄文の異系粗製土器 J28-133、J28-134 も同様だろう。J28-70 以下を加曾利 B2 式前半に限定することはできず、加曾利 B2 式後半の資料は軽視できないことになる。

加曾利 B1 式以前の J28-135～J28-154 は大きな破片を含むものの混入品として除外してよいだろう。上ノ段式 J28-155～浮線文期の浅鉢 J28-186 は問題だが、上ノ段式と共伴しそうな無文粗製深鉢 J28-161、J28-162 以外は破片が小さく、特定の時期に集中することはない。適切な解釈ができるわけではないが、これらは重視しなくてもよいのではないか。

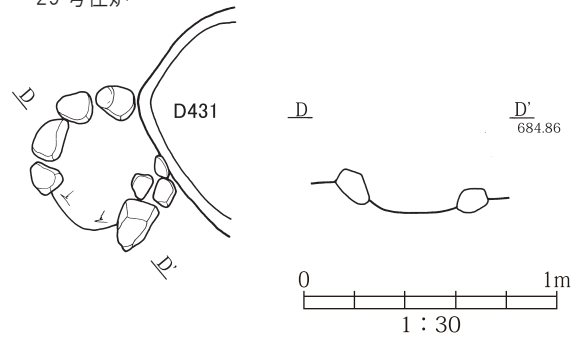
ピット出土土器や上ノ段式以降の土器の問題などの難点を含みつつも、28号住居は加曾利 B2 式の幅の中に位置づけてよいと判断するが、その前半には限定しきれないだろう。なお、土製品が若干あり、中実の土偶胴部1点は28号住居の土器のまとまりと整合しそうだが、耳飾1点は晩期に属するだろう。

29号住居

29号住居遺物出土状況



29号住居



29号住居・関連グリッド出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期				晩期			後晩			
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
29住	1845								1 10	2 20	1 10	2 20	3 110			21 350		4 50
S27W27 (29・33住)	38085								12 80	45 780	13 130	19 290	76 1000	11 280		334 3300	28 160	93 2180
S27W30 (29住)	18720								24 530	7 230	5 100	16 360	9 240		97 1330	2 10	46 1410	
S30W27 (29・33住)	19830			2 150		2 40	1 40	1 20	18 250	40 940	8 160	5 160	5 100	7 110		77 1530	13 130	52 1460
S30W30 (29住)	13535								5 60	25 460	10 160	15 410	5 90	8 490		68 1280	5 40	26 1080

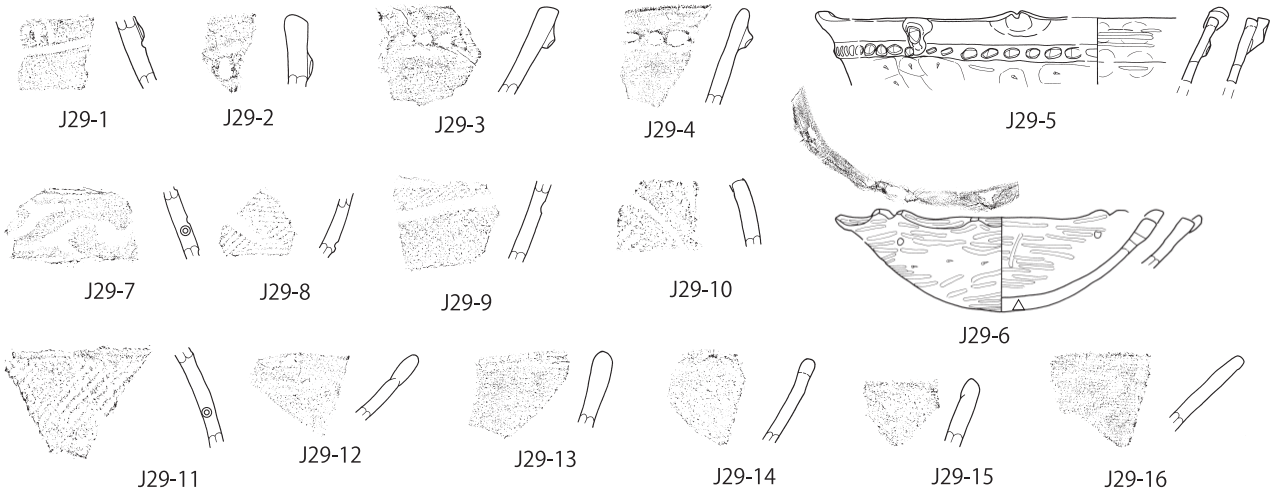


図 141 29号住居実測図、出土土器実測図・拓影(1)

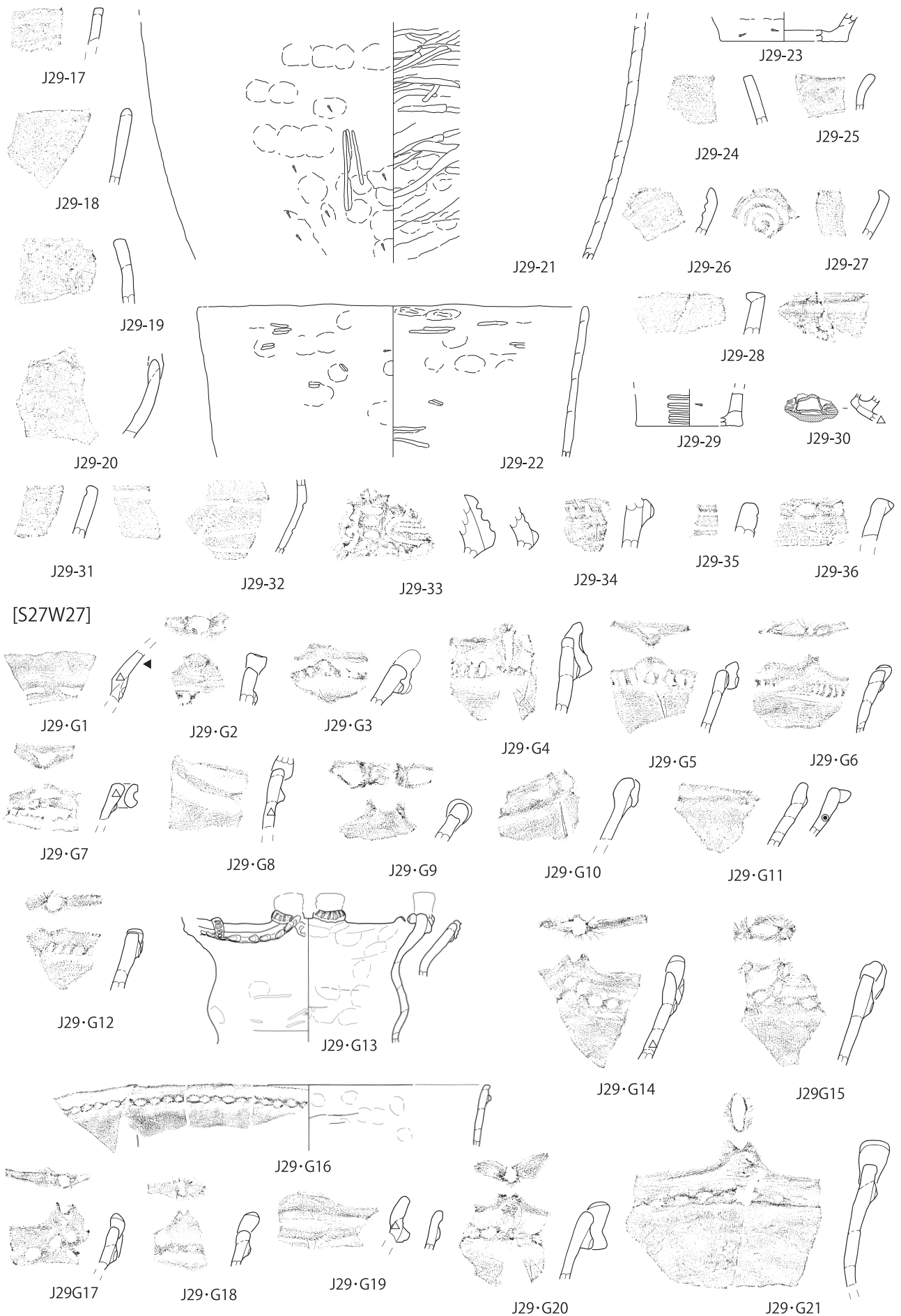


図 142 29号住居出土土器実測図・拓影(2)、関連グリッド出土土器・拓影(1)

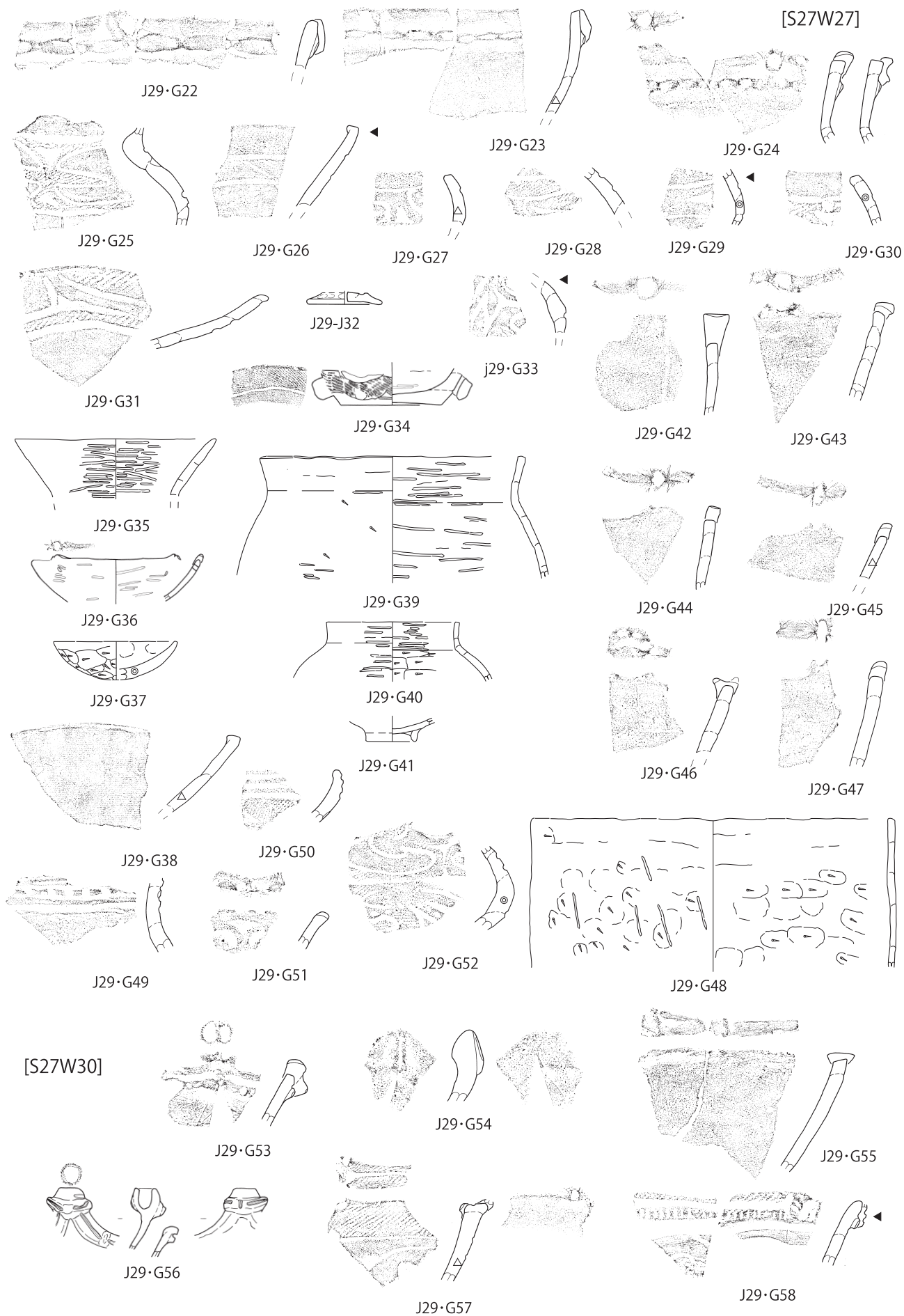


図 143 29号住居関連グリッド出土土器実測図・拓影(2)

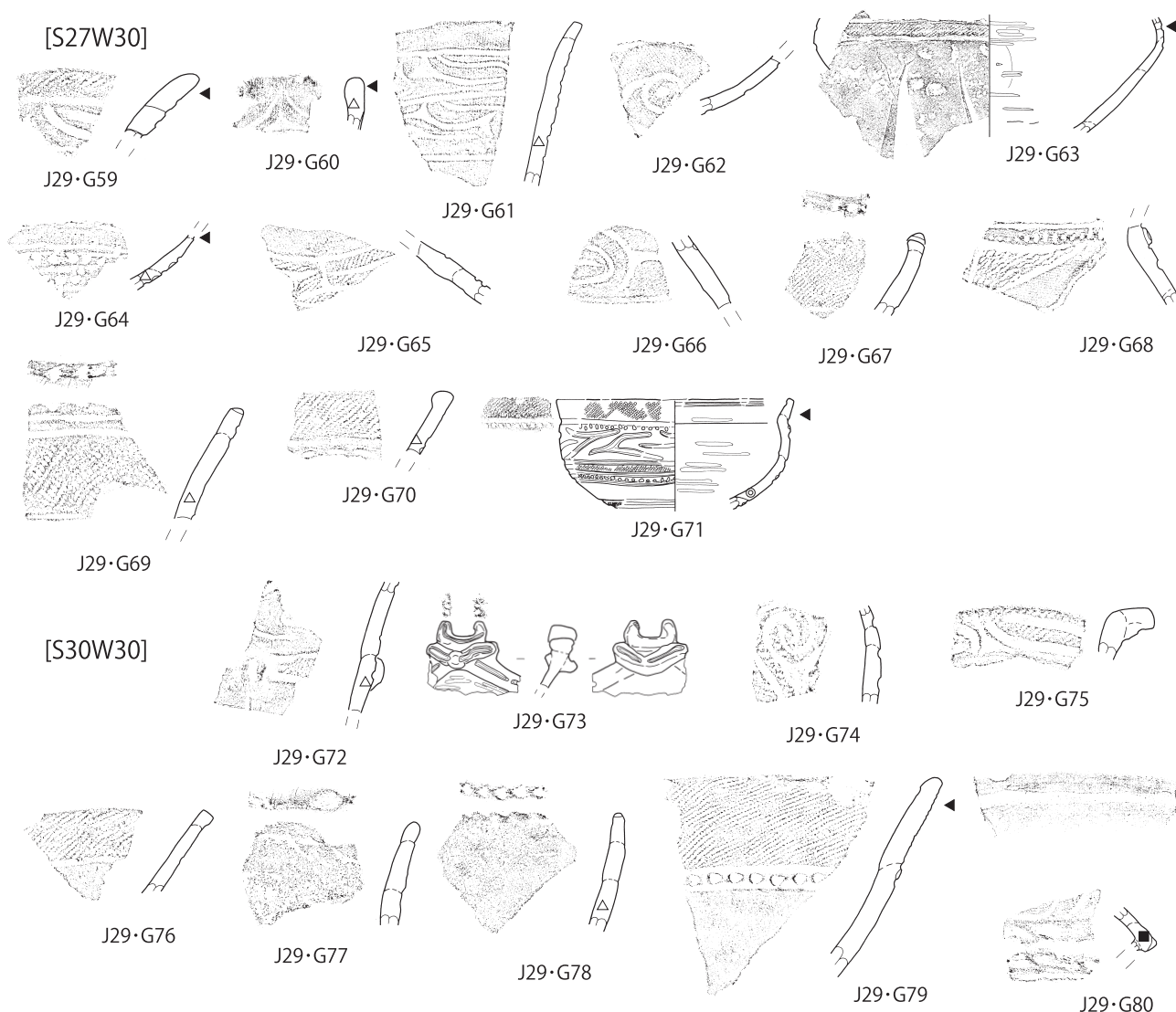


図 144 29号住居関連グリッド出土土器実測図・拓影(3)

(23) 29号住居 [図 141～144、写真図版 24、25] 【晩期初頭～佐野 1a 式】

S27W27～S30W30の4グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第IV層上面で、33号住居に続いて29号住居の掘り方を平面的に検出した。29号住居が33号住居を切り、土坑430、土坑432、土坑587に切られることを平面で確認した。また、床面で29号住居の炉の一角が土坑431に切られることも確認した。南北3.5m、東西3.3mの正円形の平面を呈する。埋土は東辺以外では10cmに満たず、分層はできなかった。壁はほぼ垂直で、東壁が20cmあるが、他は数cmしか把握できなかった。床面らしい硬化面は認められなかった。住居中央やや西寄りには、径60cmほどの範囲に、人頭大の円礫6個を円形に配置して石囲炉が造られる。炉の北東辺は土坑431に切れ、南西辺の礫も失われている。残存する縁石は被熱のためか風化が著しい。炉の中央はわずかに窪み、炉底面は被熱で赤化している。床面で発見されたピットは少なく、いずれもやや浅い。29号住居出土として取り上げられた土器は少ないが、埋土が浅いので床面付近の出土だろう。

29号住居出土土器は少量のうえ、大形破片はわずかしかなく、炉等の施設内出土品も無い。堀ノ内式～浮線文土器まで時間幅の広い破片の中で図化できた4点は、第5段階古相の平縁隆帯文深鉢J29-5、隆帯文系の口縁突起を採用した無文精製浅鉢J29-6、隆帯文タイプの整形技法をもつ無文粗製深鉢J29-21とJ29-

22だ。相対的に大きいのは中ノ沢B類型に関わる破片ばかりであること、時期別個体数・重量表でもこの段階が最大であること、佐野1a式より新しいと積極的に評価できる破片は浮線文らしいJ29-36の1点のみであること、29号住居がすっぽり重なるS27W27グリッドの時期別個体数・重量表でも加曽利B期とともに晩期初頭が突出していることなどを併せれば、29号住居は晩期初頭～前葉(佐野1a式)に帰属することが期待できる。加曽利B式土器が多いのは、その時期の遺構か包含層を壊して29号住居が構築されたからだろう。一方、中ノ沢B類型は第5段階が多いものの、第4段階のJ29-2もある。入組文・三叉文を持つ土器も、大洞B2式の三叉文を描くJ29-7と、大洞BC式並行と推測される宮崎遺跡2号住居に近いJ29-9が混在するなど、若干の時間幅を内包する。耳飾も2点あり、1点は後期だがもう1点は晩期初頭の可能性がある。29号住居は後代に毀損されて床面だけが辛うじて残り、床附近の遺存資料だけが挟雑物と共に取り上げられたからだと憶測する。29号住居は晩期初頭～前葉の幅の中に位置づけたい。

29号住居が含まれるグリッドの中から、晩期初頭～前葉の土器を抜き出して、参考までに図示した。隆帯文土器が特に多いS27W27では中ノ沢B類型第4段階と第5段階が相半ばし、入組文・三叉文系統も一定の時間幅を有するようで、29号住居のあり方と整合的である。ただし、J29・G50～J29・G52、J29・G70、J29・G71、J29・G79など宮崎遺跡2号住居より新しそうな土器も存在することには注意されたい。中実の土偶肩部1点もこの時間幅の中に位置づけてよさそうだ。

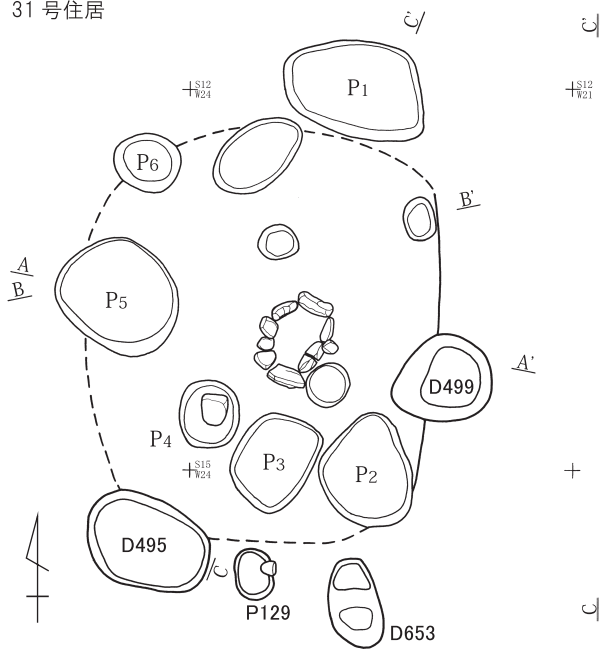
(24) 31号住居 [図145～148、写真図版25、26] 【加曽利B1～B2式】

S9W21～S15W24の5グリッドにかけて位置すると推定する住居である。第IV層上面で31号住居の石囲炉の縁石と配石26の礫を検出、続いて住居のピットと、土坑、配石の浅い掘り方を検出したが、住居の掘り方はつかめなかった。精査の結果、31号住居のP1が配石26の一角を切ることと、土坑495、土坑499が31号住居床を切ることを平面で確認した。炉の周囲に床面らしい硬化面はなく、住居範囲は確定できないが、炉を中心にしてピットが配置されると考え、ピットの広がる範囲を住居と見れば、径4m程度の広さを持つ可能性がある。住居の中央付近と推定される位置の60cm×75cm程度の範囲に、円礫8個を長円形に配置して石囲炉とする。炉中央はわずかに窪み、炉底は被熱で赤化、縁石の多くは被熱のためか風化が著しい。炉とピット内から土器が出土した。31号住居として取り上げられた土器は、床面出土なのだろう。床面にはピットが幾つか残されるが、いずれも浅い。

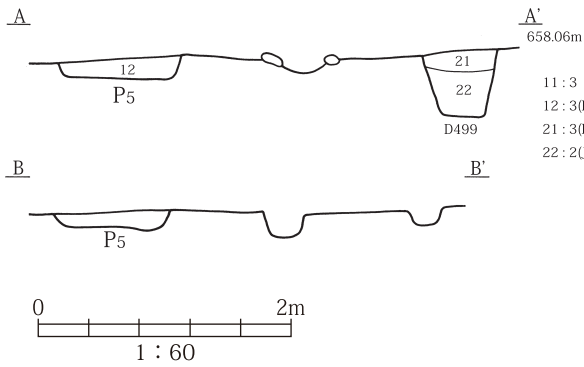
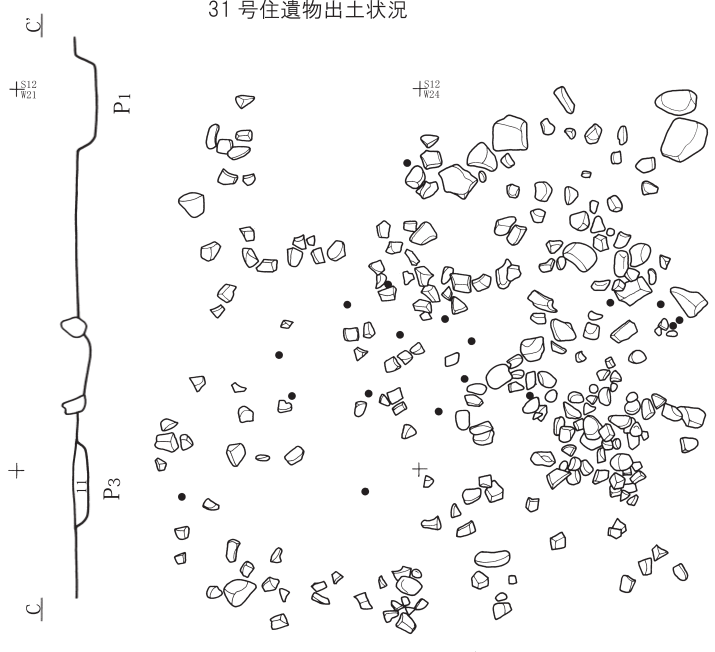
出土土器は量的には加曽利B式が他を圧倒するが、弱点もある。炉内出土土器は細片で1点ごとに時期が異なる。P1出土土器のうち破片が大きい2点は無文粗製深鉢で、J31-9は後期中頃、J31-13は晩期前葉の可能性がある。P3とP4で目立つJ31-27とJ31-30の2条の隆帯とそれを繋ぐ突起は、宝ヶ峰式の壺形の注口土器の中に散見される装飾の変形かと思われる。住居周辺グリッド出土のJ31・G4は、より宝ヶ峰式に近いだろう。P2の最大破片J31-22は加曽利B2式の粗製深鉢で、P5は加曽利B1～B2式が大半を占める。だが、P2～P5のすべてに、小破片ながら晩期隆帯文土器が混じる。施設以外の出土土器で、最多で破片も大きめなのは加曽利B1式、次が加曽利B2式で、それ以外の時期は小破片で散漫だが、やはり、晩期前葉の土器が混じる。

31号住居は廃絶後に削平等により損壊され、床面と施設だけしか把握できなかったものと思われる。床に石敷が無かったと断定することもできず、加曽利B式期の住居の可能性は否定しきれないだろう。住居の損壊過程で床面付近にまで晩期土器が混入する事もありえたのではなかろうか。不安な点を残すが、31号住居は加曽利B1～B2式に帰属する可能性が高いと判断する。なお、J31-27・J31-30とJ31-82の類例を住居関連グリッドから抜き出して、参考までに図示した。また、中実の土偶体部が2点、耳飾が4点出土しているが、より新しい時期の産だろう。

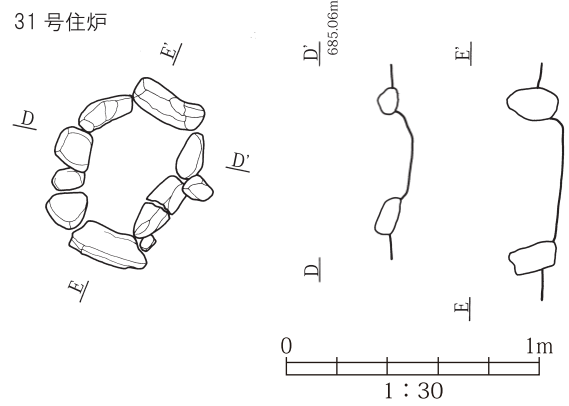
31号住居



31号住居遺物出土状況



31号住居



31号住居・関連グリッド出土土器の時期別個体数 (上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量 g)

地点	重量 g	中期						後期				晩期			後晩			
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
31住	10425			1 20					11 150	31 1360	7 80	3 30	8 160	7 90		54 1070	3 30	32 1170
S12W21 (31住)	37360	1 20				1 20			3 10	12 180	6 140	12 260	11 150	10 140		229 2950	5 40	75 2540
S12W24 (31住)	45680	1 20							11 70	49 680	24 300	17 310	52 1140	7 110	1 10	247 2560	24 200	105 3290
S15W21 (31住)	45845			2 60		1 10	1 50		20 140	64 1300	31 520	19 370	22 320	28 280	3 50	290 3670	21 150	105 2900
S15W24 (31住)	36925				1 30	1 10			10 70	79 1420	45 1290	19 260	5 70	11 80		173 2050	8 70	91 2080

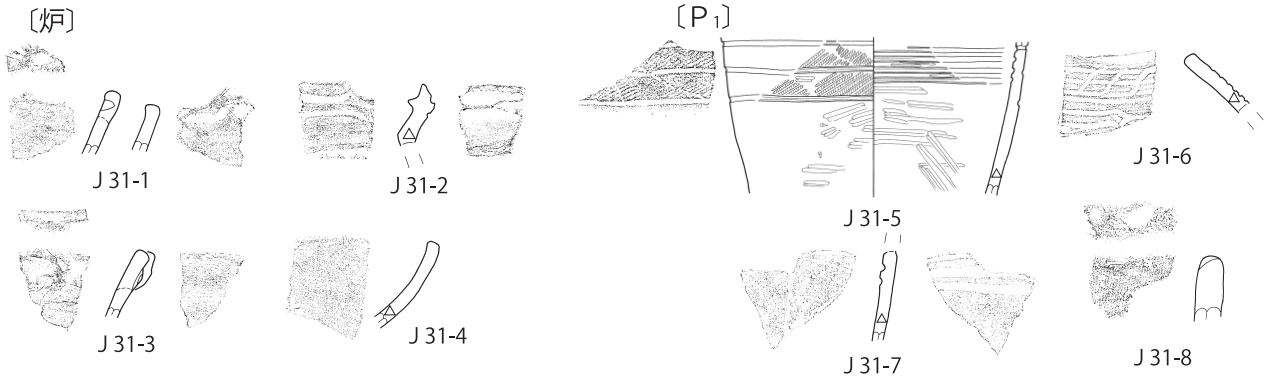
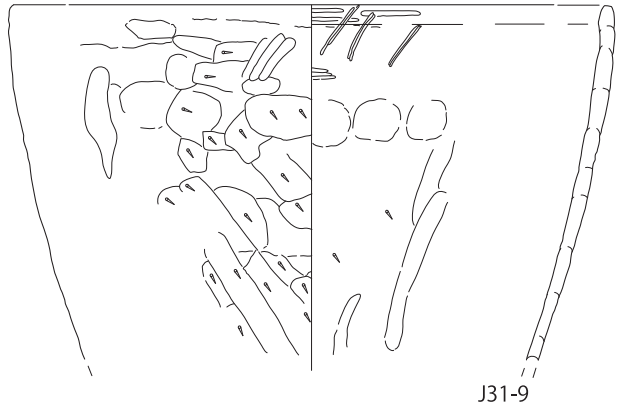


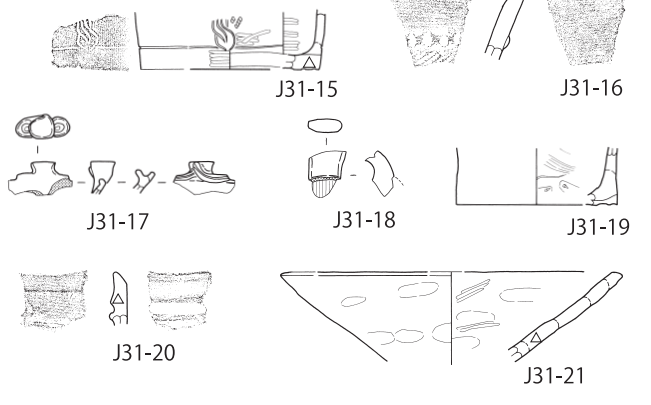
図 145 31号住居実測図、出土土器実測図・拓影(1)

[P₁]



J31-9

[P₂]



J31-15

J31-16

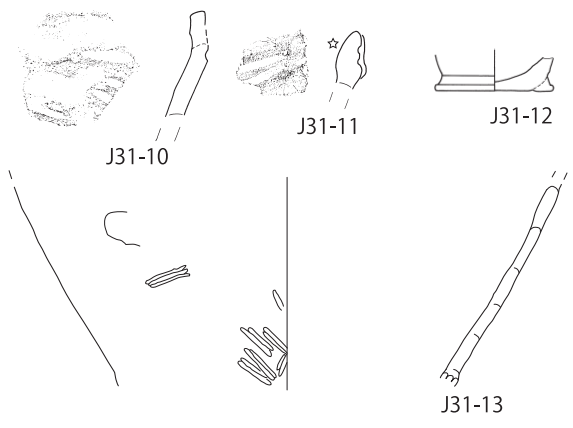
J31-17

J31-18

J31-19

J31-20

J31-21

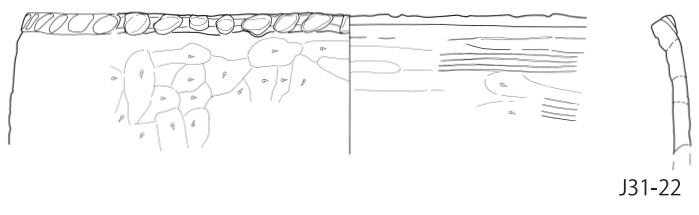


J31-10

J31-11

J31-12

J31-13

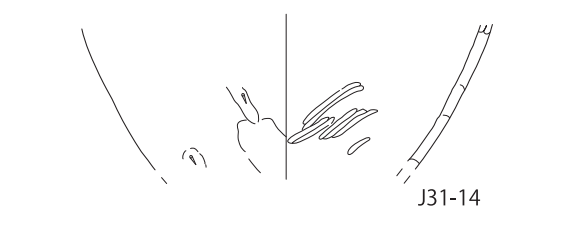


J31-22

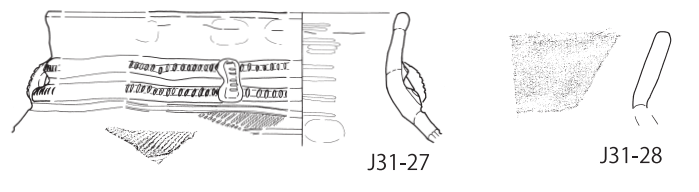
J31-23

J31-24

J31-25



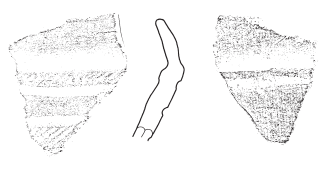
J31-14



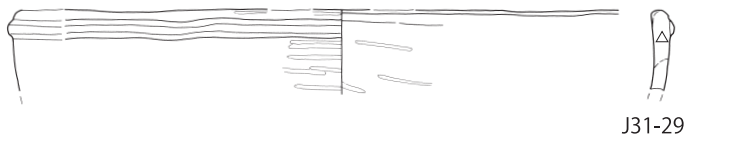
J31-27

J31-28

[P₃]

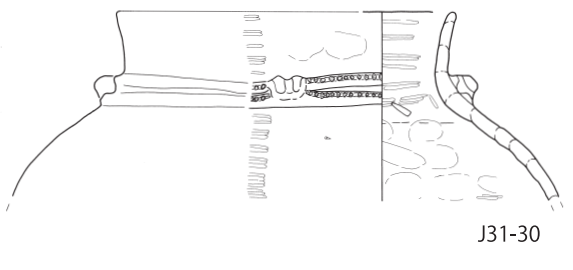


J31-26



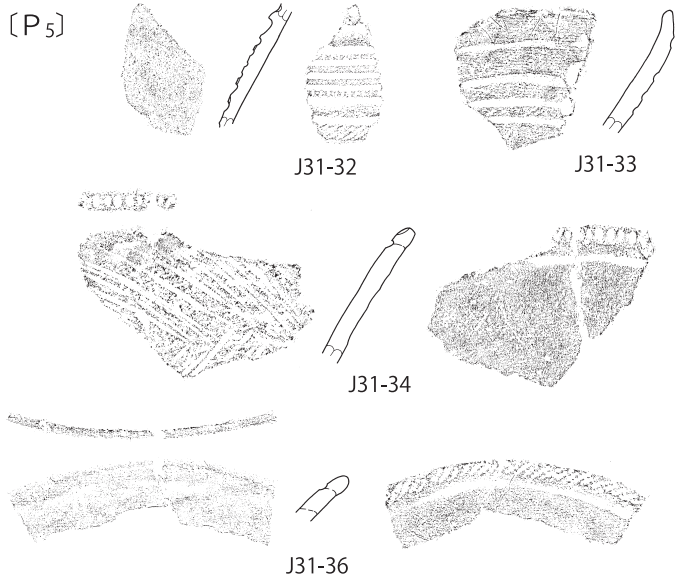
J31-29

[P₄]



J31-30

[P₅]



J31-32

J31-33

J31-34

J31-31

J31-35

J31-36

图 146 31 号住居出土土器实测图·拓影 (2)

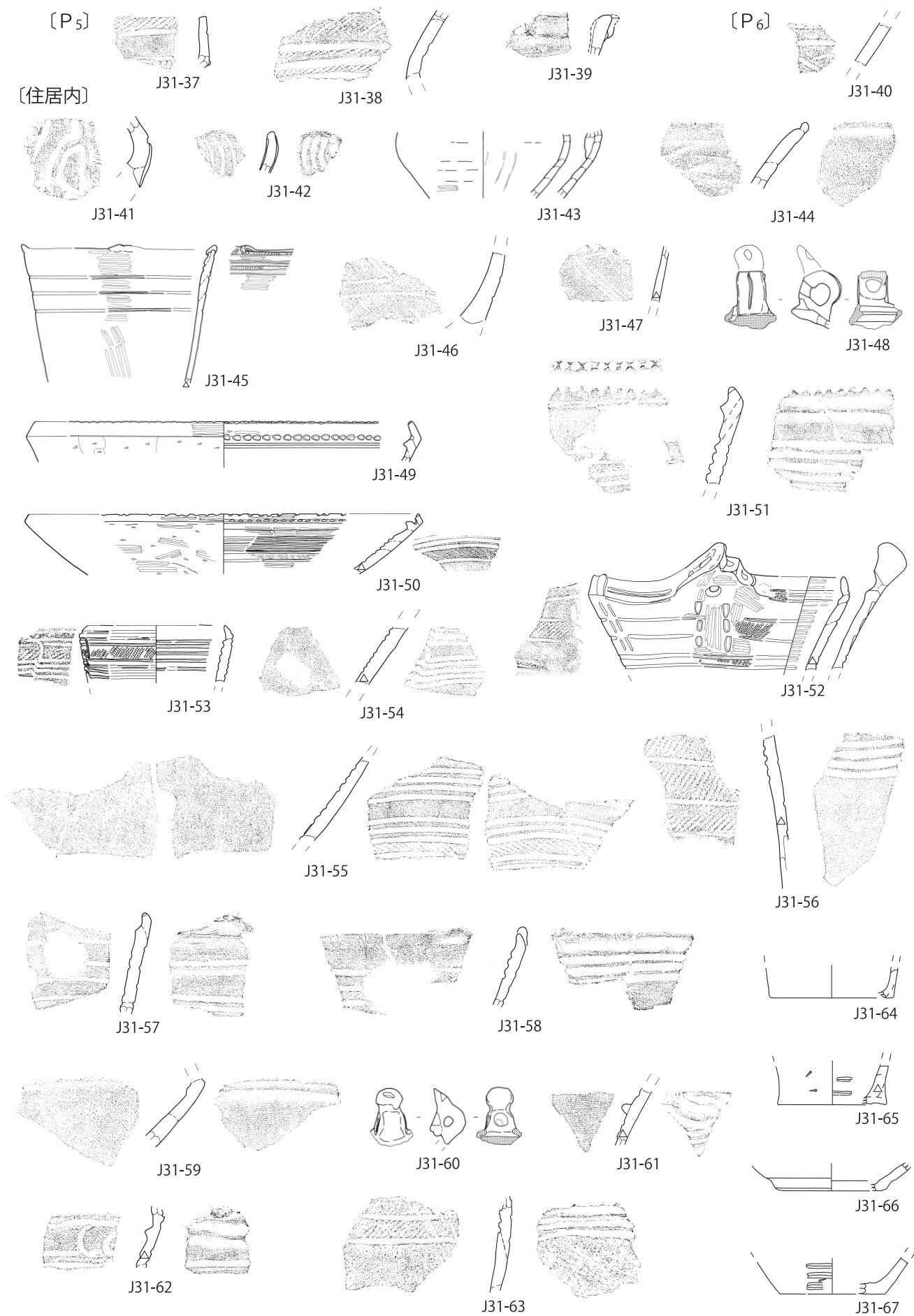


图 147 31 号住居出土土器实测图·拓影(3)

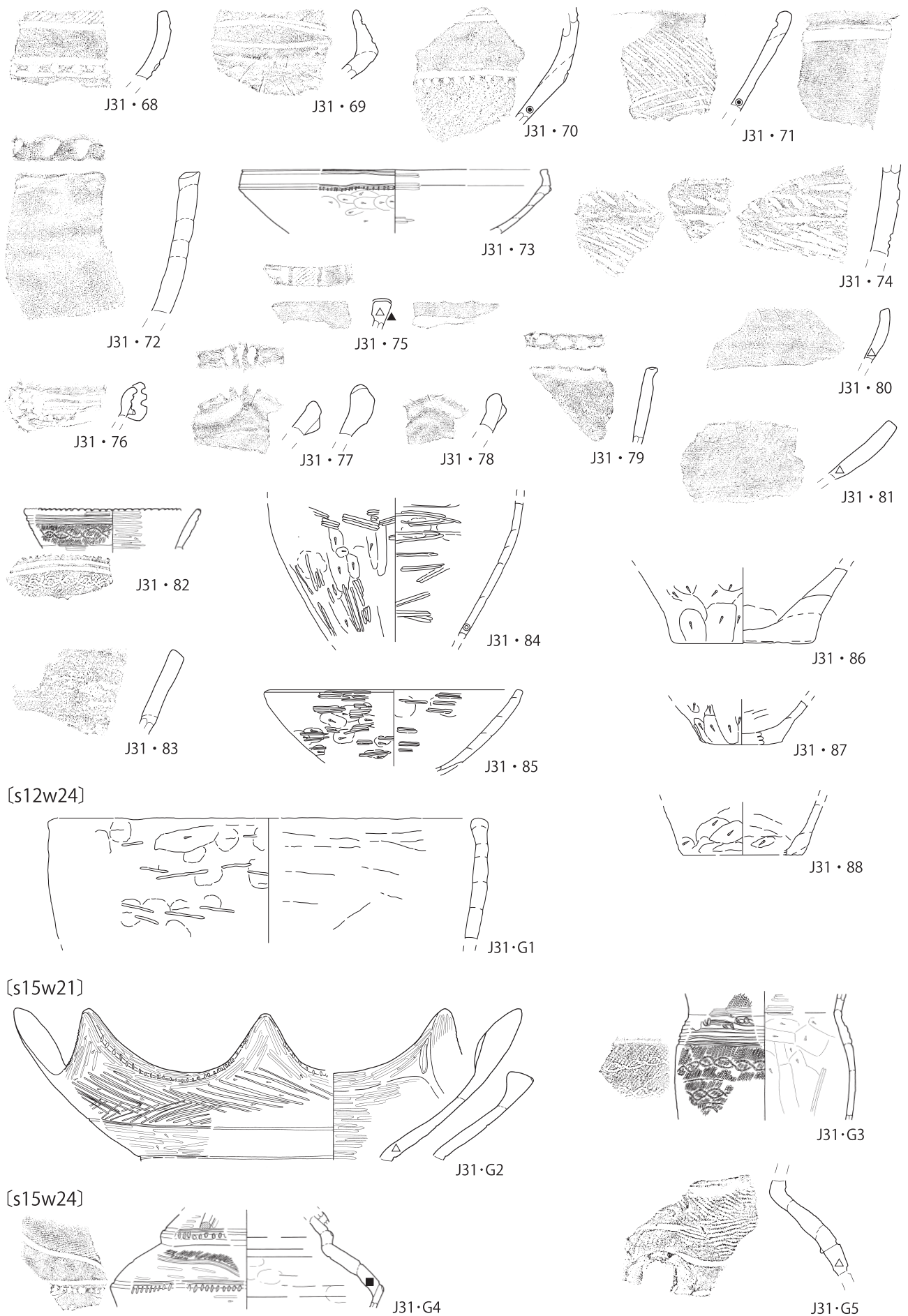


図 148 31号住居出土土器実測図・拓影(4)、関連グリッド出土土器実測図

(25) 33号住居 [図 149～152、写真図版 26、46] 【長野県史・中期中葉】

S27W24～S30W27の4グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第IV層上面で配石23を検出、続いてそれを取り囲む33号住居掘り方を検出した。さらに29号住居、竪穴4と土坑、埋甕3も検出し、精査の結果、33号住居の埋土上に配石23が乗ることと、33号住居が、29号住居、竪穴4、埋甕3、土坑429、土坑432に切られることを平面で確認した。33号住居は南北4.7m、東西3.5mの長円形の平面を呈する。埋土は分層できなかつた。壁はほぼ垂直で、20cm～30cm残る。炉の周囲には床面らしい硬化面が認められた。住居を切る配石23の底に伏せて置かれた加曾利B1式浅鉢S23-1の直下から、焼土に続いて平出3A系深鉢J33-1を正位に埋置した埋甕炉が検出された。埋甕内には焼土は無かつた。埋甕炉の南側床面は径50cmほどが焼けて赤化しており、埋甕炉に先行する炉床の可能性もある。壁際には小規模なピットが並ぶが、深さは20cmほどしかない。炉体土器J33-1と、記録漏れでどれか特定できないP1出土の2点以外は、33号住居として取り上げられた。埋土はある程度厚いので、床面近くの出土かどうかは不明だ。

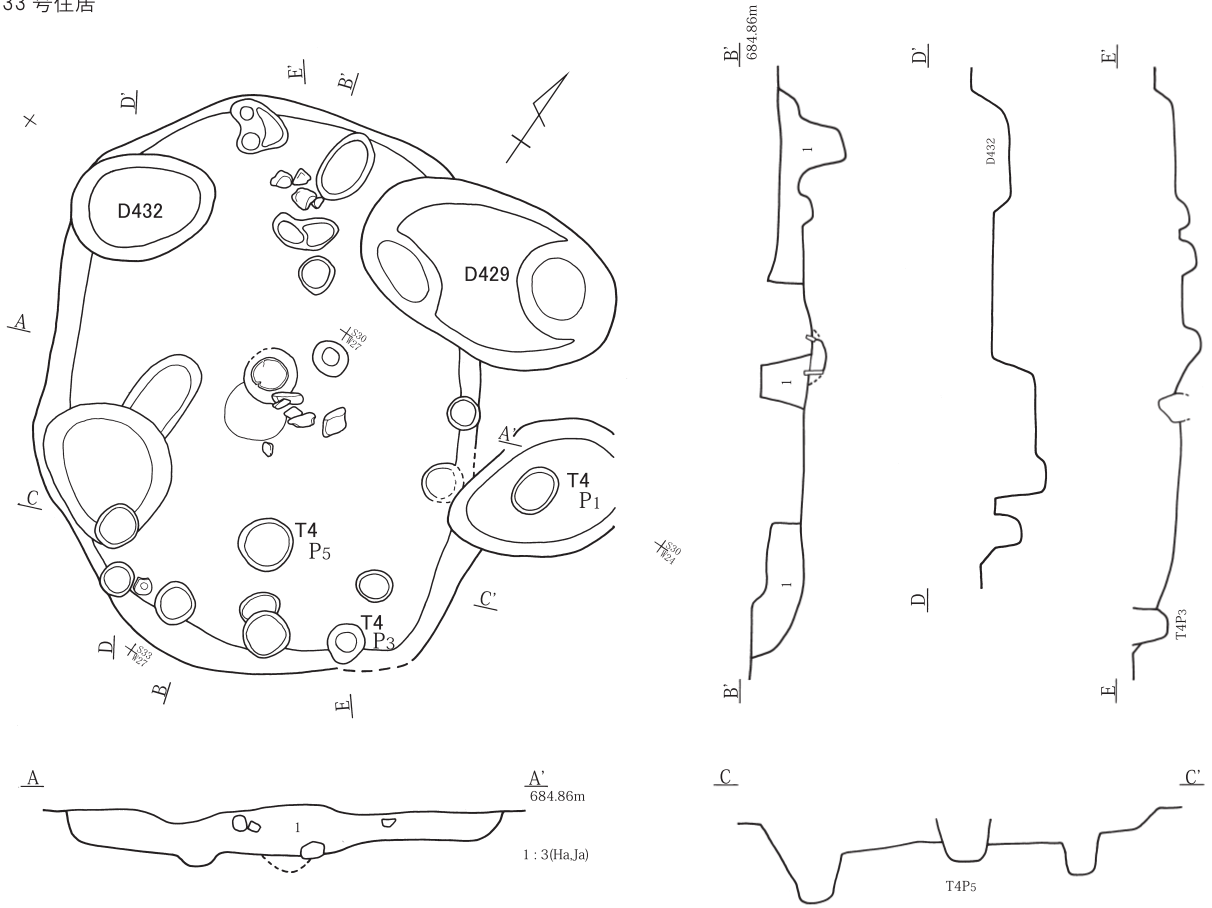
炉体土器J33-1が時期決定の最大の根拠である。平出3A系深鉢体部で、中期中葉の幅の中に位置づく。P1出土の浅鉢底部J33-2も同様の時間幅と考えられるが、小破片J33-3は加曾利B式の可能性がある。中期中葉に属する破片は埋土出土のJ33-4～J33-12しかなく、全面縄文施文のJ33-18～J33-21を加えても、少量に留まる。

33号住居は中期中葉より新しい土器が多い。住居廃絶後の窪みが後代に利用されたのだろう。中期後葉(J33-13～J33-17)～後期前葉(J33-24～J33-31)は小破片だが、後期中葉(J33-35～J33-47)は出土量が多く、大きめの破片(J33-40～J33-42など)は加曾利B2式で、無文粗製深鉢J33-51も加曾利B2式以降の可能性が高い。33号住居を切る配石23は加曾利B1式に属するので、これらの破片は配石に帰属するのでもなさそうだ。配石23とは別の土坑やピットなど小規模な遺構を発見できなかった可能性があるかもしれない。J33-61は時期不明の小形の壺もしくは注口土器で、口縁部・底部を欠く。精度は低いが、体部全体に細く鋭い沈線(櫛歯状工具ではない)を用いて、一般的な文様とは異なった線刻画に類する図柄を描く。これも未検出の小規模遺構に伴った可能性があるだろう。上ノ段式(J33-48)や晩期初頭型式(J33-56、J33-57)は破片が小さく散漫なので、遺構の存在は否定的だ。そのほか、後期以降と思われる種別不明の土製品が1点出土している。

(26) 34号住居 [図 153、写真図版 27] 【長野県史・中期中葉Ⅲ期】

S9W39～S15W42の5グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第IV層上面で配石6を検出し、続いてその下から34号住居の掘り方と、土坑34、土坑83、土坑388、土坑504、P3、谷状低地縁辺を平面的に検出した。精査の結果、34号住居が切り合う遺構全てと谷状低地に切られることを確認した。谷状低地にも切られるとの調査所見であるが、第二章第1節で述べたとおり、住居北辺が第Ⅲ層中に構築され、廃絶後に浸食作用で喪失したと考えるべきで、調査時の所見を変更する。遺構図は訂正しようがないので、旧見解のままとするが、結果的に誤った図にはなっていない。住居は南北3.3m以上、東西4.5mの円形基調の平面形を呈すると推測する。埋土は壁際から急傾斜で分層できるので、短期間の埋没か意図的埋め戻しの可能性がある。壁はほぼ垂直で、壁高は最も高い南辺で30cmほど残る。床は住居中央に硬化面が認められる。住居ほぼ中央と推測される辺りに、径40cm、深さ10cmの窪みを造り、その縁辺に長辺20cmほどの円礫を配置して石囲炉を構築する。円礫は6個で、内4個は風化してぼろぼろに崩れているが、炉の底面は赤化していない。壁際に寄ってピットが5基配置されるが、いずれも深く、柱痕跡が残るものもあって、柱穴の可能性が高い。住居出土土器は少なく、炉など施設内出土土器は無い。住居出土として取り上げられた土器は、床面出土かどうかは不明だ。

33号住居



33号住遺物出土状況

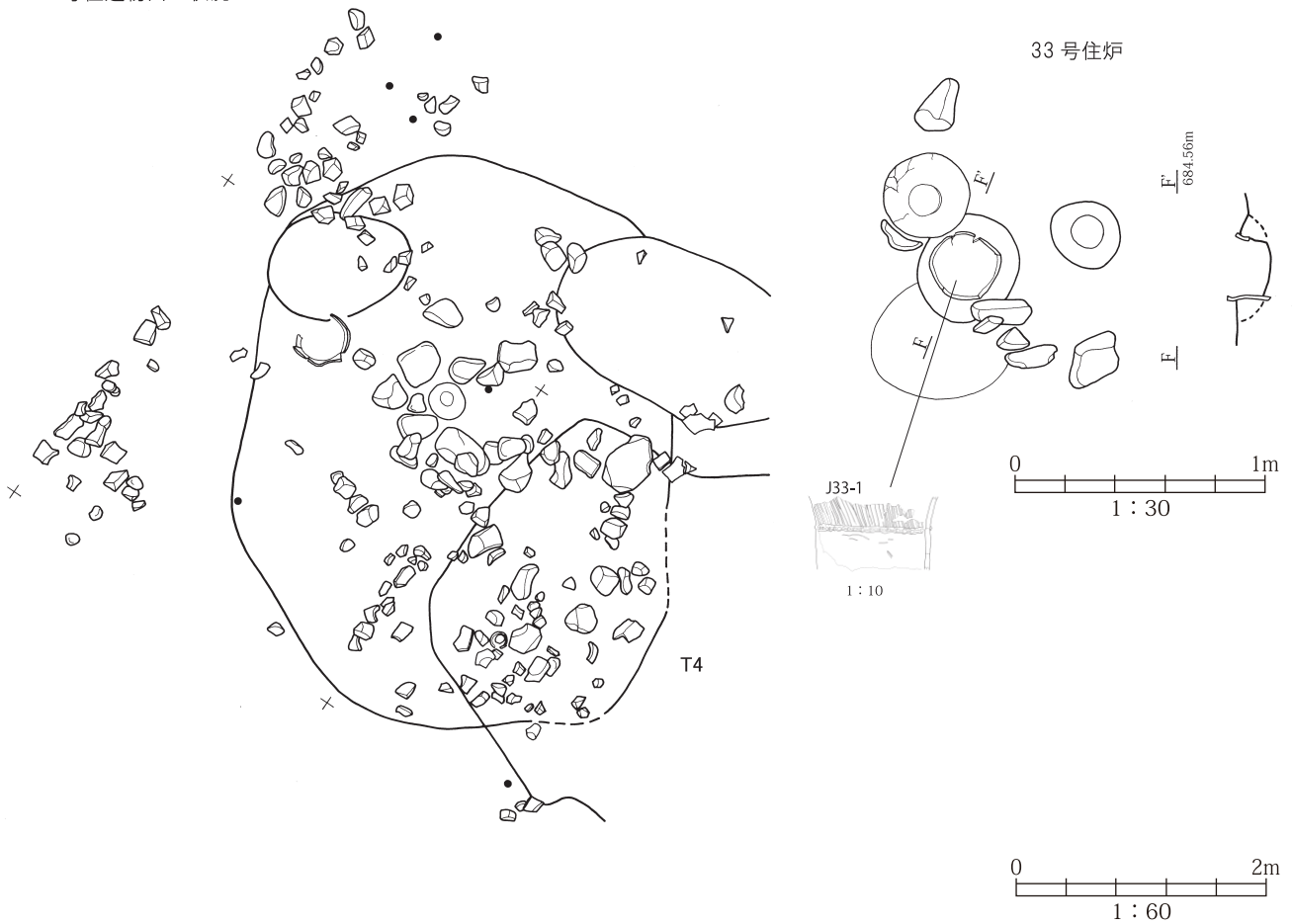


图 149 33号住居実測図

33号住居・関連グリッド出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期				晩期			後晩			
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
33住	12450			1	6		12		12	24	5		4	4		36	1	28
					10	170		1210		150	1810	30		80	50		600	20
S27W24 (33住・豎4)	32200		1	3			1		47	36	8	4	6	11	1	129	3	72
				30	90			20		520	660	160	110	150	240	100	2220	20
S27W27 (29・33住)	38085								12	45	13	19	76	11		334	28	93
										80	780	130	290	1000	280		3300	160
S30W24 (33住・豎4)	27755			2					30	10	2	7	4	18	3	119		64
					50					390	340	10	130	80	280	40	1850	
S30W27 (29・33住)	19830			2		2	1	1	18	40	8	5	5	7		77	13	52
					150		40	40	20	250	940	160	160	100	110		1530	130

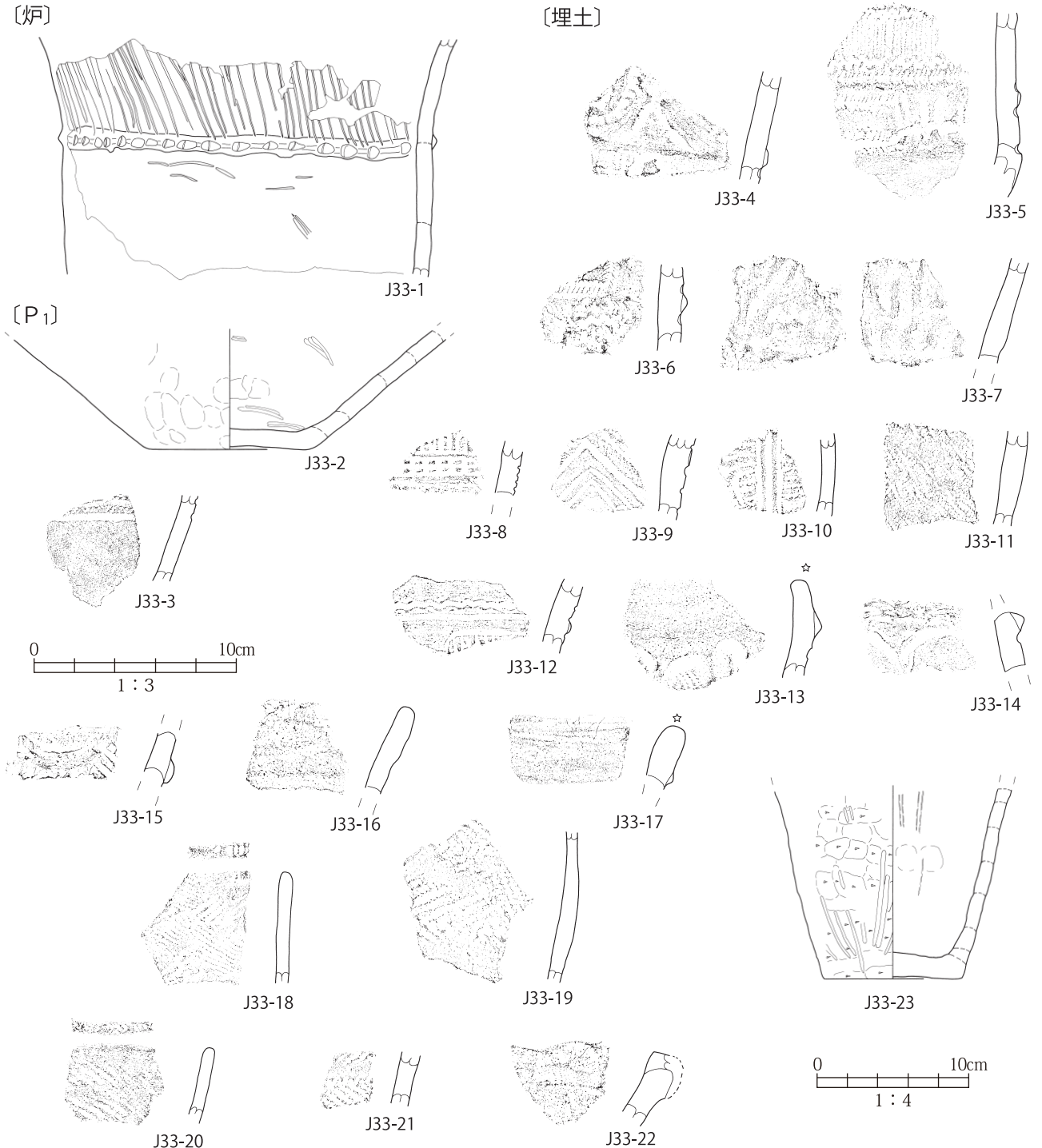


図 150 33号住居出土土器実測図・拓影(1)

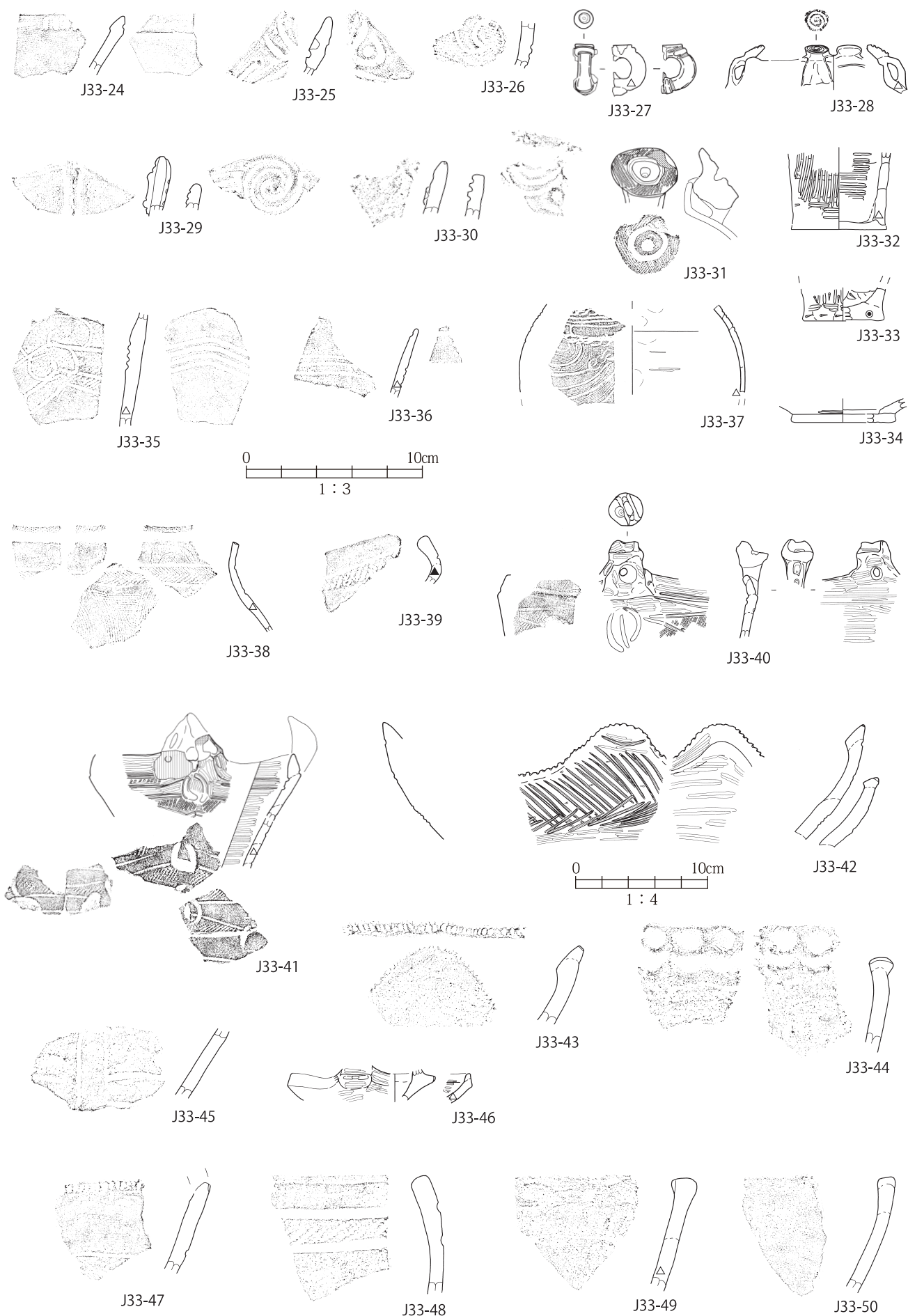


图 151 33 号住居出土土器实测图·拓影 (2)

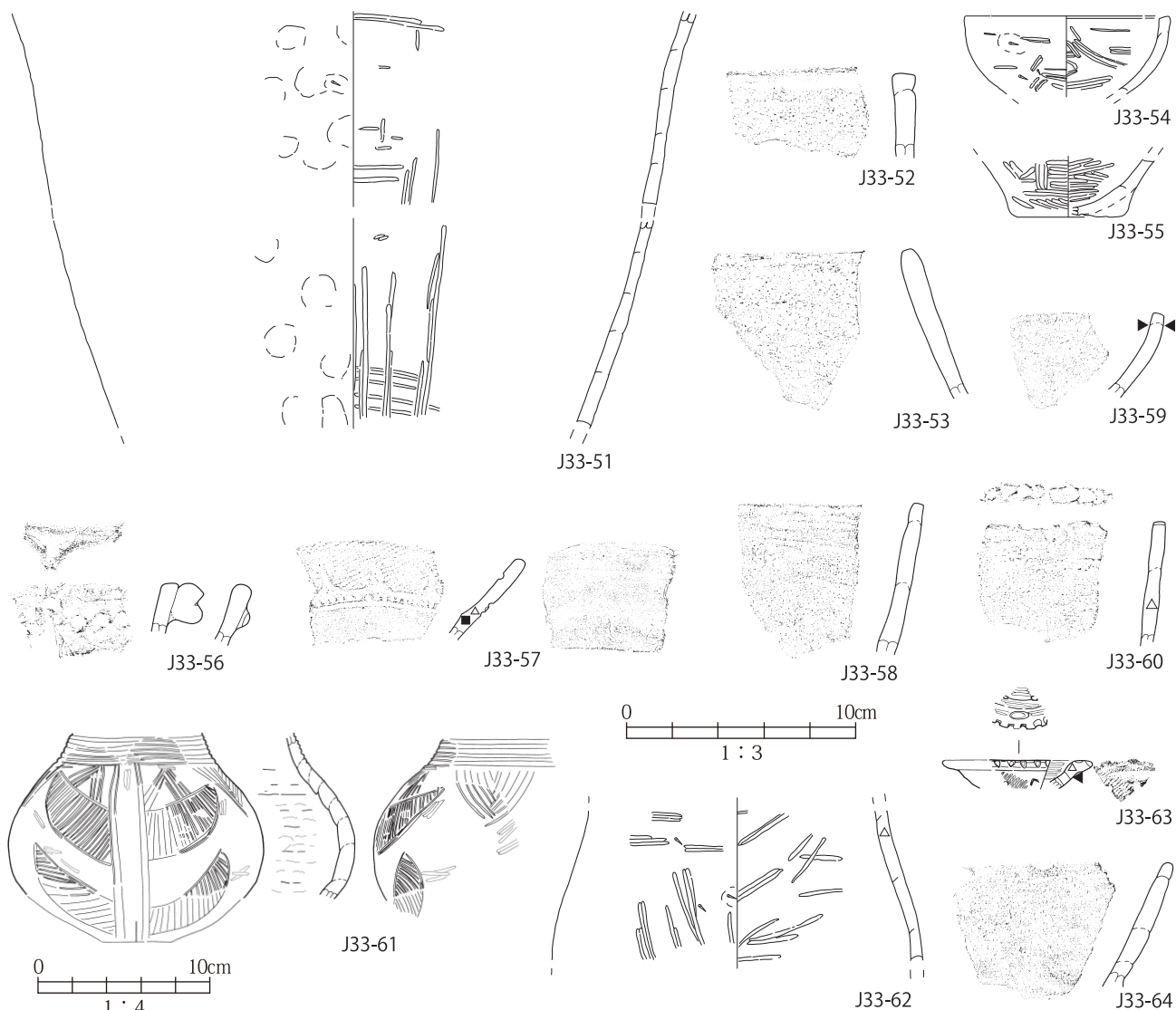


図 152 33号住居出土土器実測図・拓影(3)

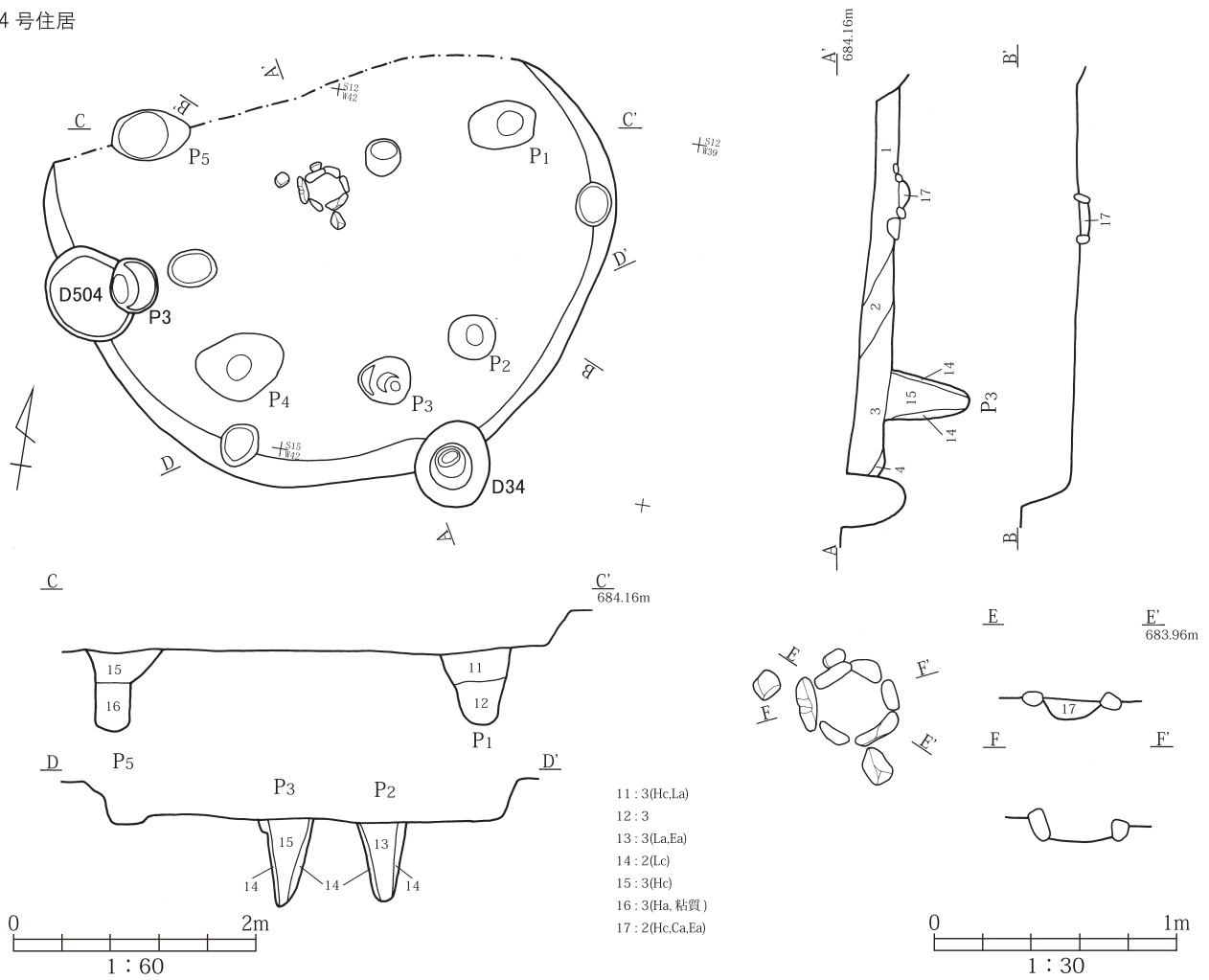
大形破片は図示した2点のみで、いずれも中期中葉Ⅲ期と推測される。34号住居は中期中葉Ⅲ期に属すると判断する。

(27) 35号住居 [図 154、155、写真図版 27、28、46] 【長野県史・中期後葉Ⅲ期】

N30W3～N24W6の5グリッドにかけて、谷状低地の北半に位置すると推定される住居で、中心はN27W3である。谷状低地の北半の土層堆積状況は、谷状低地南縁とはかなり異なる。谷状低地を埋める第Ⅲ層下位で土器の大破片を発見、その下の第Ⅳ層上面で35号住居の炉縁石を検出し、周辺を精査してピット群も検出した。床面らしい硬化面は判然とせず、掘り方も検出できなかったが、炉を含めて第Ⅳ層上面に構築された住居である。周囲には遺構はないので、ピット群もこの住居の施設だと判断し、住居の範囲を径4m程度と推定した。住居中央と推測される辺りに、50cm×80cm程の浅い窪みを造り、周囲に人頭大ほどの円礫を配して石囲炉とする。縁石は9個残っているが、2個ほどは喪失したと思われる。残存する縁石の一部は被熱で風化していた。ピット6基は炉を取り囲むように配され、残存する深さは10cm程度だった。

35号住居出土として取り上げられた土器は微量しかないが、N27W3グリッド出土の大形破片(J35-1、J35-2)は35号住居の炉縁石の上で発見された土器だと思われる。グリッド出土土器は唐草文系土器が主

34号住居



34号住居・関連グリッド出土土器の時期別個体数 (上段: 口縁部破片数、下段: 口縁部重量 g)

地点	重量 g	中期					後期				晩期			後晩				
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
34住	9435	2				2	2	7		3	3	13			21	5	9	
S12W39 (34住)	25210			2		1	4	1		5	2	3	11	1	70		52	
S12W42 (34住)	17130			2				1	1	6	4	2	8	5	3	44	5	32
S15W39 (34住)	14375			1			1	3	5	5	5	8	9	2	68	3	36	
S15W42 (34住)	11900		2	2		3	5	1	1	6	10	3	10	4	52		29	
			90	30		200	170	10	10	190	170	110	110	60	830		1100	

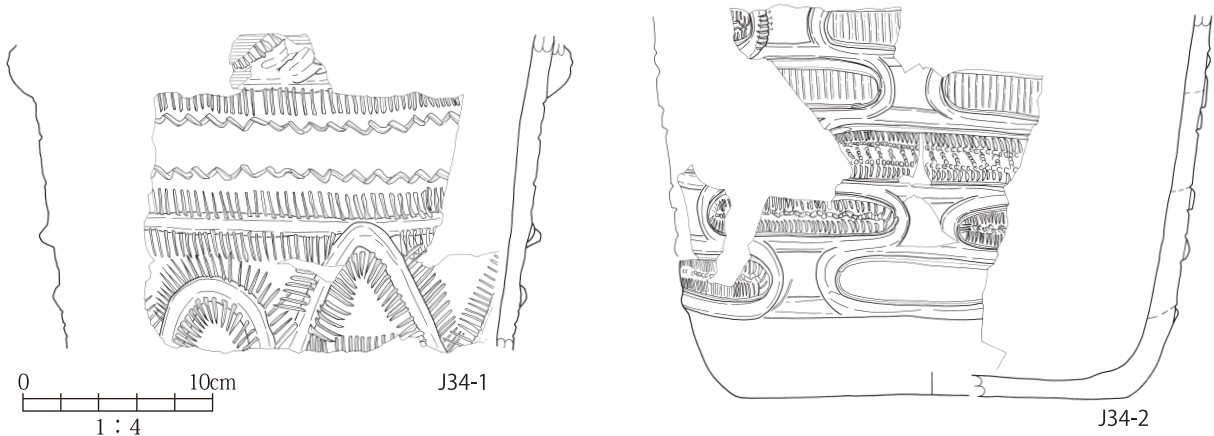


図 153 34号住居実測図、出土土器実測図

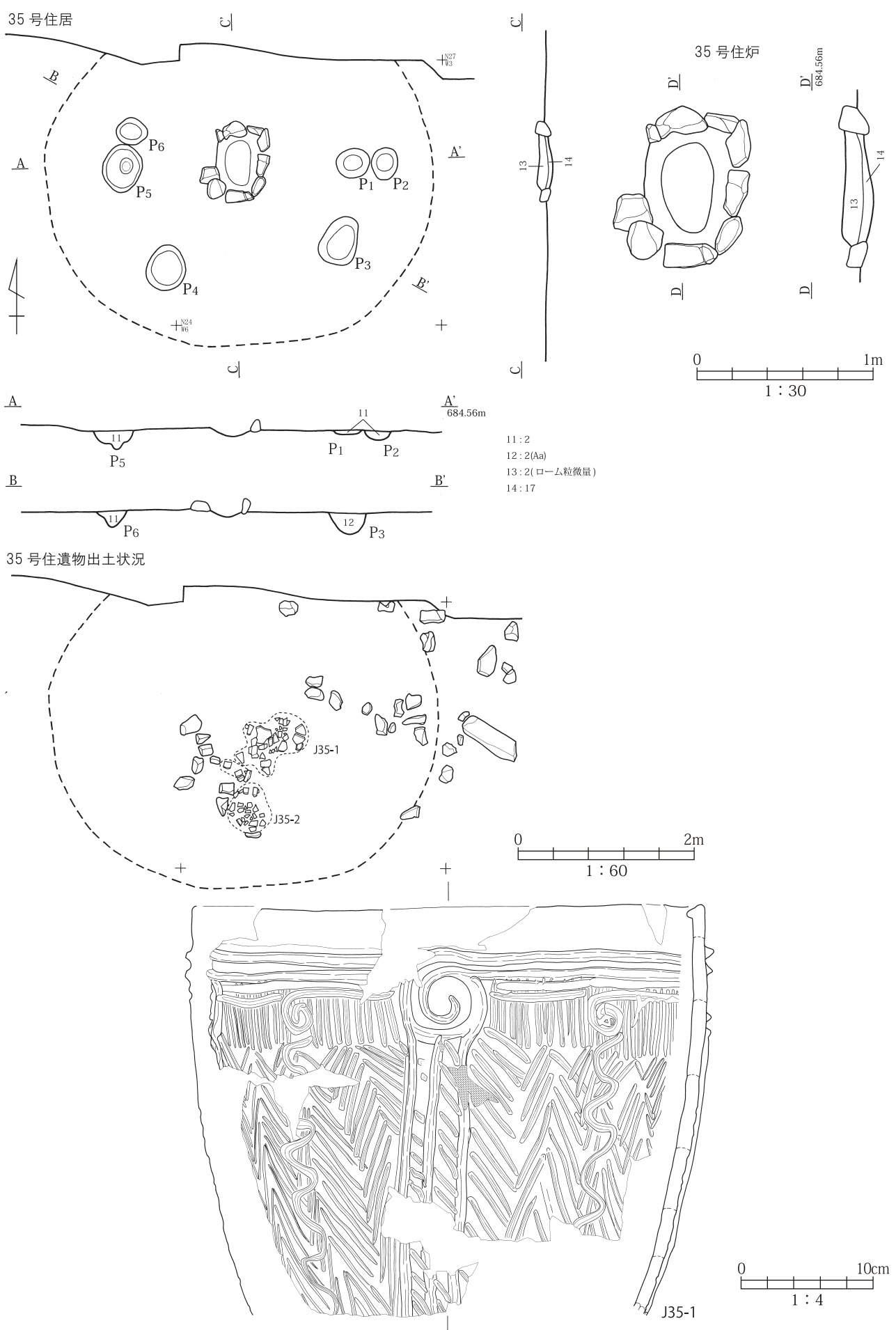
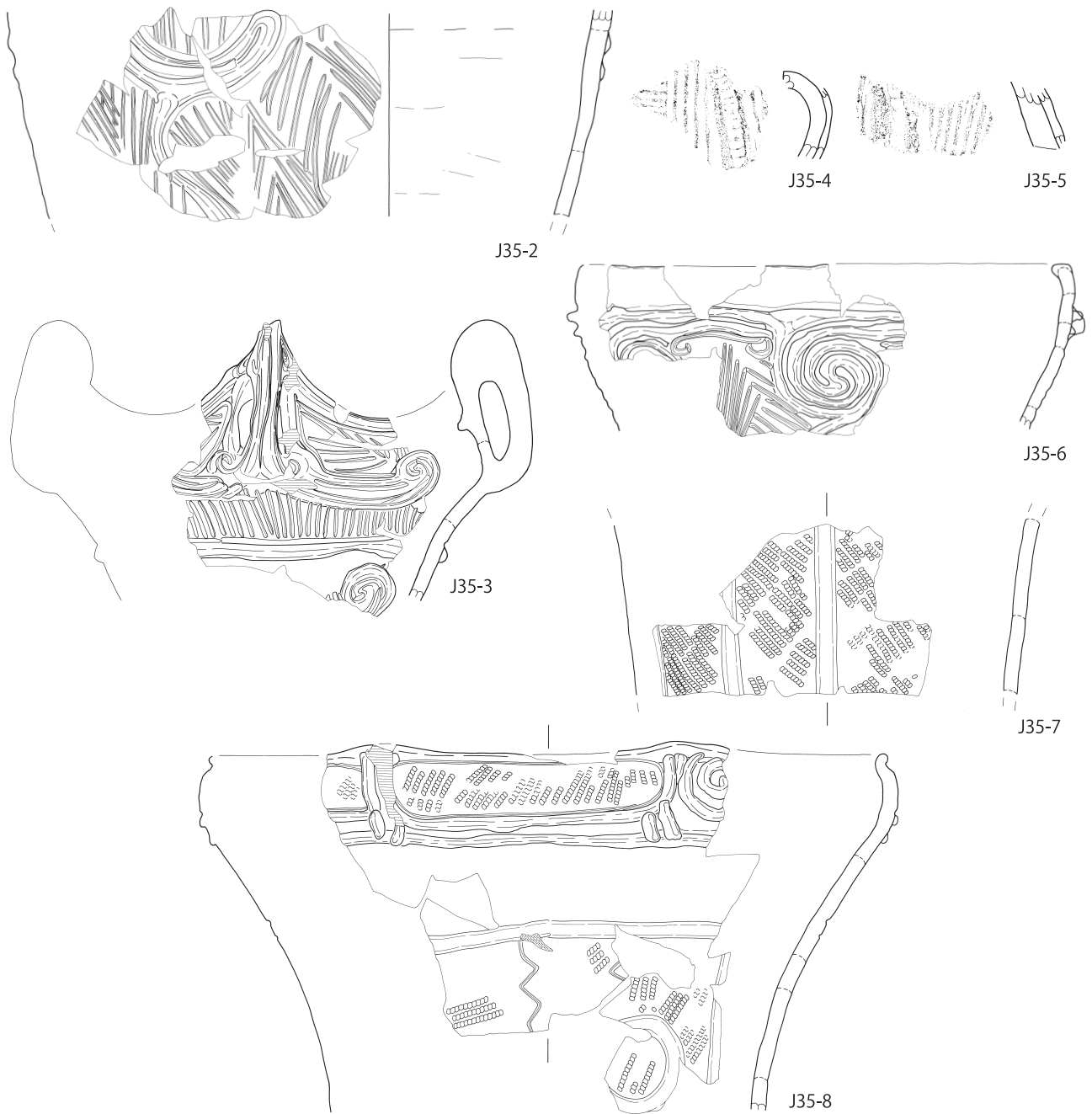


图 154 35号住居实测图、出土土器实测图(1)



35号住居・関連グリッド出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g） □ は選択された特定個体のみの数値

地点	重量 g	中期						後期				晩期			後晩			
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
35住	710																	
N24W3	2705																	
N24W6	255						[1] [70]					[1] [30]	[1] [10]					
N27W3	21030	[3] [70]		[10] [3580]	[6] [1520]	[3] [80]	[7] [790]			[2] [50]								[2] [340]
N27W6	3675							[1] [20]										[1] [40]

図 155 35号住居出土土器実測図(2)

体を占める中に、加曾利 E 式系 (J35-7、J35-8) が加わる構成で、主要な個体のみ図示した。唐草文系では J35-3 のみ中期後葉Ⅱ期の可能性があるが、それ以外は中期後葉Ⅲ期の産だと推測する。加曾利 E 式系も中期後葉Ⅲ期だろう。35 号住居は中期後葉Ⅲ期に属すると判断する。中期後葉には谷状低地の一角が居住地として利用された。

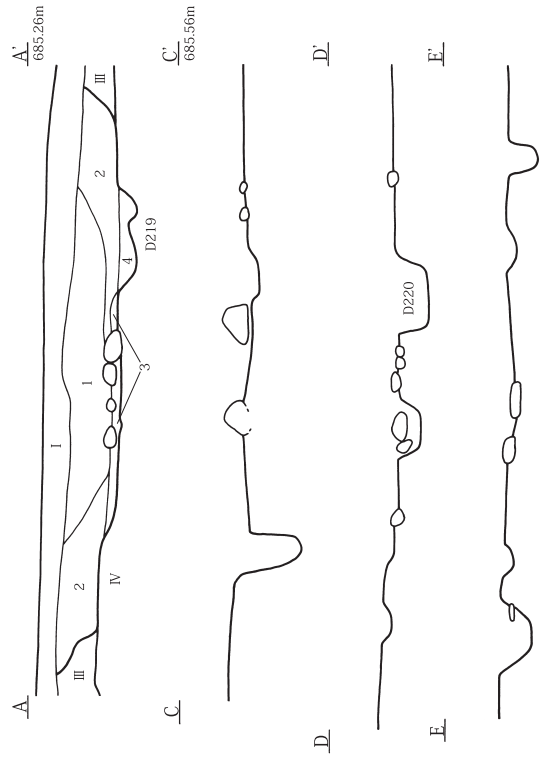
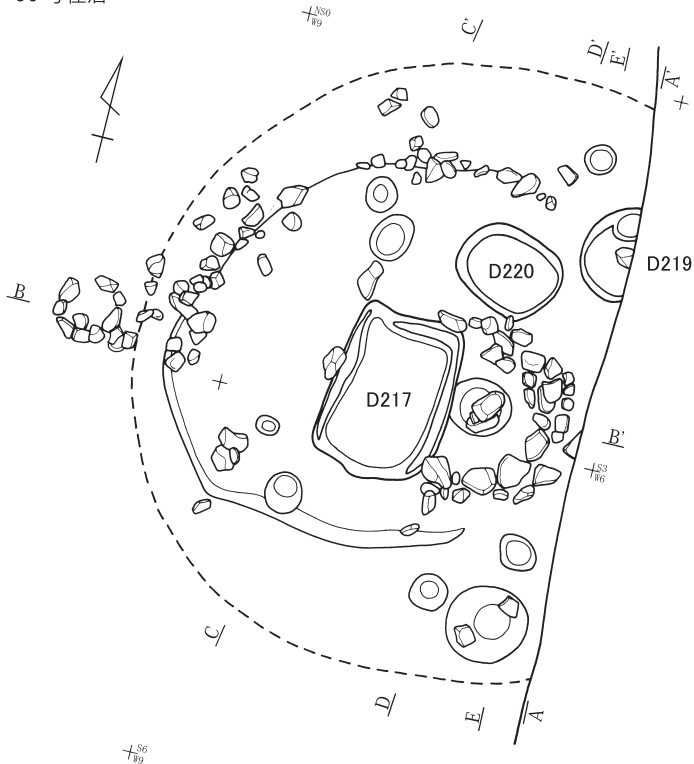
整理作業上の手違いから、35 号住居の時期別個体数・重量表は実測・拓本対象個体だけの数値しか掲載できなくなった。出土全点を対象とすることが困難になったことをお許し頂きたい。

(28) 36 号住居 [図 156～159、写真図版 29、46～48] 【上ノ段 3 式】

S0W3～S3W9 の 6 グリッドにかけて位置すると推定される竪穴住居であるが、S0W3 と S3W3 は調査対象範囲外で、住居の東側 1/3 ほどは対象外となった。第Ⅳ層上面で、炉 2 の縁石を検出、続いて弧状に並ぶ拳大の礫や略完形土器などを発見、土坑 217、土坑 219、土坑 220 を検出した。略完形土器は土坑には帰属しないので、別遺構の存在を推測し、調査区域東限の壁で堆積状況を精査した結果、36 号住居の壁の立ち上がりを発見した。住居掘り方は第Ⅲ層上面近くから確認できたが、平面的な調査は既に床面付近に達しており、掘り方の検出はもはや不可能だったので、壁の断面所見から住居の南辺と北辺を推定した。西辺は無傷で残る炉 2 よりも東側で、礫の列の末端付近だと推定した。土坑 3 基は住居の埋土中で検出したので、36 号住居はそれらに切られると判断できた。掘り方を平面的に把握できなかったので、36 号住居の平面形は不明だが、推定範囲は南北 5m 前後、東西 4m 以上で、最大 6m 前後になる可能性もある。調査区域東限の壁で観察できた 36 号住居の構築状況は、第Ⅲ層上面で掘り方が検出でき(より上位の第Ⅰ層中から掘り込まれた可能性は残る)、第Ⅳ層上面付近まで掘り込んで床を構築したと判断できた。埋土は床面直上の薄い層(3層)、その上に壁際が分厚く中央が薄い層(2層)、最後に住居中央に堆積する分厚い層(1層)の 3 層に分層される。レンズ状の堆積の一種で自然埋没を示すとも言えるが、2 番目の層の壁際の厚さを見れば、意図的な埋め戻しの可能性も考慮しないわけにはゆかないだろう。壁の立ち上がりはやや緩く、壁高は 30cm 程度あるが、これは旧地表からの掘り方としては浅い。住居の床面は平坦ではなく、中央が壁際より 10cm ほど深く、壁際の床が若干高く作られ、境界には低い段差ができています。その段差は南辺では平面的にも断面でも確認でき、西辺では段差の縁に拳大の礫が並び、北辺では段差は不明瞭だがその延長に拳大の礫が弧状に並んでいた。住居検出のきっかけとなった礫の列がこれだ。やや低い住居中央部分と、少々高い住居外周部分とが、段差で分けられた構造が読み取れる。この外周部分に礫を配置した形跡は無いので、中越遺跡の方形石囲住居とは少々異なるようだ。住居の平面形に従って段差やその延長が作られたのなら、住居の平面形は円形を基調とすることが推測できる。住居中央部分は 3 基の土坑に切られて、住居のほぼ中央に位置すると推定される炉も 1/3 ほどを失っている。炉は二重構造のように見受けられる。中心には径 40cm、深さ 15cm ほどの小さな掘り方を設け、その縁から 10cm～20cm の空白を置いて、人頭大程度の礫を並べ、礫の外側にもやや小ぶりの礫を詰める。控えを付けた炉縁石、或いは炉縁石に連続する石敷きとでも表現できようか。石敷きの範囲は南北 150cm、東西 100cm 以上で、掘り方はない。敷石住居や環礫方形配石遺構などの系譜に連なるのか、多重の石囲炉に関わるのか、判断は難しい。炉中央の掘り方の底面は焼成痕跡は無かったが、側面が若干赤化し、中には人頭大の円礫 2 個が入っていた。縁石の一部は被熱で風化が進んでいた。小ピットが幾つか存在するが、深さは 20cm 程度である。

住居平面の検出が遅れたため、住居出土として取り上げられた遺物は、床面直上かそれに近い位置からの出土である。グリッドで取上げられた土器のうち、J36・G2、J36・G3、J36・G7、J36・G12、J36・G13、J36・G15 も、取り上げレベルは床面付近であった。S0W6、S3W6 出土遺物の大半は、位置関係から見て 36 号住居埋土から出土したと推測できるので、主要な個体を図示した。

36号住居



- I: 2(Ac, Bc, Ec)
 - II: 3(Ac, Bc, Ec)
 - III: 17(Ab)
 - IV: 6(Ac, Bc)
- 1: 2(Ac, Bb)
 - 2: 3(Ac, Bb)
 - 3: 2(Lc)
 - 4: 2(Ab)

36号住居遺物出土状況

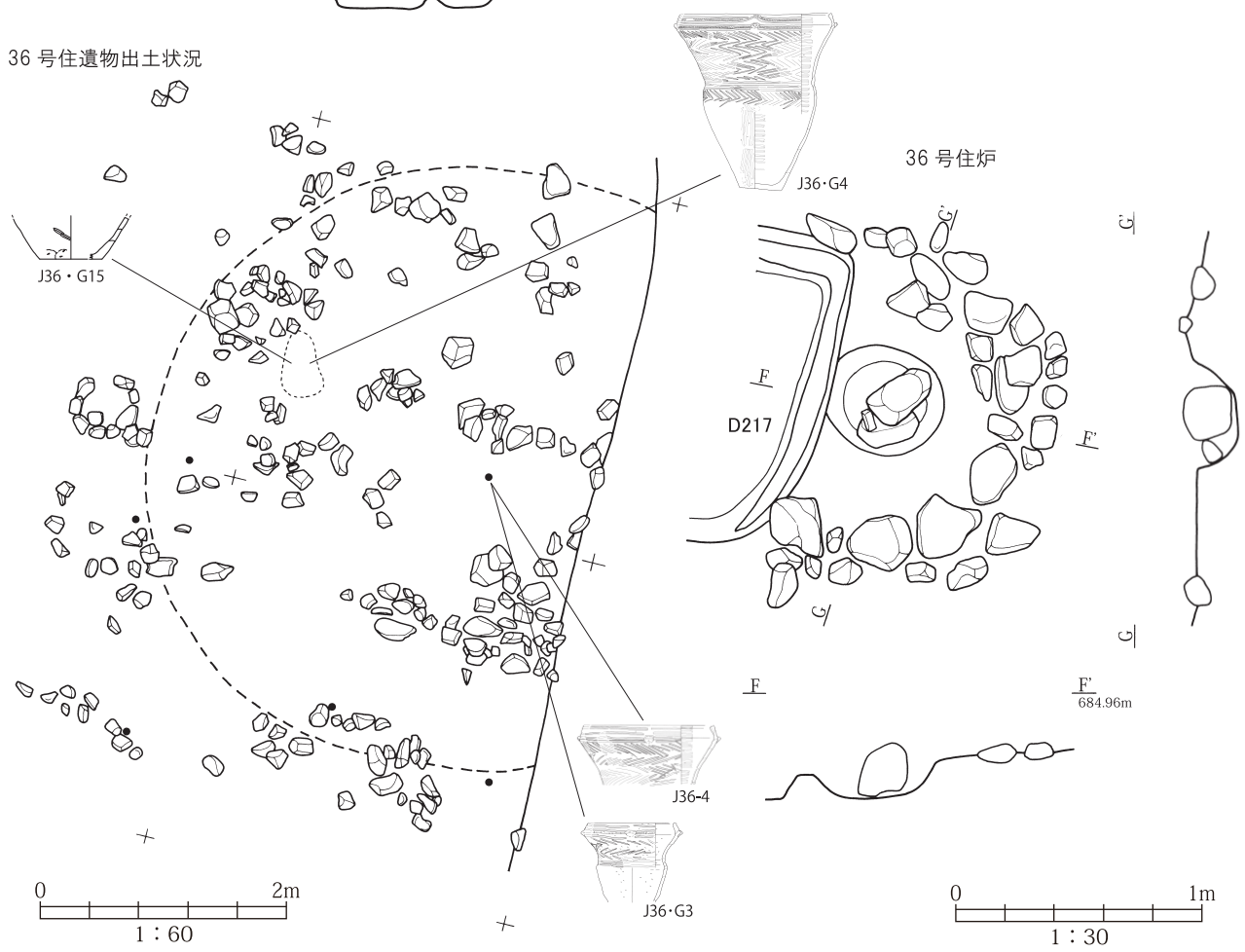


图 156 36号住居実測図

36号住居・関連グリッド出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
36住	5795			2	1		500	1	3	5	14	3		2		23	5	3
OW6				30	30			30	30	260	3300	110		30		740	110	140
(36住・炉2)	34870			9	6			1	27	19	35	19	4	9	1	109	9	45
OW9				250	130			20	530	180	510	310	50	110	10	2130	200	1520
(36住・炉2)	54720			3	6			5	27	26	46	42	52	8	231	25	164	
S3W6		2	1	15	4			150	620	340	920	870	940	120	5710	330	4730	
(36住・炉2)	36460	50	10	540	120			6	28	9	18	12	10	7	140	24	81	
S3W9		2	2	23	6			150	470	110	370	180	230	180	140	1840	190	2350
(36住・炉2)	39050	10	50	1030	210			4	36	15	11	20	28	22	131	23	108	
								110	490	170	160	350	570	310	2150	260	4280	

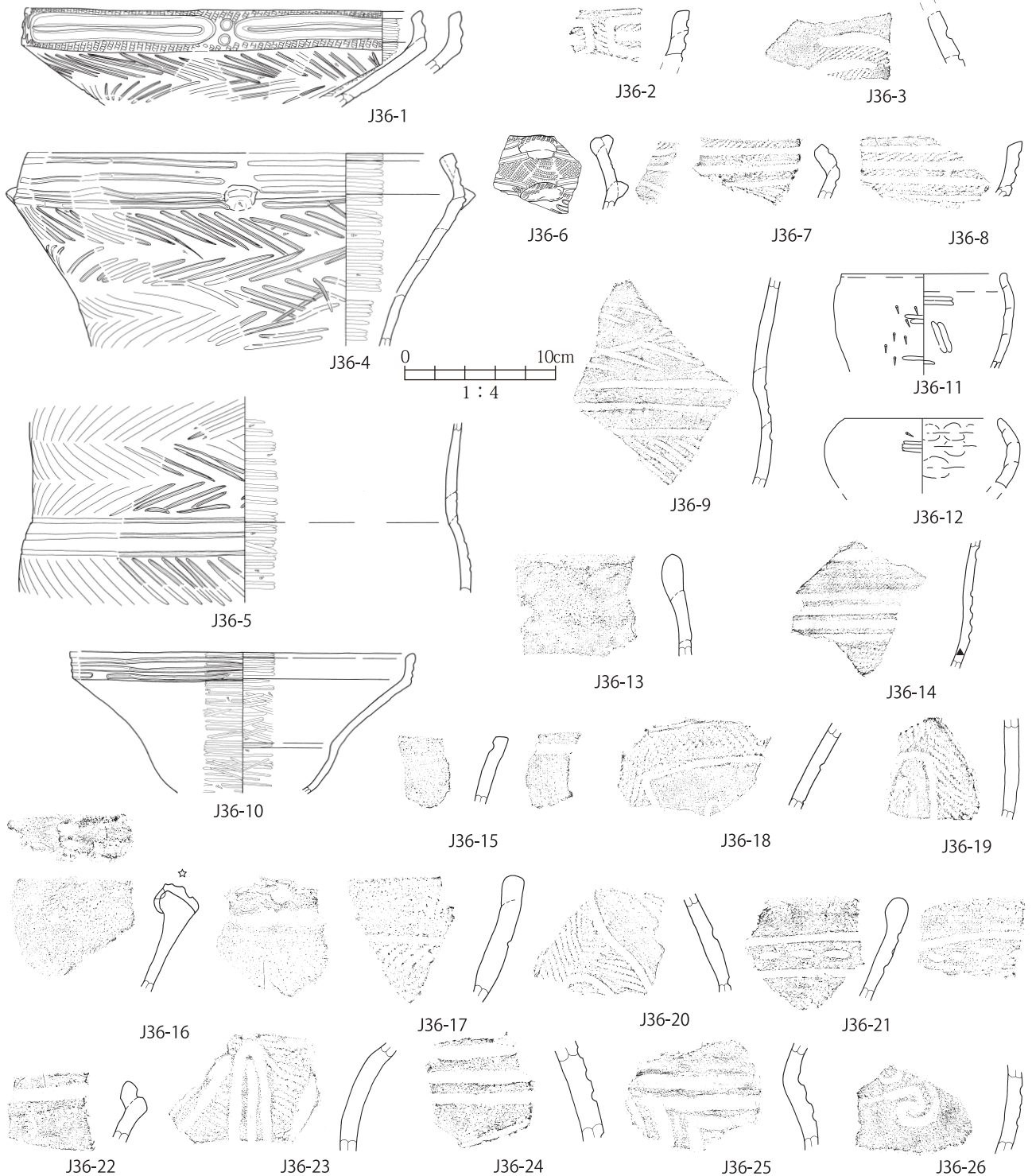


図 157 36号住居出土土器実測図・拓影(1)

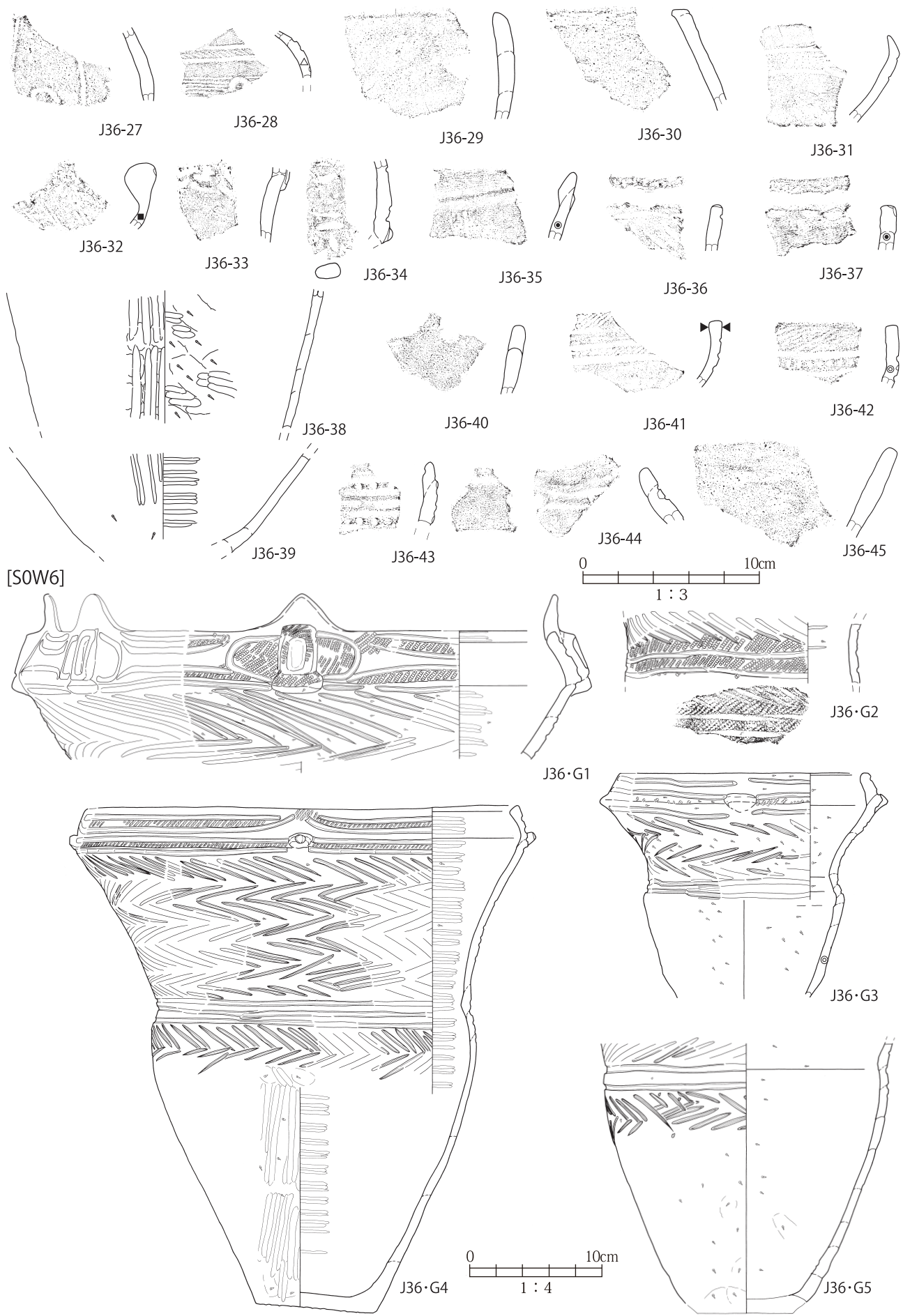
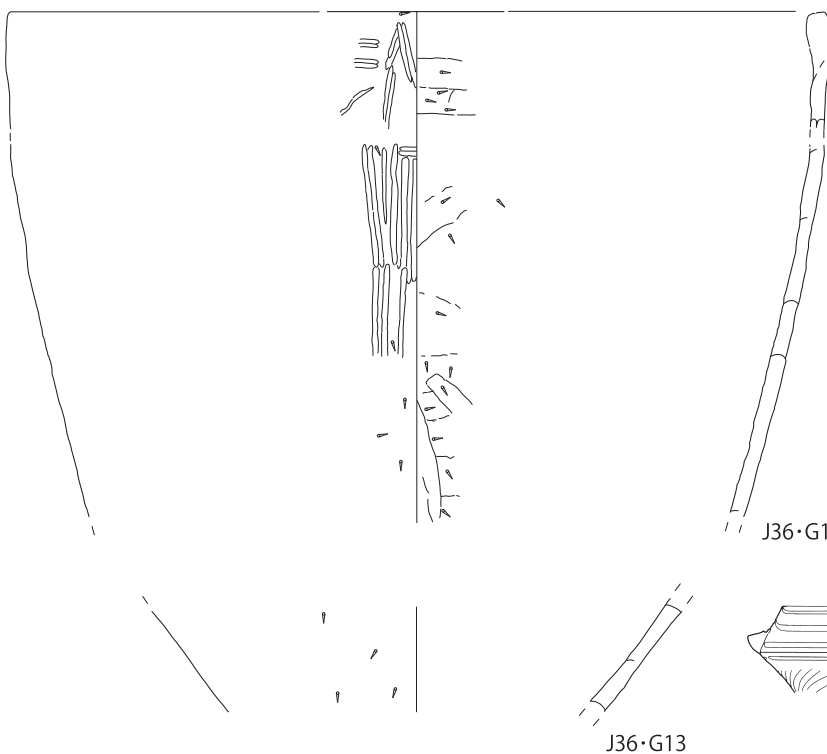
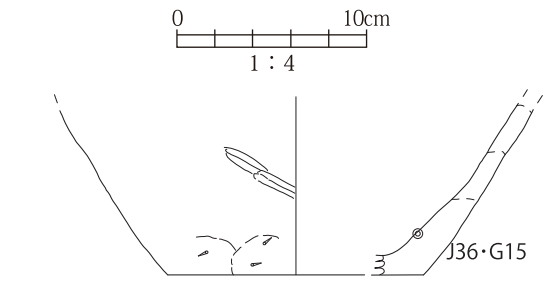
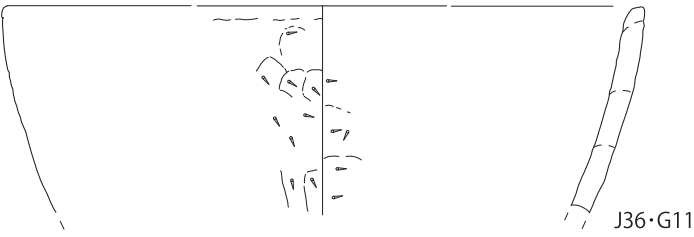
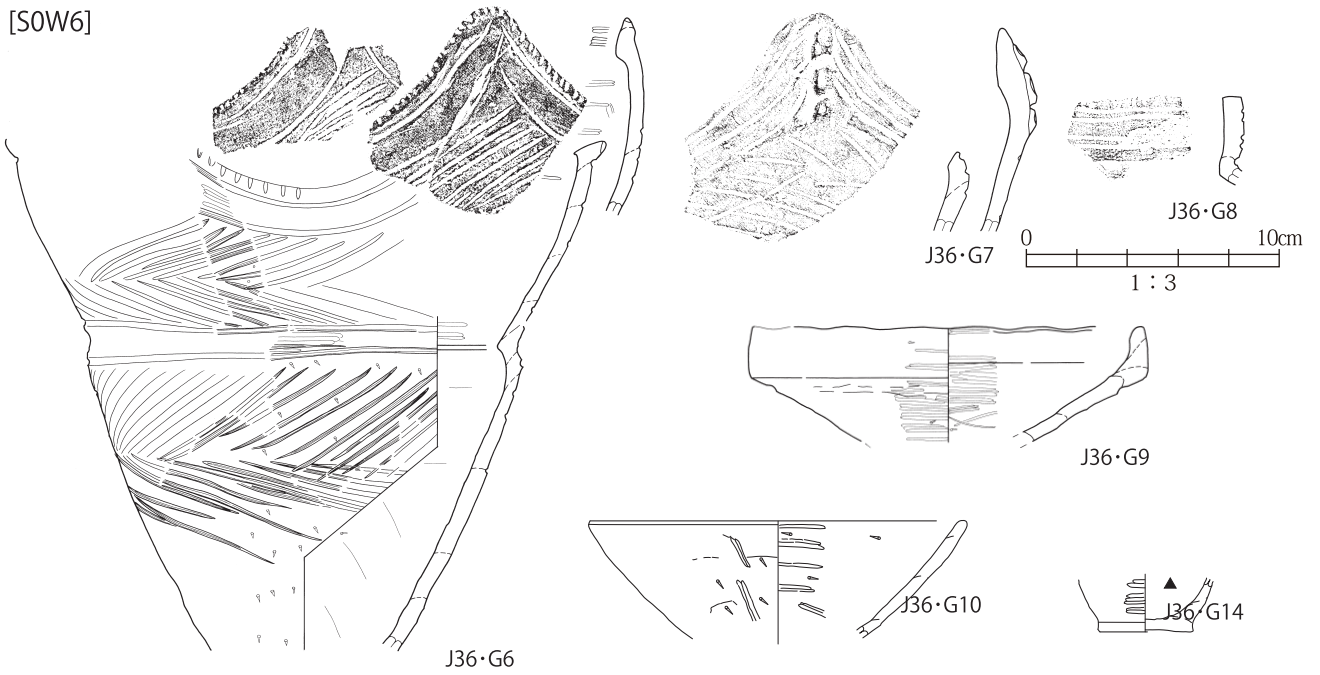


図 158 36号住居出土土器実測図・拓影(2)、関連グリッド出土土器実測図(1)

[S0W6]



[S3W6]

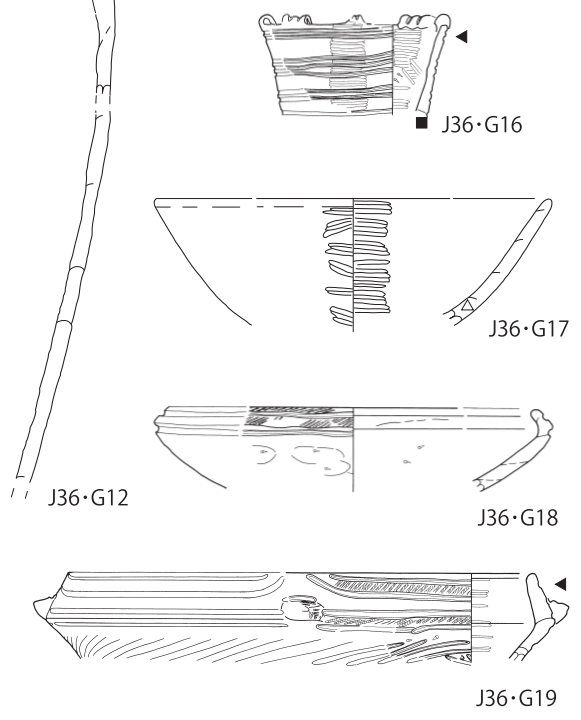


図 159 36号住居関連グリッド出土土器実測図(2)

36号住居として取り上げられた土器のうち、破片が大きく量も多いのは上ノ段式である。J36-1～J36-3の3点は上ノ段2式、J36-4～J36-6の3点は上ノ段3式、J36-7～J36-10の4点も確定しきれないものの上ノ段3式の可能性が高い。無文浅鉢J36-11、J36-12と無文粗製深鉢J36-13も上ノ段式の構成要素と思われる。巻貝条痕を持つJ36-14、内面沈線のJ36-15は東海系譜の可能性はあるが、上ノ段式に並行しそうだ。中期中葉J36-16～加曾利B2式J36-32までの小破片は混入品としてよいだろう。J36-33～J36-43の小破片は上ノ段式に後続する中ノ沢K式～佐野2式で、住居埋土の純度は少々問題があるろう。後期後葉の耳飾も1点あるが、上ノ段式期に遡ることはないだろう。

S0W6、S3W6出土土器では、J36・G1は上ノ段2式か3式、J36・G2は上ノ段3式か4式、J36・G7は上ノ段4式、J36・G3～J36・G6、J36・G8、J36・G9は上ノ段3式である。注口土器J36・G8、J36・G16、無文粗製深鉢J36・G11～J36・G13、浅鉢J36・G10、J36・G17も上ノ段式の構成要素だろう。J36・G9は上ノ段式直前か。ただし、J36・G15は佐野式の無文粗製土器の可能性があり、炉2に帰属するかも知れない。

多少の挟雑物はあるが、36号住居は質・量とも圧倒的な上ノ段3式に属すると判断する。19号住居でも比較材料とした方形周石住居は、住居の範囲を列石で示す[新津1992]のが基本的特徴らしく、方形が基調だが例外もあり、後期後葉には成立して晩期に継続するようだ。36号住居も方形周石住居との共通性がある住居だと言えそうで、時間的にも整合的だろう。

(29) 37号住居 [図160] 【中期後半～後期前葉】

N3E9～N9E12の6グリッドにかけて位置すると推測される住居だが、N3E9とN3E12は調査対象範囲外で、住居の南側1/2ほどは対象外となった。第IV層上面から第V層上面で遺物のまとまりと敷石の素材の可能性のある板石10枚程度を発見、精査の結果、板石や遺物を取り巻くように半円形に並ぶピットを検出して、37号住居の存在を推定した。包含層は薄く、床面も不明瞭、径30cm、深さ30cm程度のピット5基(P1～P5)も認定に不安があるが、住居が存在した可能性は高いだろう。

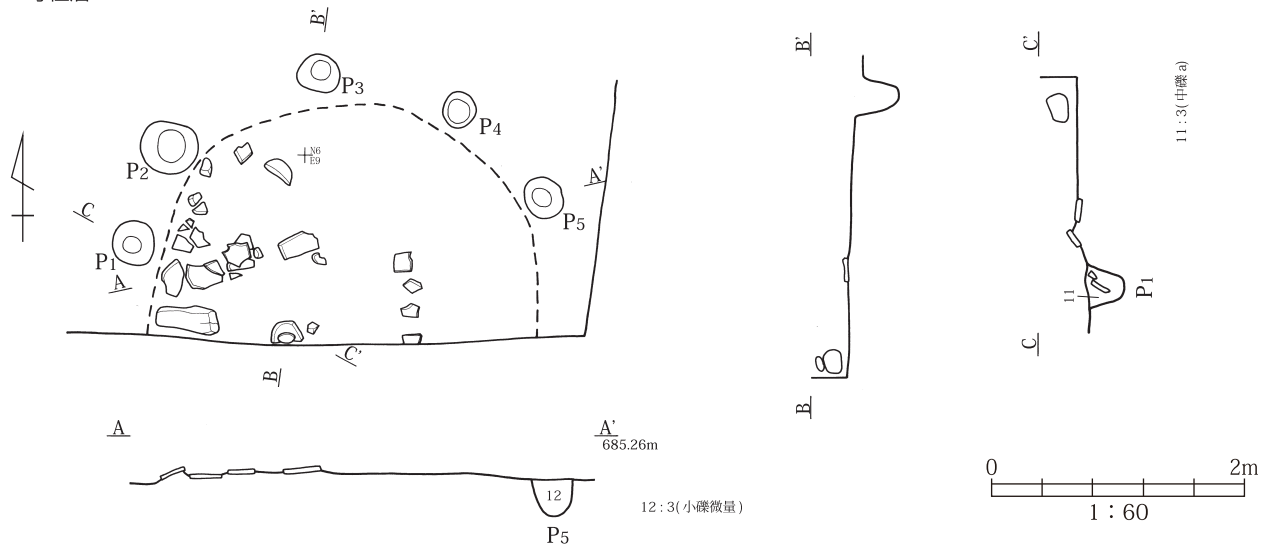
住居出土として取り上げられた土器は、床面付近からの出土だと思われるが、細片ばかりで量も少ない。敷石住居成立以前と思われる中期中葉以前のJ37-1は混入品、敷石住居消滅後の後期中葉以降のJ37-9～J37-12も混入とせざるを得ない。中期後半連弧文系J37-3、称名寺1式J37-4、後期前葉の可能性のある羽状縄文をもつJ37-5、堀ノ内式のJ37-6～J37-8などが帰属候補だが、細片に過ぎ時期決定の根拠にはなりそうもない。37号住居は中期後半～後期前葉の幅の中に属するとせざるを得ない。

周辺グリッド出土土器は中期前葉～晩期中葉と幅があるが、後期末葉～晩期前葉が最も多い。谷状低地周辺の廃棄場の末端に相当している可能性があり、土器の大半は廃棄場に帰属する可能性があるので、第2分冊で報告する。また、整理作業上の手違いから、37号住居の時期別個体数・重量表は実測・拓本対象個体だけの数値しか掲載できなくなった。出土全点を対象とすることが困難になったことをお詫し頂きたい。

(30) 38号住居 [図161～164、写真図版29、30、48] 【堀ノ内2式後半】

S24W18～S30W21の7グリッドにかけて位置する住居である。第IV層上面で38号住居の石囲炉の縁石と床面の礫、多数の土坑を検出、精査して38号住居の掘り方を検出した。切り合う土坑は土坑307、土坑310、土坑313、土坑314、土坑328～土坑330、土坑353、土坑354、土坑422、土坑425、土坑426、土坑561、土坑713の14基で、その全てに切られることを平面で確認した。住居主体部の掘り方は南北4.5m、東西4.2mの卵形の平面形で、残存する壁高は5cm～10cmに過ぎないが、何とか全周を検出できた。床面近くでの検出の為、埋没状況は把握できなかった。床面らしい硬化面は把握できず、かといって床に石敷きが為された痕跡も掴めなかった。住居中央に石囲炉が構築されるが、半分は土坑314と土坑

37号住居



37号住居・関連グリッド出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g） □ は選択された特定個体のみの数値

地点	重量 g	中期						後期				晩期			後晩			
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
37住	1435		1 50						2 60		1 30		1 10				1 20	
N9E12 (37住)	12370						[1] [110]	[2] [20]	[4] [70]	[1] [30]	[9] [220]	[8] [180]	[2] [50]		[2] [100]	[2] [50]		
N9E9 (37住)	6350			[2] [80]					[1] [10]	[3] [40]	[5] [110]	[7] [150]			[1] [70]			
N6E12 (37住)	785	[2] [40]			[1] [70]			[3] [150]	[2] [60]	[1] [10]	[1] [30]	[6] [220]					[2] [580]	
N6E9 (37住)	2630				[1] [70]				[1] [50]			[1] [20]				[1] [60]		

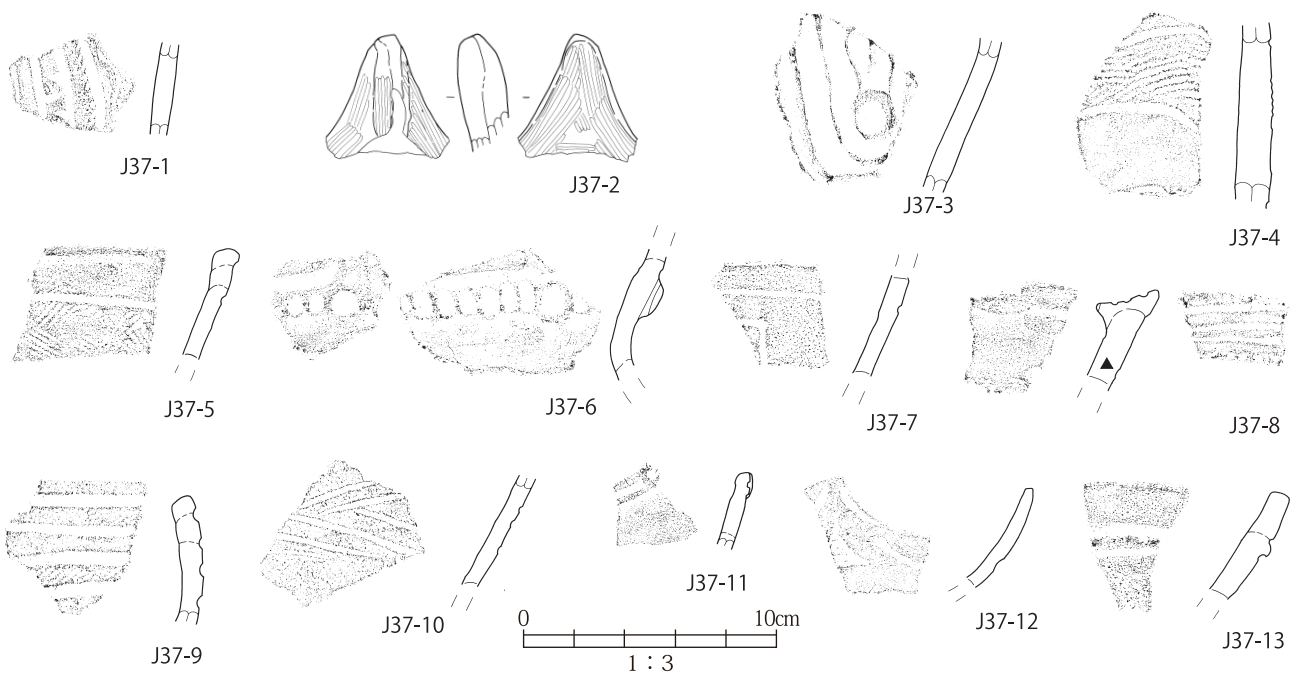
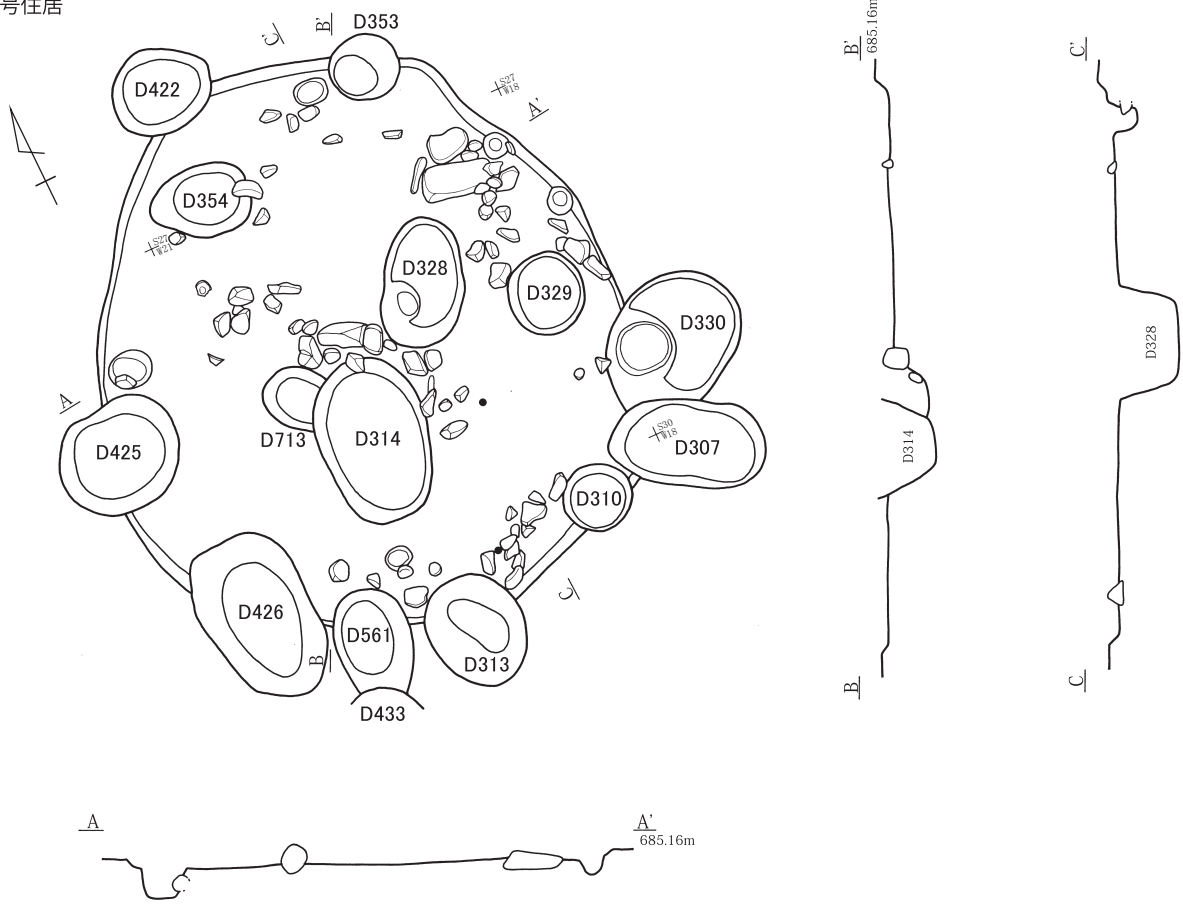


図 160 37号住居実測図、出土土器実測図・拓影

38号住居



38号住遺物出土状況

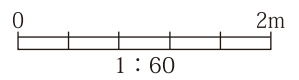
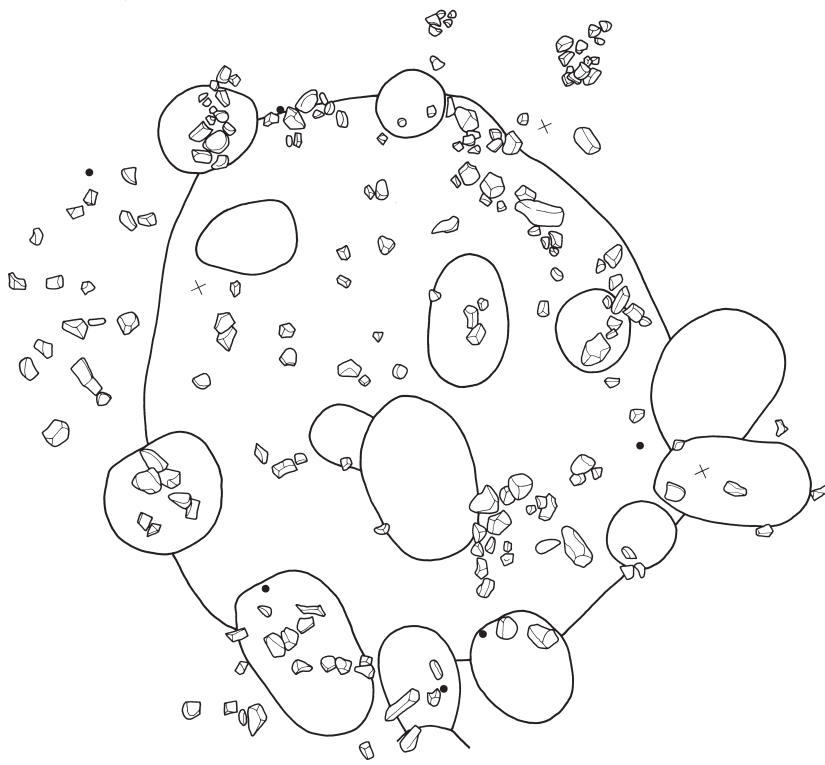
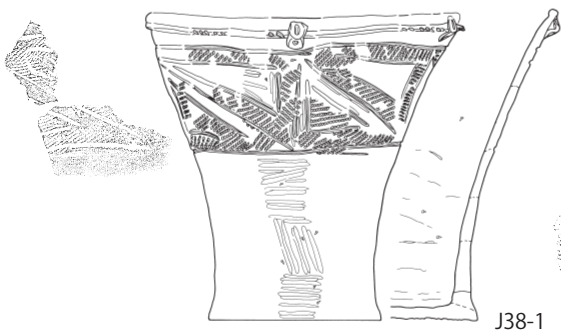


图 161 38号住居実測図

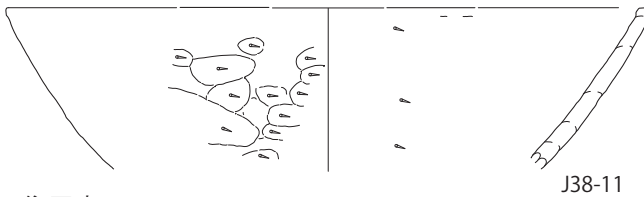
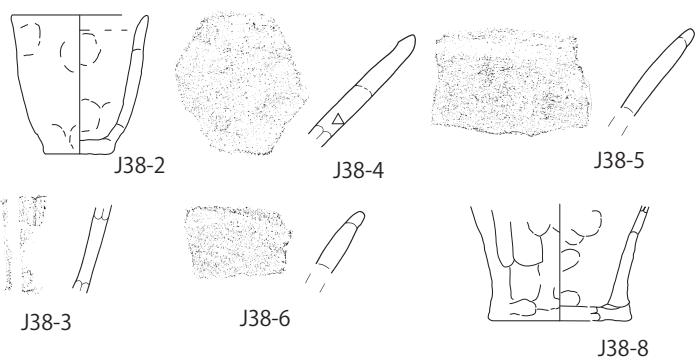
38号住居・関連グリッド出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期				晩期			後晩			
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
38住	4715			2		3	1	1	12	3		1	2	1		13		12
				110		30	50	20	1000	60		10	30	30	430		620	
S24W18 (38住)	14615			5	3		3		5	3	1	1	4	19	2	77	8	35
				330	80		210		40	30	10	40	50	210	20	900	60	1230
S27W18 (38住)	20425	1		1			2		19	5		4	9	19	1	72	8	66
		20		20			90		280	80		50	150	280	30	1140	80	2050
S27W21 (38住・竪4)	30800			2					46	23	9	10	10	30	5	114	8	91
				20					830	520	150	320	90	730	100	2560	140	3730
S30W18 (38住)	12970			1	1	2		1	7		1		5	10		43	3	26
				10	20	90		50	170		10		50	140		900	70	1870
S30W21 (38住・竪4)	7125			2			4		3	2	8		1	5	1	15	2	9
				100			210		300	10	220		50	610	20	210	10	910

[炉]



[床]



[住居内]

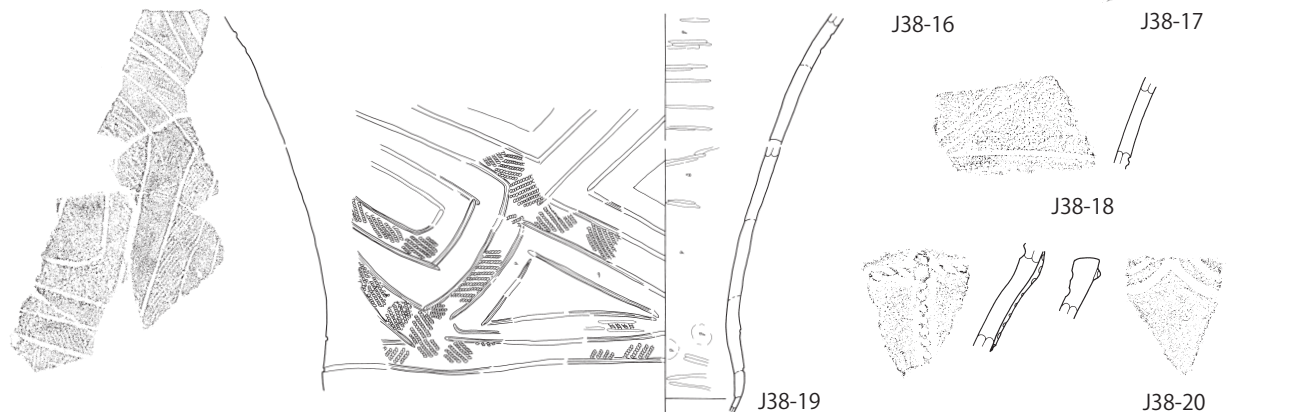
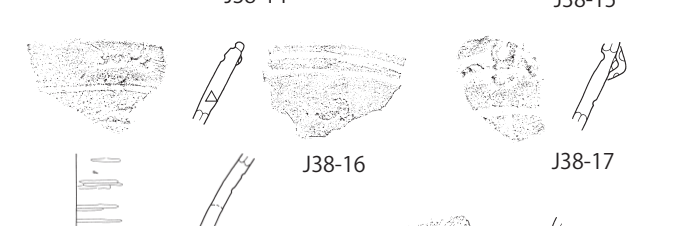
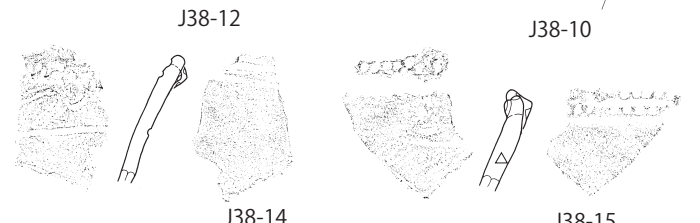
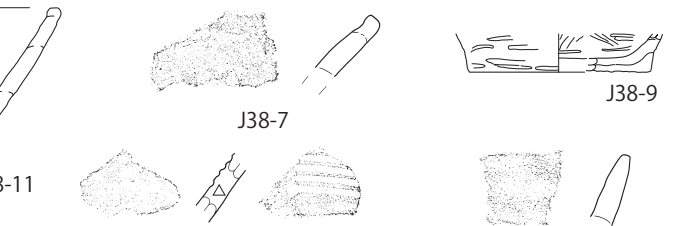


図 162 38号住居出土土器実測図・拓影(1)

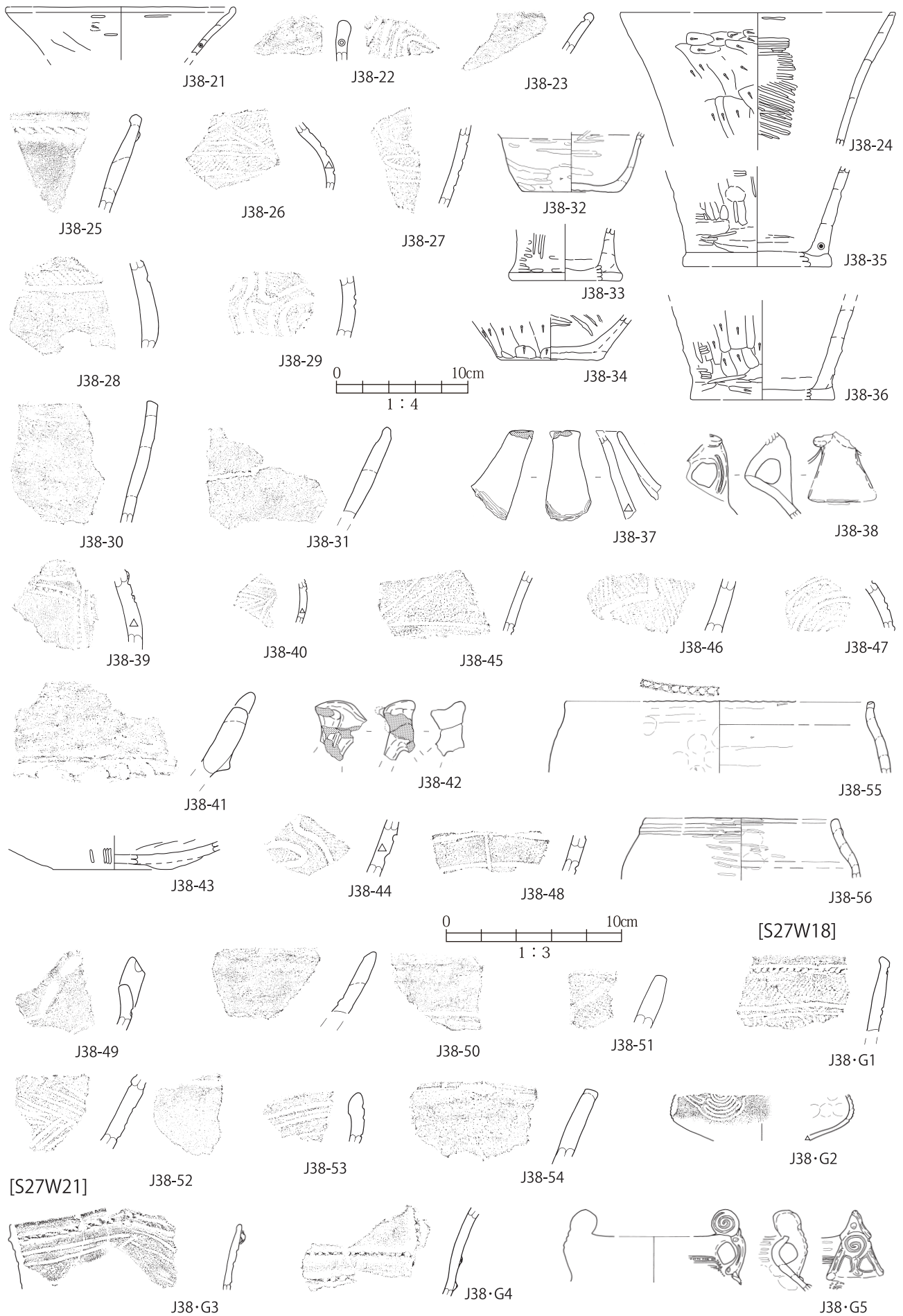
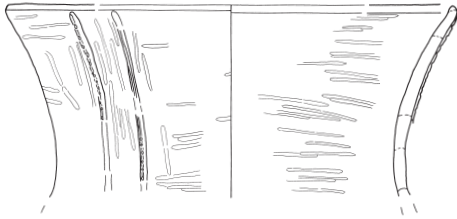


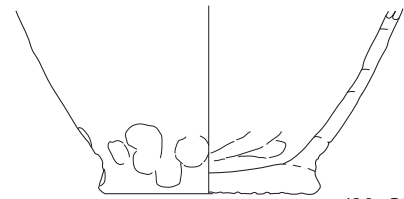
図 163 38号住居出土土器実測図・拓影(2)、関連グリッド出土土器実測図・拓影(1)

[S27W21]

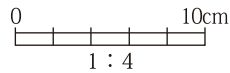


J38-G6

[S30W18]

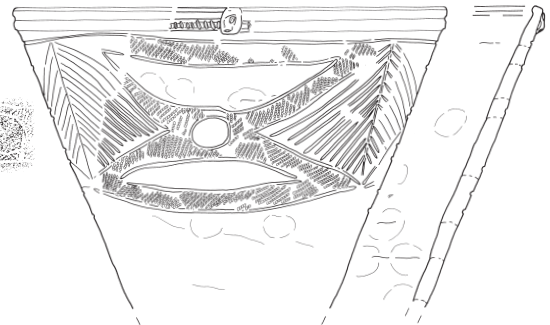


J38-G9



J38-G7

[S30W21]



J38-G10



J38-G8

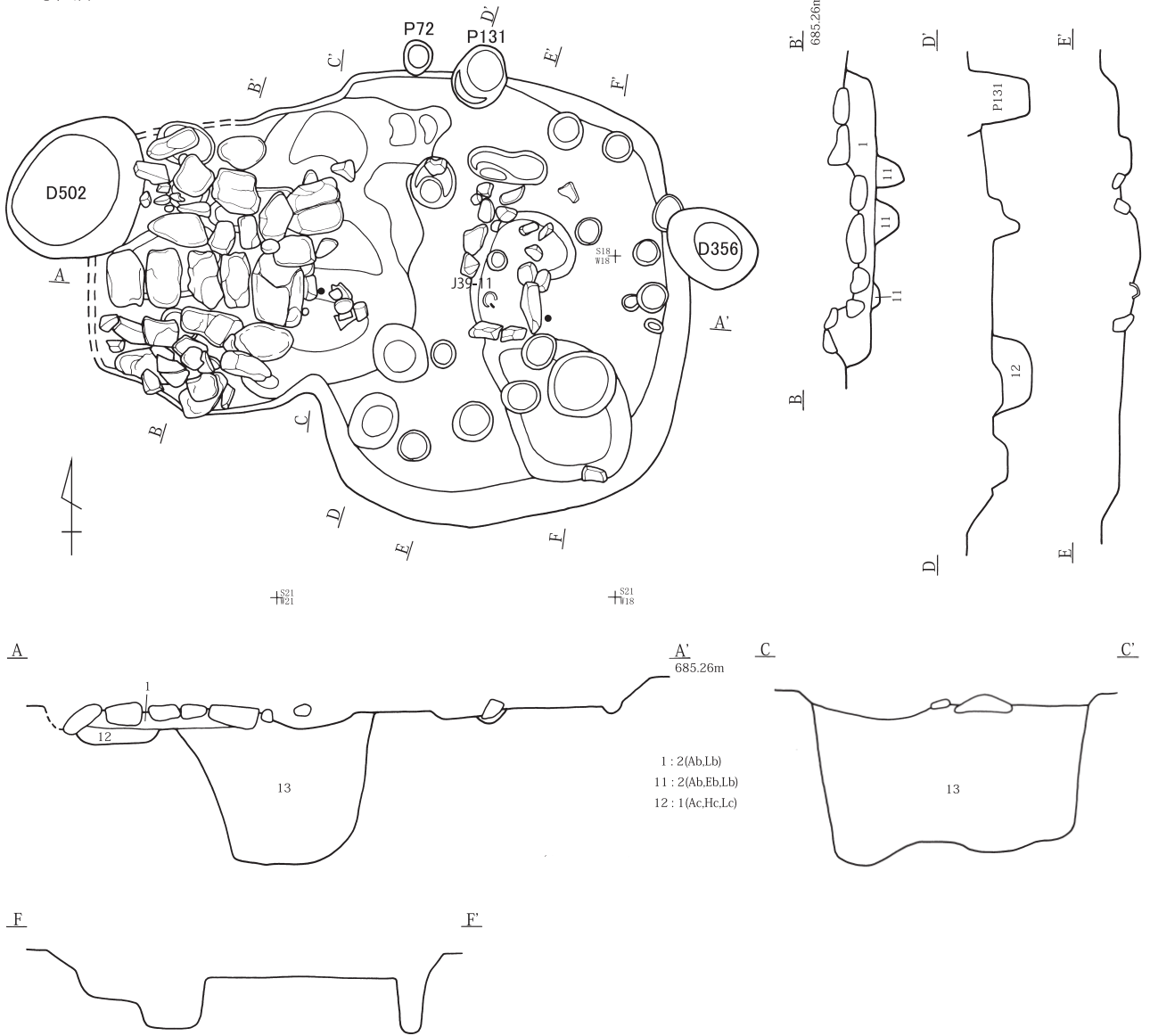
図 164 38号住居関連グリッド出土土器実測図(2)

713に切られて失われていた。その構造は、北西—南東 80cm、北東—南西 20cm 以上、深さ 30cm とやや深い掘り方の周囲に、人頭大～長辺 40cm ほどの円礫を配置する石囲炉で、炉内に焼土は認められなかったが、縁石の一部は被熱による風化が認められた。北東辺の壁際には長辺 50cm 以上と大形の円礫を中心に数個の礫がまとまって存在した。出入り口施設の痕跡は発見できなかったが、複数の土坑に切られて掘り方のほとんどが失われている南東辺か南西辺に、出入り口施設が設けられた可能性はあり、柄鏡形敷石住居の可能性も残る。床ではピットなどは発見できなかった。遺物は炉内及び床面出土として少量の土器が取り上げられたほか、38号住居出土として取り上げられた土器がひとまとまりあり、これらも床面近くからの出土だろう。

炉内出土の土器 J38-1 が時期決定の最大の根拠である。朝顔形精製深鉢で、上下を画された文様帯に挿入される三角形構図は末端が接合せず、乱れやゆがみも多い。堀ノ内 2 式でも後半の様相だろう。炉内出土の J38-2 はミニチュア土器に近い小形の無文深鉢で、精度は低い。底部形態などは上ノ段式無文粗製深鉢に近く、評価が難しい。細片 J38-3 は堀ノ内 1 式の可能性もある。床面出土土器 (J38-4 ~ J38-12) の大半も J38-1 と整合的で、大きな破片も含まれる。J38-12 のみは加曾利 B1 式だが、細片なので混入としてもよいだろう。床面以外の土器も半分以上は堀ノ内 2 式やそれと整合的な破片である。中期～称名寺式期の J38-41 ~ J38-44 や堀ノ内 1 式 J38-45 ~ J38-47 は混入品としてよいだろう。J38-48 以下は加曾利 B1 式以降に属し、J38-55 晩期中葉まで下がるかもしれない。

時期別個体数・重量表を見れば、38号住居では堀ノ内式が圧倒的に優勢だが、加曾利 B 式以降も若干存在する。検出状況から見て、38号住居は床面近くまで攪乱を受けており、ある程度の挟雑物の混在は避けられないのだろう。38号住居は堀ノ内 2 式後半に属すると判断する。中空土偶の中空脚部が 1 点あり、この住居に帰属する可能性が高い。重複するグリッドでも堀ノ内式が最多だが、より新しい土器も少なくない。それらの中から堀ノ内式を摘出して参考に図示した。

39号住居



39号住遺物出土状況

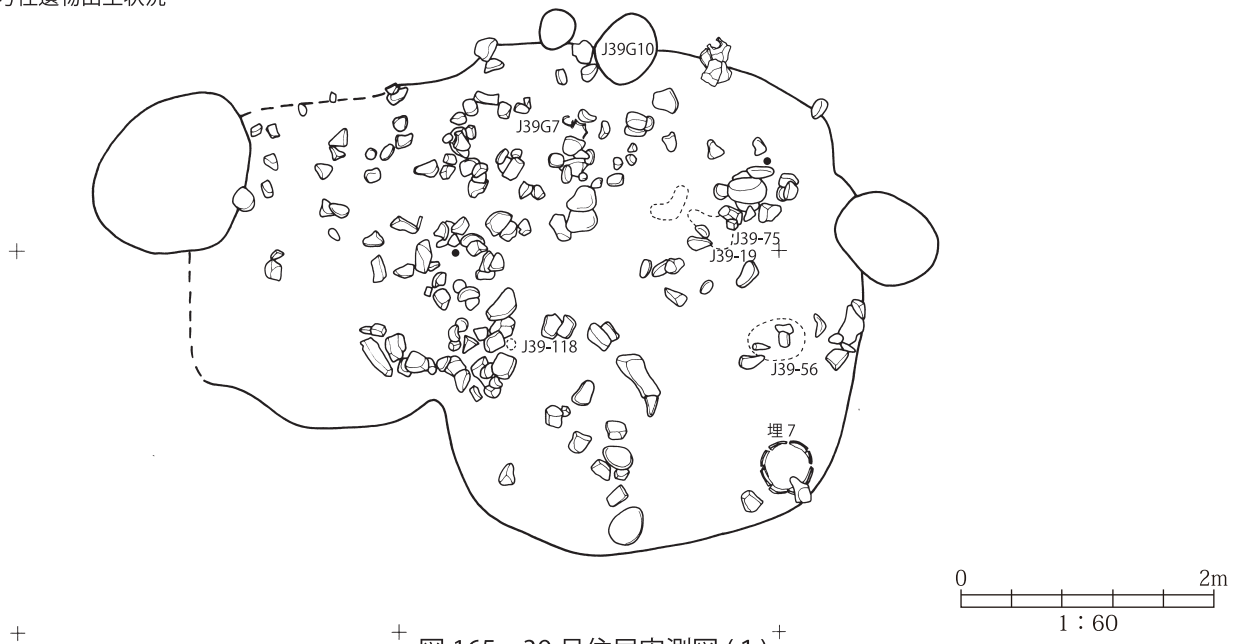
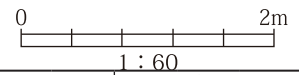
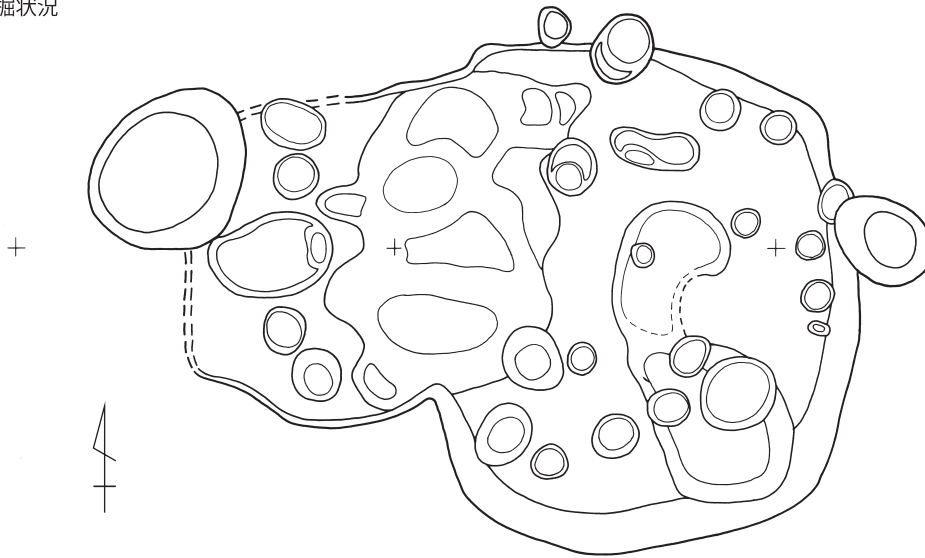


图 165 39号住居実測图(1)



39号住居・関連グッド出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期					称名	後期				晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明		底部	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明
39住	34720		1 30	4 180	2 70	2 40		40 3890	23 530	3 30		12 260	12 180		137 2590	5 60	87 3560
S15W15 (39住)	14535					1 30		10 170	6 60		1 20	4 80	18 330	2 30	92 1550	5 40	29 1010
S15W18 (39住)	23590		1 30			1 20		20 210	25 1450	10 140	3 50	17 140	6 80		133 2030	13 140	52 1240
S15W21 (31・39住)	45845			2 60			1 50	20 140	64 1300	31 520	19 370	22 320	28 280	3 50	290 3670	21 150	105 2900
S18W15 (39住)	6655					1 20		11 170	5 100	3 40	2 20	1 10	5 50		20 330	2 10	12 200
S18W18 (39住)	19810							18 290	24 420	4 70	2 40		16 200	1 10	91 1800	1 10	61 2180
S18W21 (39住)	24610			3 60				32 350	33 540	4 50	10 160	3 50	6 110		104 1940	7 70	73 2660

[張出部床下]

[炉]

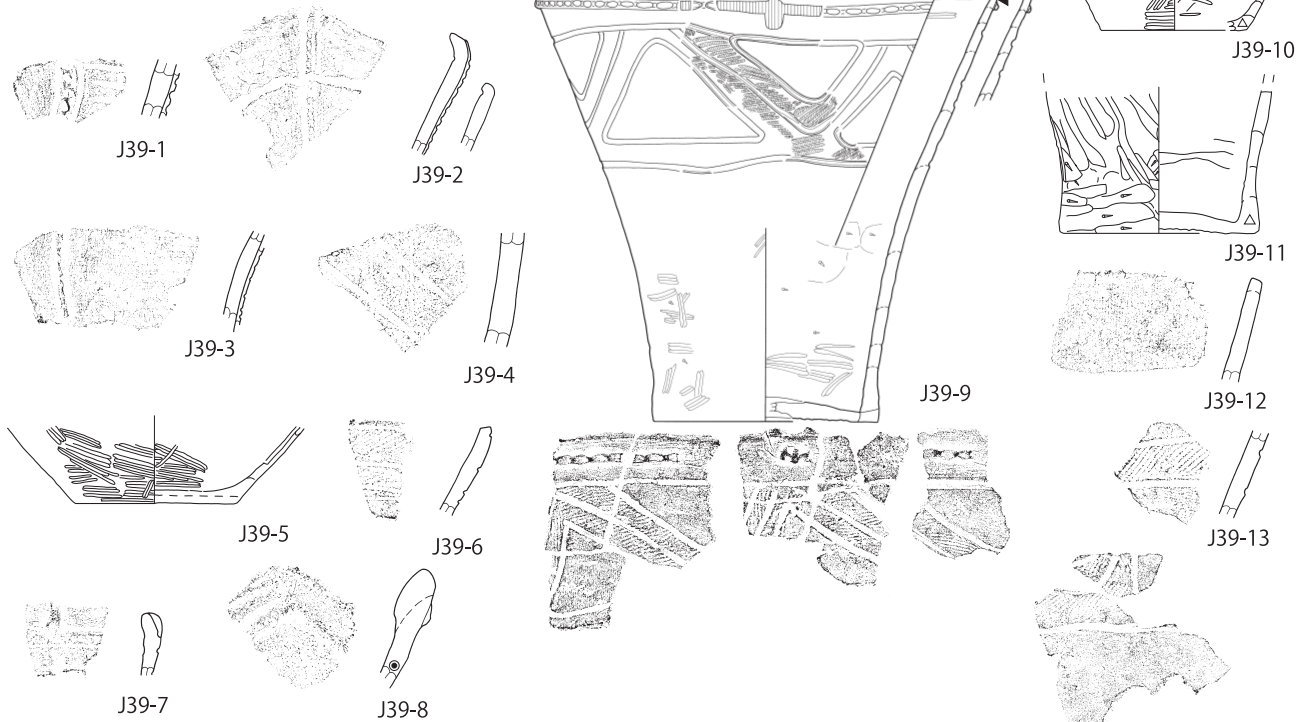


図 166 39号住居実測図(2)、出土土器実測図・拓影(1)

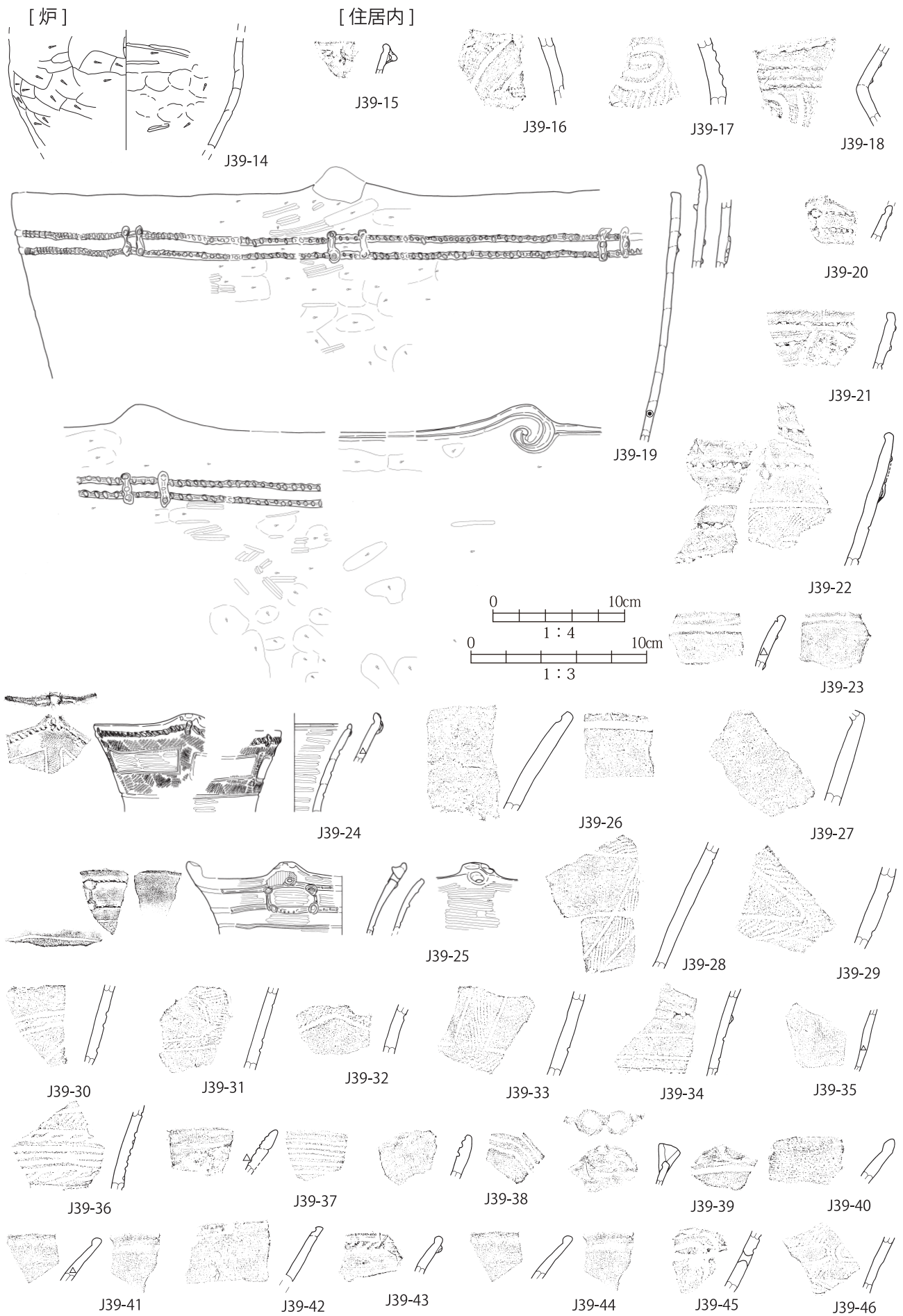


图 167 39号住居出土土器实测图·拓影(2)

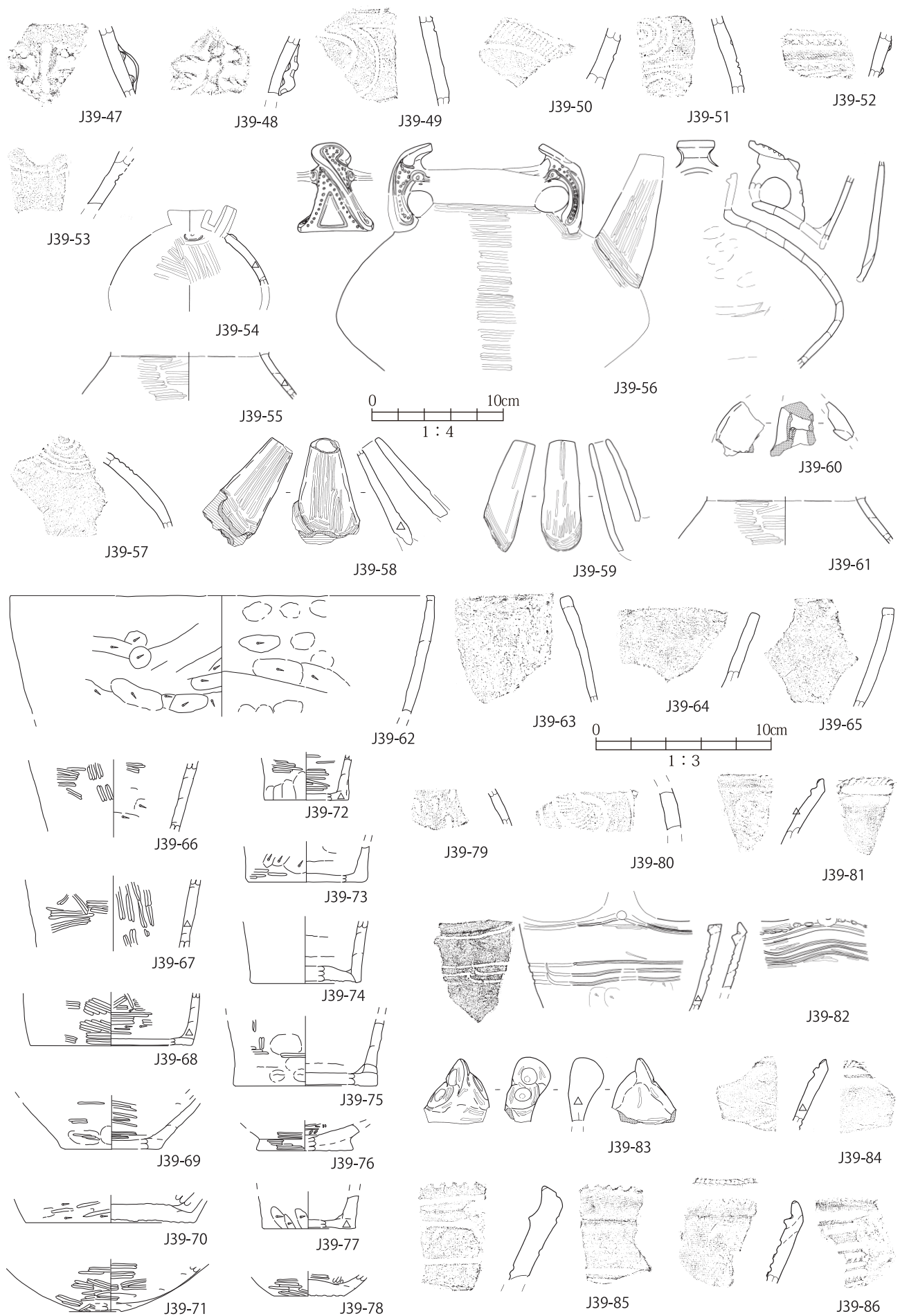


图 168 39 号住居出土土器实测图·拓影 (3)

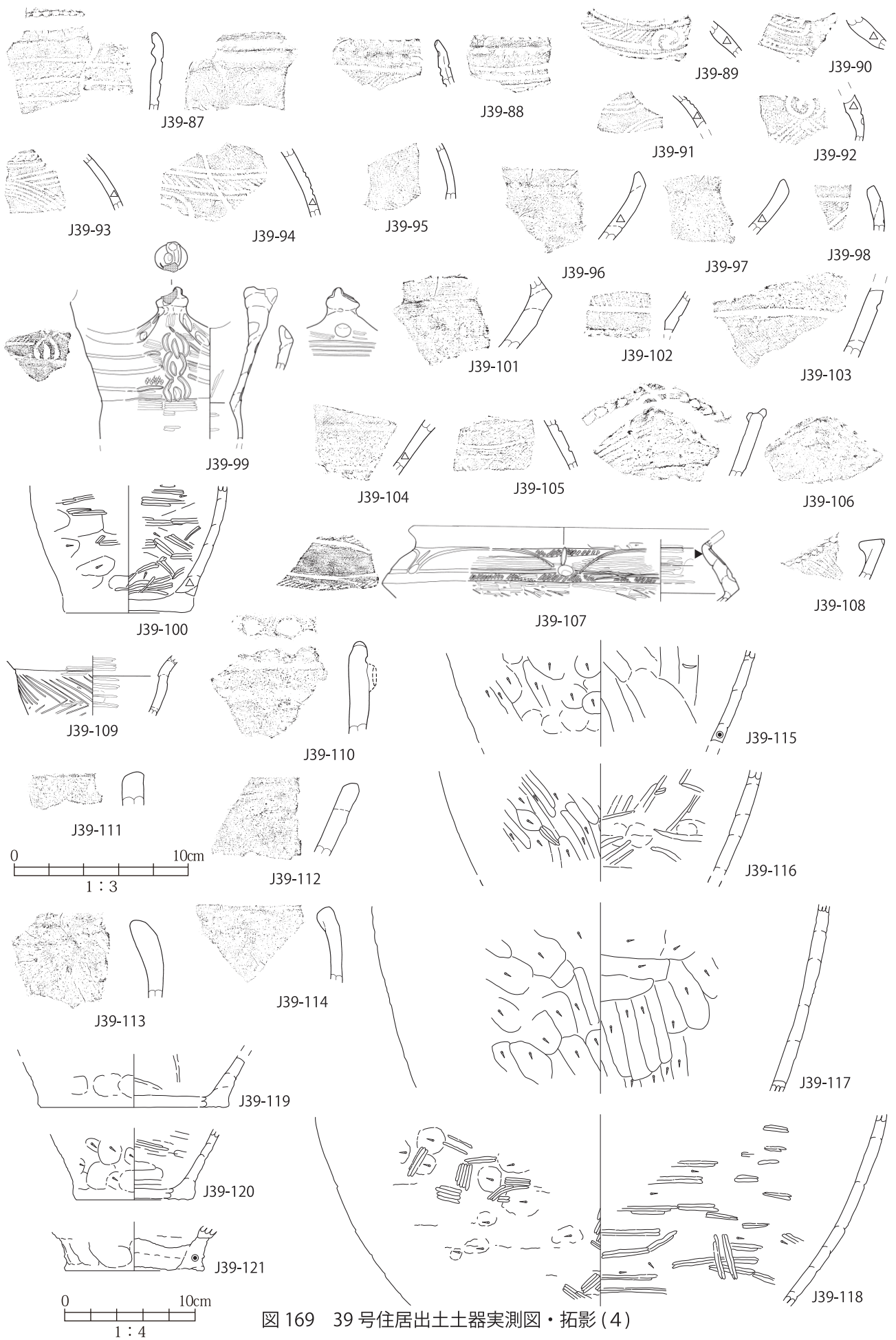


图 169 39 号住居出土土器实测图·拓影 (4)

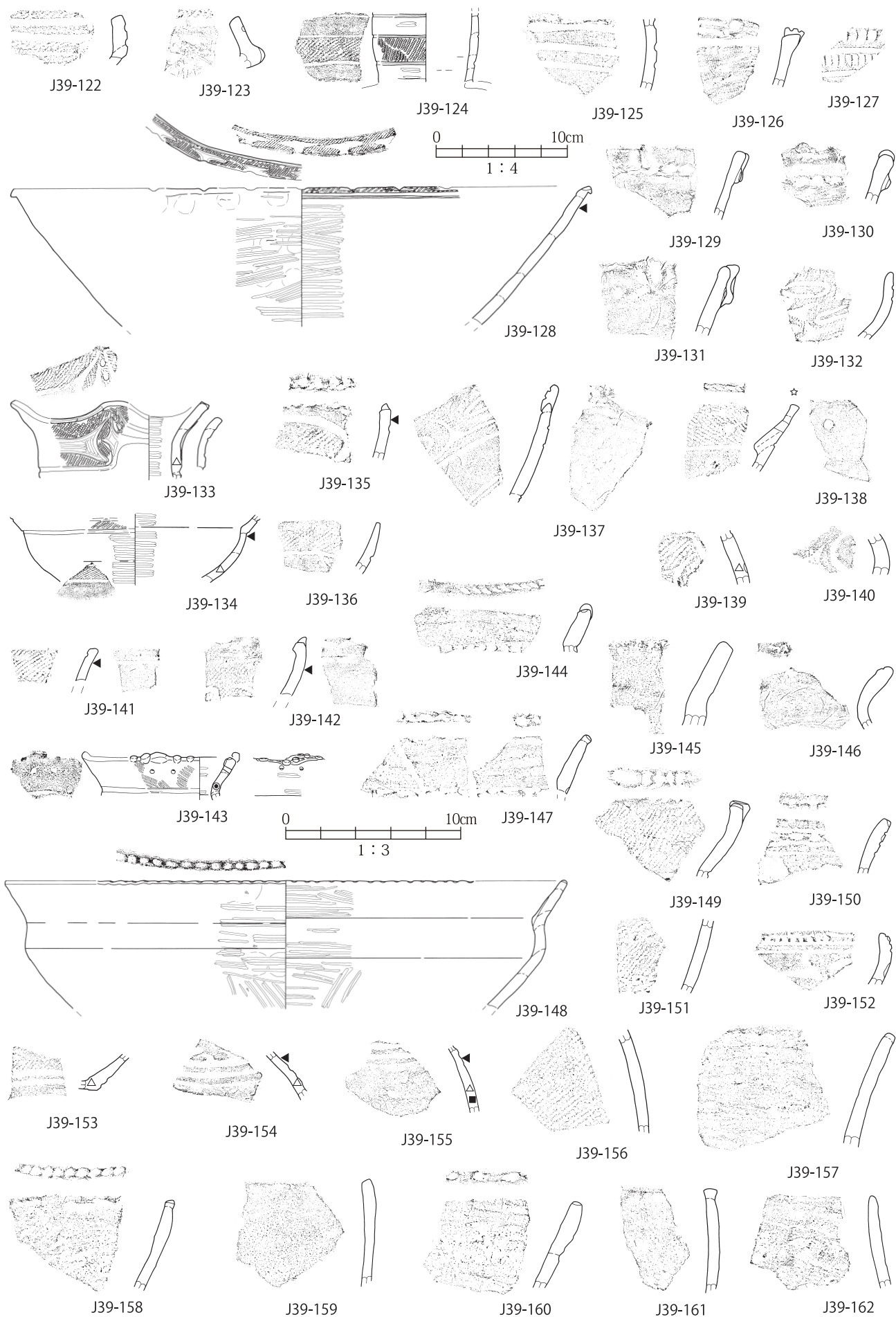


图 170 39 号住居出土土器实测图·拓影 (5)

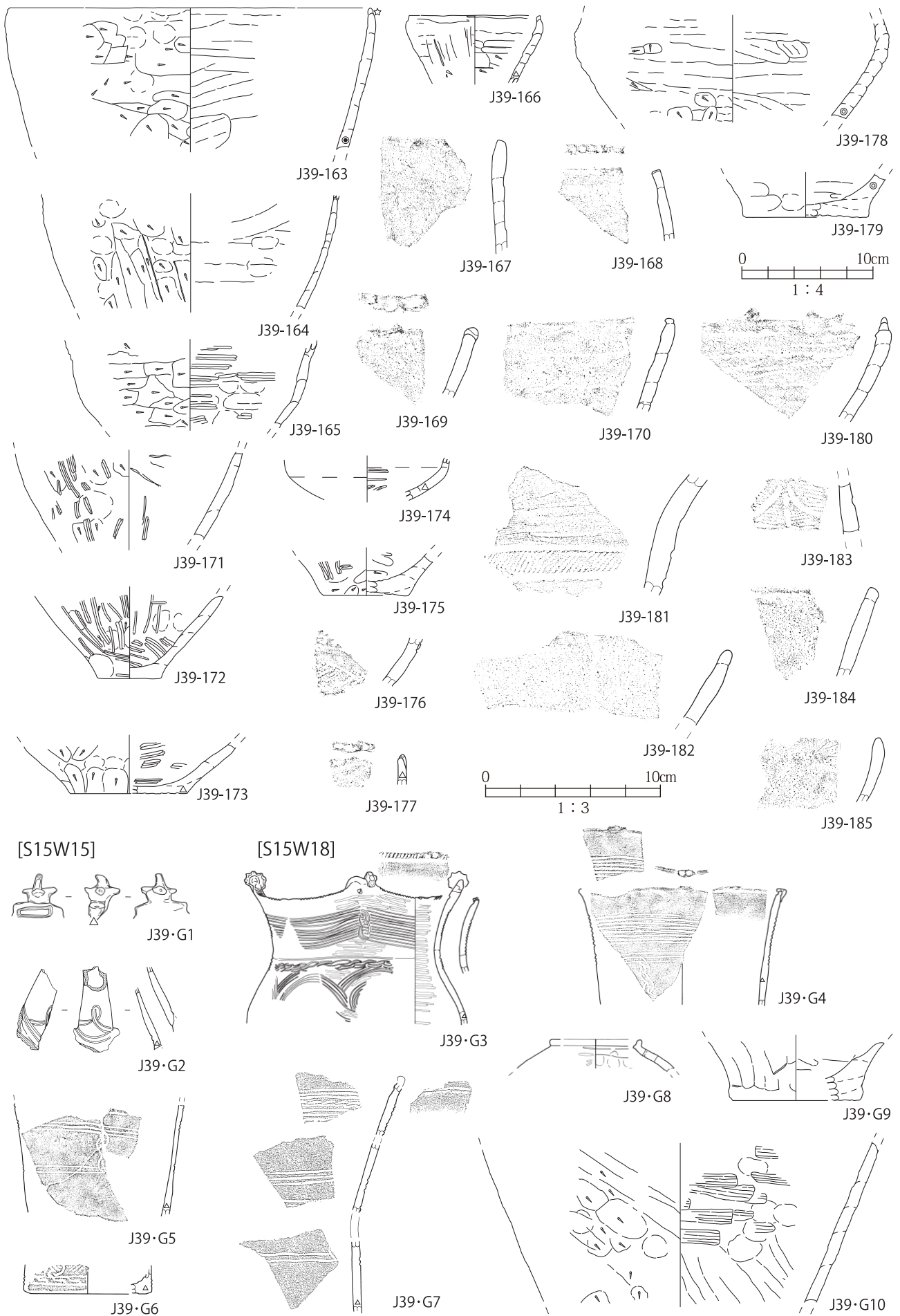


図 171 39号住居出土土器実測図・拓影(6)、関連グリッド出土土器実測図(1)

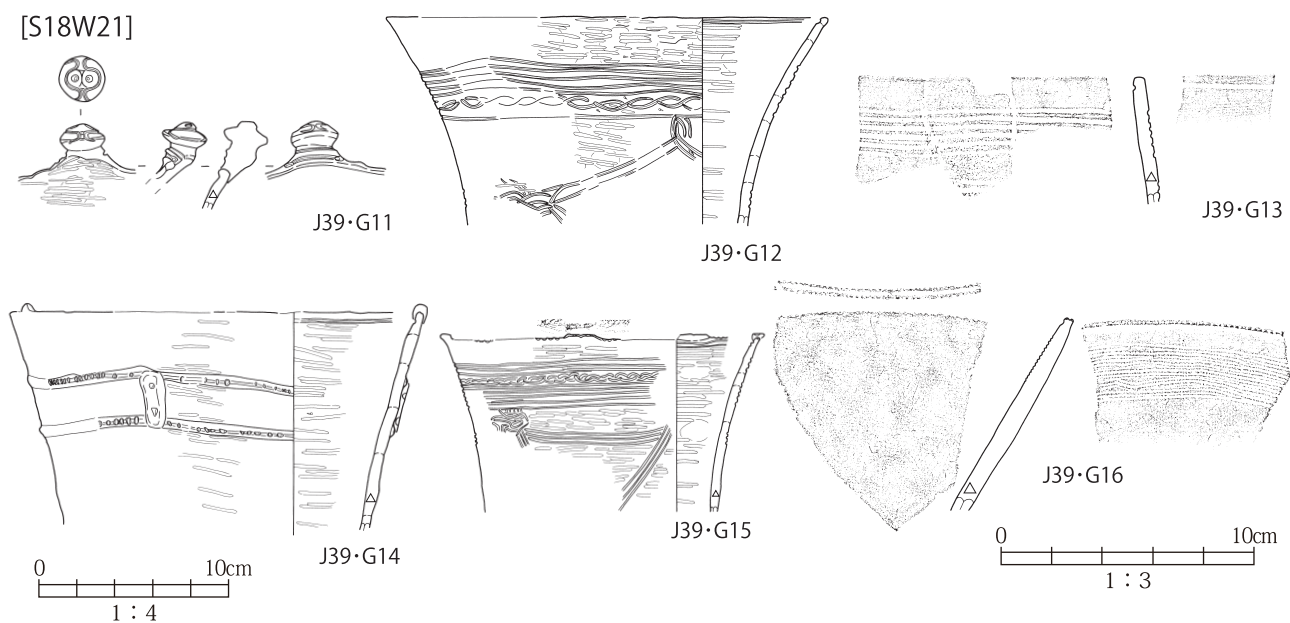


図 172 39号住居関連グリッド出土土器実測図・拓影(2)

(31) 39号住居 [図 165～172、写真図版 30、31、48] 【堀ノ内2式前半】

S15W15～S18W21の6グリッドにかけて位置する。第IV層上面で埋葬7を検出、続いて39号住居主体部の掘り方、出入り口施設(張出部)の石敷きと掘り方、土坑やピットも検出した。当初、主体部と張出部は別遺構と考えたが、主体部が敷石住居の構造を持つことが判明して、両者を一体の住居と理解した。また、精査の結果、切り合う遺構の埋葬7、土坑356、土坑502、ピット72、ピット131全てに切られることを平面で確認した。39号住居は東西方向に主軸を取る柄鏡形敷石住居で、主体部東西3.2m、南北4.0m、各辺中央がやや張り出した方形の掘り方をもち、出入り口施設の張出部は東西2.0m、南北2.6mの方形を呈する。埋土はほとんど残らず、埋没状況は不明だ。主体部、張出部とも、残存する掘り方の深さは10cm程度しかない。主体部では床面らしい硬化面も、敷石の痕跡も確認できなかった。敷石があれば早々に剥がれて転用された可能性があり、その有無に関わらず、床面と掘り方底面の間の層が残存したに過ぎないのだろう。主体部ほぼ中央に石囲炉が構築される。東西40cm、南北90cmほどの範囲で10cmほどの浅い掘り方を設け、その縁辺に人頭大～長辺50cmほどの円礫を配して縁石とし、窪みの一角に土器(J39-9)の底部を置いている。縁石は6個が飛び飛びに残り、ほとんどが被熱で風化が進んでいた。炉は半壊状態なのだろう。土器は深く埋置したのではなく、埋葬炉とは言い難い。掘り方の底は被熱で若干赤化していた。壁際には径20cmほどの小ピットが点々と残され、40cmほどの深さを持つものが含まれる。出入り口施設の張出部は、浅い掘り方の中央に、長軸50cmほどの円礫を5個、東西方向に並べ、その両側に同大からやや小ぶりの円礫を上面をそろえて敷き詰めている。出入り口と主体部の接点には、東西160cm、南北200cm、掘り方底面からの深さ120cmの大規模なピットが掘られ、それを埋めた上に出入り口施設の礫が並べられる。この大形ピットより西側、出入り口施設の西端にも浅いピットが5基残される。遺物は炉内出土、張出部下出土、住居内出土に別けて取上げられたが、住居内出土土器は床面付近もしくは床下の掘り方埋土からの出土なのだろう。

炉内出土のJ39-9が時期決定の最大の根拠となる。堀ノ内式の朝顔形精製深鉢で、構図に乱れや手抜きが無いので、堀ノ内2式前半と推測する。炉内出土のJ39-10～J39-13も同類だ。住居形態とも整合的だろう。J39-14は隆帯文土器共伴の無文粗製土器で、この個体の細片1片だけが炉内出土である。住居張出部下から出土した小破片も中期(J39-1)～堀ノ内式(J39-2～J39-5)で整合的だが、加曾利B2式2片(J39-

6、J39-7) と中ノ沢 B 類型 1 片 (J39-8) については説明が付かない。

住居内出土土器の個体数の半分、重量では大半は堀ノ内 2 式で、J39-19 ~ J39-57 が該当するだろう。注口土器注口部 J39-58 ~ J39-61 や、朝顔形精製深鉢底部の J39-66 ~ J39-78 も整合的だろう。無文粗製土器のうち J39-62 ~ J39-65 は器壁が薄く、口端部が平坦で外面はケズリでフラットに仕上げる。堀ノ内期に特徴的な粗製土器ではあるまいか。三十稲葉式 J39-79 や称名寺式 J39-80、堀之内 1 式 (J39-16 ~ J39-18) は混入品で良いとして、加曾利 B1 式 (J39-81 ~ J39-98)、加曾利 B2 式 (J39-99 ~ J39-110)、上ノ段式前後と共伴しそうな無文粗製土器 (J39-111 ~ J39-118) や深鉢底部 (J39-119 ~ J39-121)、上ノ段式 (J39-122 ~ J39-124)、瘤付土器 (J39-127) や中ノ沢 K 式 (J39-125、J39-126)、晩期初頭~中葉諸型式 (J39-128 ~ J39-156) とそれに共伴しそうな無文粗製深鉢 (J39-157 ~ J39-170、J39-178 ~ J39-180) など、破片は小さいが少なからぬ新しい時期の土器が出土する。炉が半壊状態だったのなら、住居の検出レベルまで攪乱を受けて後代の包含層に乗ったと考えられ、それに伴う遺物が一緒に取り上げられたからなのだろう。関連グリッドの時期別個体数・重量表では加曾利 B 式が優勢で、晩期土器も一定量認められ、堀ノ内式は少ないのもそうした解釈と整合する。

39 号住居からは動物骨が 185g 出土しており、遺跡全体の動物骨の 9% に当たる。だが、堀ノ内 2 式に伴うとは断定できず、後代の包含層に帰属する可能性もある。

住居張出部下出土土器の問題は解決できないが、39 号住居は量的に圧倒する堀ノ内 2 式前半に属すると判断する。中実土偶の板状の胴部が 1 点あるが、この住居に帰属する可能性がある。39 号住居関連グリッド出土の堀ノ内 2 式に関連しそうな土器を、参考に図示した。

(32) 40 号住居 [図 173、174、写真図版 31、33] 【佐野 1b 式~2a 式】

S39W12 ~ S42W18 の 6 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。22 号住居で記述したとおり、22 号住居内の調査に着手したところで新たな炉縁石を発見し、22 号住居の下に 40 号住居が存在するのを把握した。また、住居の北東~東辺の掘り方を検出し、同時に 22 号住居の外側に位置する土坑の一部に切られることも確認した。22 号住居の調査終了後、その床下を精査して 40 号住居全体を検出し、最終的に土坑 647、土坑 648、土坑 768 を切り、土坑 262、土坑 590、土坑 629、土坑 631 ~ 土坑 633 に切られることを確認した。南北で最大 3.9m、東西 4.5m の長円形を基調とした不整形の掘り方を持つ。壁の立ち上がりは最大でも 20cm しか残らない。北西辺の壁際には、狭い範囲だが浅い壁溝が巡る。床に硬化面は確認できない。住居の中央付近を 20cm ほど窪め、人頭大以上の円礫 5 個と小礫 3 個を並べた石囲炉が構築される。炉の南東辺の縁石は失われている。炉内に焼土はないが、縁石の一部は被熱で風化している。南辺壁際のピットのみ 50cm ほどの深さがあるが、それ以外のピットは浅い。住居南半のピット出土として取り上げられた土器と、40 号住居出土として取り上げられた土器がある。前者のピットは特定できないが、該当する可能性のあるピットは 3 基ある。埋土が薄いので、後者のほとんどは床面付近からの出土だろう。

帰属土器はわずかで破片も小さく、時期別個体数・重量表を見れば圧痕隆帯文深鉢 J40-12 の存在が突出して大きい。中期後葉の住居ではない。範囲が重複する S42W15 グリッドは佐野 2 式が突出するが、それらは 40 号住居の上に乗る 22 号住居に帰属するだろう。ピット出土の J40-1 ~ J40-3 は佐野 1b 式~2a 式に関わりそうで、22 号住居・関連グリッド出土土器の前半とは近そうだ。無文粗製土器 4 片 (J40-6 ~ J40-9) は隆帯文土器と共伴するタイプで、壺形鉢 J40-11 とともに晩期前葉に属する可能性があり、ピット出土土器よりは古そうだ。それ以外は中期~後期の細片で、いずれも混入品として除外できるだろう。破片が小さくていささか弱体だが、佐野 1b 式~2a 式の住居の可能性を考えたい。晩期の中でも新しそうな耳飾が 1 点あるが、住居と整合するかどうかはまだ不明だ。

(33) 竪穴3 [図175～178、写真図版32] 【堀ノ内2式～加曾利B1式前半】

S18W24～S21W27の4グリッドにかけて位置する。礫群中～礫群下の配石19の精査中に、第IV層上面で掘り方を検出した。配石19が竪穴3の上に乗る、他には切り合う遺構は無い。南北3.0m、東西2.8mで、各辺中央がやや張り出した方形の掘り方を呈する。埋土は分層できず、床はすり鉢状で中央部が深い。床面らしい硬化面はなかった。壁の傾斜は緩く、壁高は40cmあり、エリ穴遺跡では最も深い。炉はなく、ピットなどの施設も発見できなかった。当初は30号住居と命名したが、炉が存在せず規模もやや小さいことから、竪穴3に名称変更した。竪穴住居とは言い切れないが、住居の可能性もある遺構と考えておく。

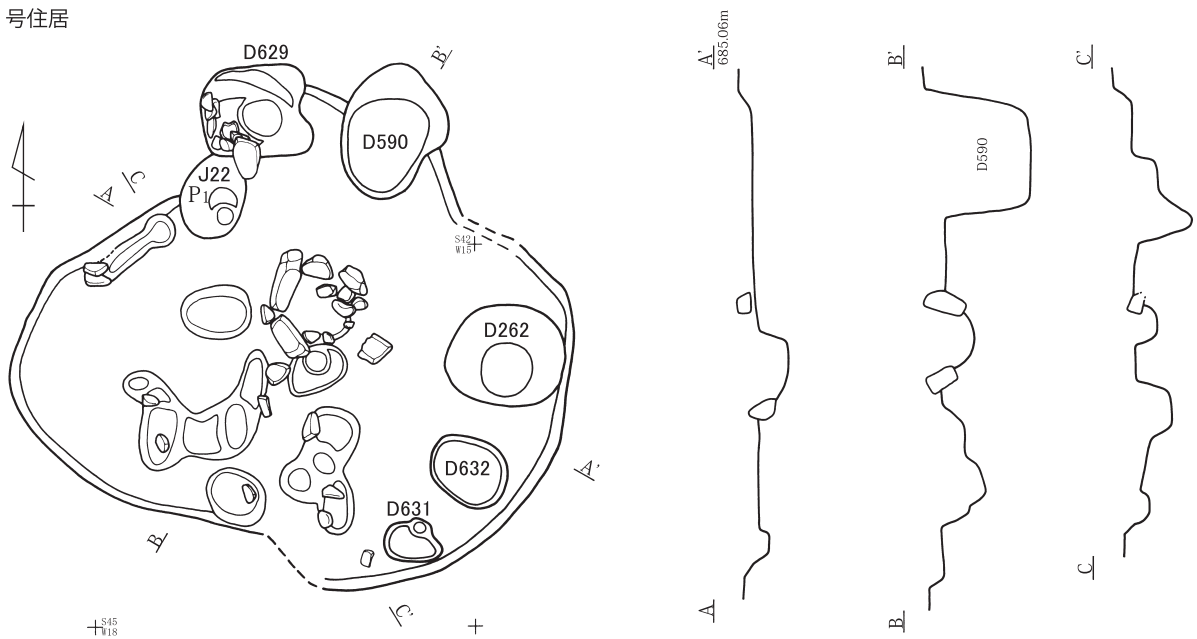
遺物は竪穴3として取り上げられており、床近くの出土品を摘出することはできない。帰属土器の7割は堀ノ内2式(T3-9～T3-38)～加曾利B1式前半(T3-60～T3-75)に限定でき、時期別個体数・重量表でもこの2型式が圧倒的である。無文粗製深鉢(T3-39～T3-51)や朝顔形精製深鉢底部(T3-52～T3-59)も、その範疇に収まるだろう。称名寺式(T3-2、T3-3)や堀ノ内1式(T3-5、T3-6)は混入品として排除できる。加曾利B1式後半(T3-76)以降では、加曾利B2式(T3-81～T3-96)、東海地域後期中葉に関わる可能性がある浅鉢(T3-97)、晩期初頭型式(T3-102、T3-103)、佐野1式(T3-104)、佐野2式(T3-105)、氷式に先行しそうな浮線文土器(T3-106)がある。無文粗製深鉢(T3-99～T3-101)は上ノ段式に組成するタイプだが、加曾利B2式に遡る可能性もある。これらを除外できる根拠は無く、特に埋土上に配石19が乗るので、縄文時代以降に攪乱を受けたことは考えにくい。配石19からは堀ノ内式から氷式までの土器が出土しており、帰属時期は氷式を下限とするのは確実だからだ。なお、竪穴3の範囲と重複するS18w24・S18W27の2グリッドでは加曾利B式が優勢だが、B1式前半に限定的というわけではない。少々強引だが、竪穴3は遺物量の多い堀ノ内2式～加曾利B1式前半の幅の中に属し、その廃絶後の窪地に、より新しい時期の土器が混入したと解釈しておこう。なお、中空土偶の中空脚部、中実土偶の上半身、エリ穴独自の分銅形土偶の下半が1点ずつ出土しているが、前2者は竪穴3に帰属する可能性があるだろう。

(34) 竪穴4 [図179～182、写真図版32、48] 【堀ノ内2式?、晩期?】

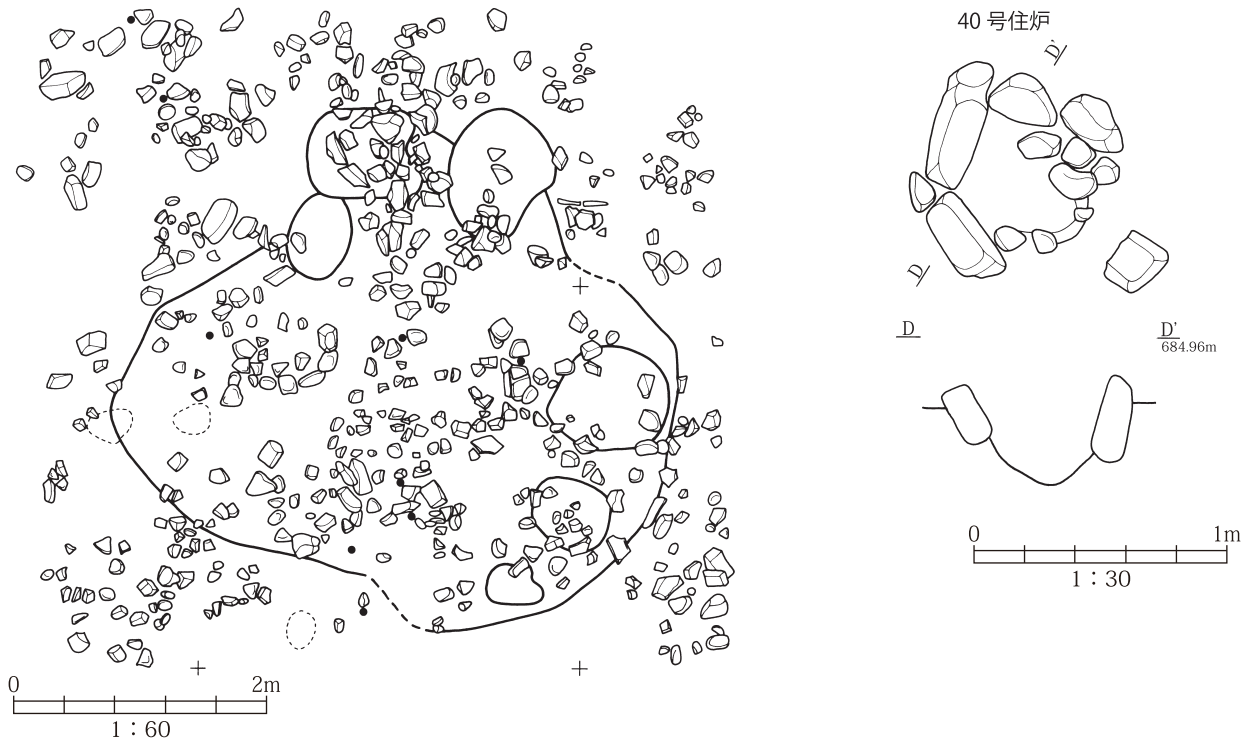
S27W21～S30W24の4グリッドにかけて位置する。礫群下の配石21の調査終了後、その下から竪穴4の掘り方を検出した。続いて33号住居を検出し、竪穴4が33号住居を切るのを平面で確認した。竪穴4の上に配石21が乗るのは確実である。竪穴4は南北3.1m、東西3.2mで、方形基調の不整形な掘り方を呈する。埋土は分層できず、床は西辺が低く、平坦ではない。床面らしい硬化面はなかった。壁はほぼ垂直で、壁高は10cm程度しか残っていない。炉はなく、壁際に寄った辺りに大小のピットが6基残される。深さはまちまちだが、柱穴の可能性もあるだろう。当初は32号住居と命名したが、炉が存在しないことから、竪穴4に名称変更した。

竪穴4の土器の半分以上はピット出土である。P1は堀ノ内2式(T4-7、T4-11～T4-19、T4-25)が主体を占め、堀ノ内式の範疇に収まる破片(T4-8～T4-10)や、朝顔形精製深鉢底部(T4-20～T4-24)なども整合的である。しかし、加曾利E式(T4-1～T4-6)は混入品として排除できるにしても、加曾利B1式(T4-26、T4-27)、晩期初頭型式(T4-28～T4-32)、佐野1～2式(T4-33～T4-41)、氷式(T4-42)を排除できる根拠は見出せない。P2出土土器は細片に過ぎず、中期土器(T4-47～T4-49)と女鳥羽川式(T4-52)を含む晩期土器(T4-50、T4-51)が混在して、時期決定の材料にはなりにくい。P3は堀ノ内2式(T4-58～T4-62)が主体的だが、無文粗製土器T4-64は隆帯文土器と共伴しそうで、整合的ではない。P4とP5は細片ばかりで量も少なく、とりとめがない。P7は唐草文系(T4-80～T4-83)が主体で、堀ノ内式細片(T4-86、T4-87)はあるものの、中期後半の土坑の可能性があろう。竪穴4の埋土から取り上げられた土器は、堀ノ内2式(T4-90～T4-95、T4-123)、晩期初頭型式(T4-102～T4-110)、佐野式後半(T4-111～T4-121)に

40号住居



40号住遺物出土状況

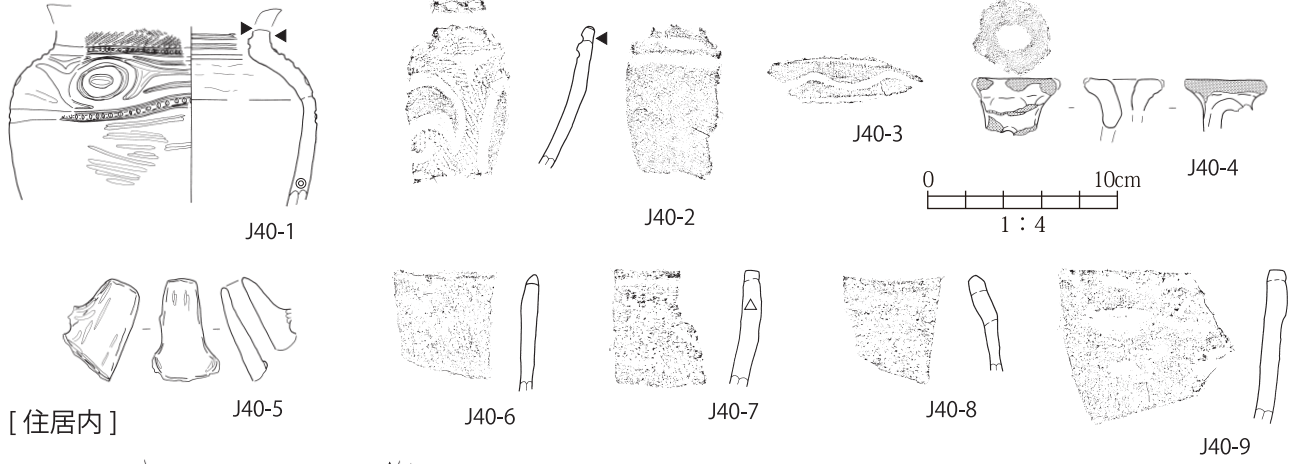


40号住居・関連グリッド出土土器の時期別個体数 (上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g)

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
40住	1055				1			1	2	4				1		7		6
					270			20	30	70			20		110		70	
S39W15 (22・40住)	21370			2	1			2	3	7	3	3	4	34	3	79	5	37
				80	30			30	20	90	20	100	30	1180	60	1460	40	1610
S42W12 (40住)	11990			1					1	4		2	5	10	5	46	7	37
				10					10	40		50	90	140	70	490	90	1320
S42W15 (22・40住)	31985									1			6	61	4	105	16	36
										10			60	1330	60	2470	240	3480

図 173 40号住居実測図

[ピット]



[住居内]

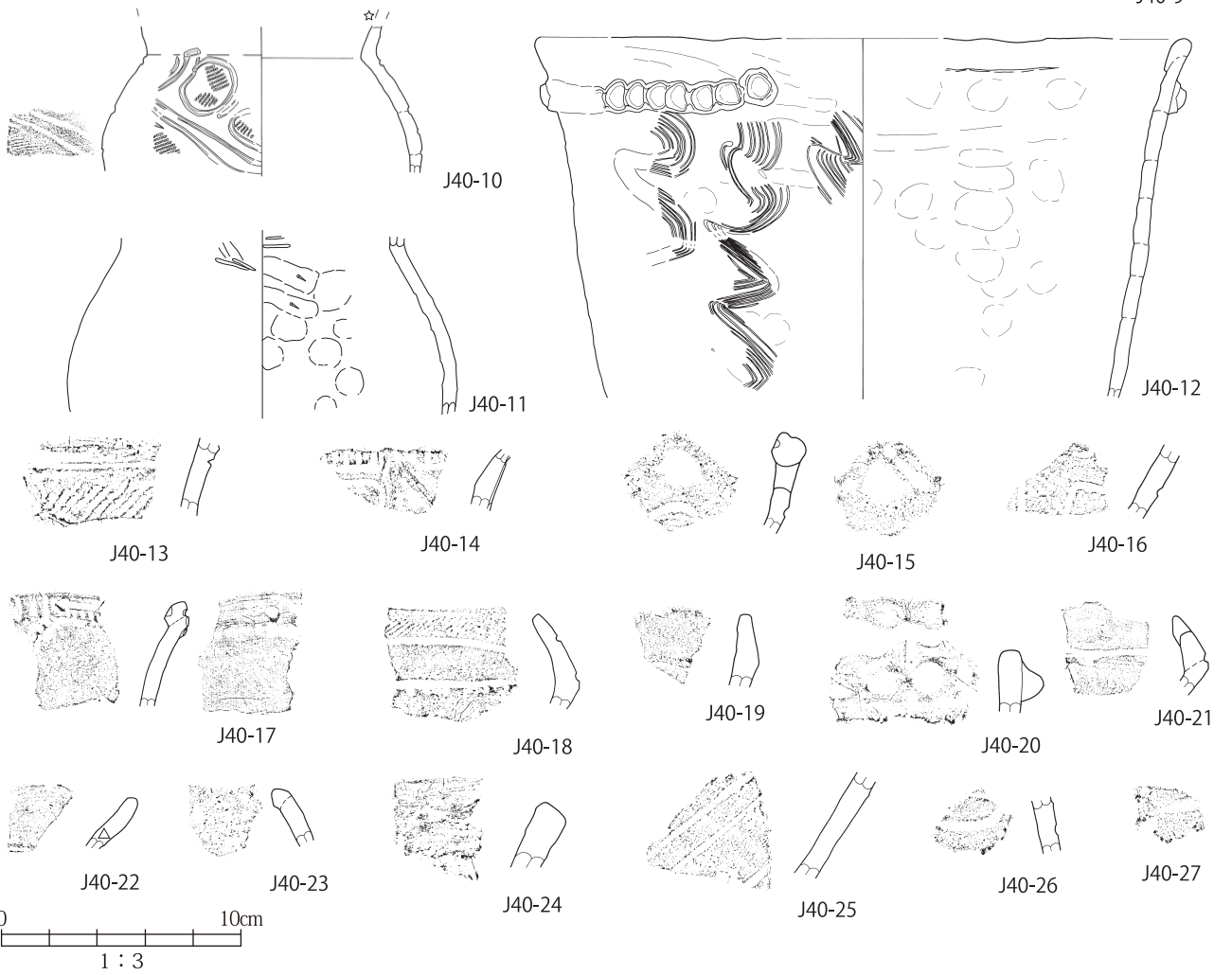
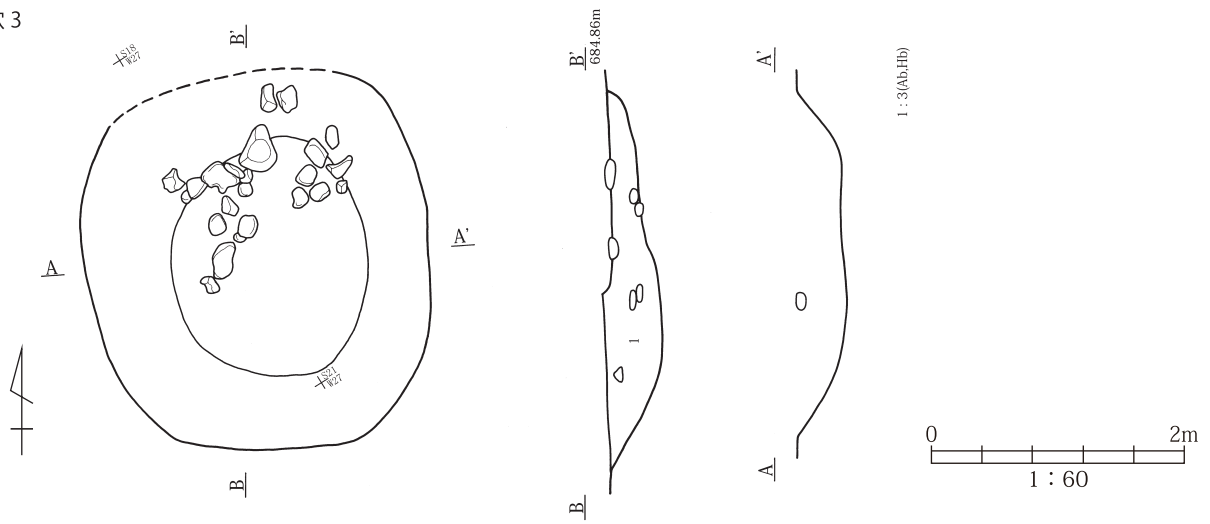


図 174 40号住居出土土器実測図・拓影

豎穴 3



豎穴 3・関連グリッド`出土土器の時期別個体数 (上段 : 口縁部破片数、下段 : 口縁部重量 g)

地点	重量 g	中期					後期					晩期			後晩			
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
豎 3	16070			4	1	1		2	42	46	3	2	2	10		85	2	58
S18W24	36960			110	100	10		70	850	910	120	40	20	10	1440	50	1690	
S18W27	25870			1			1	1	12	42	27	7	4	9	72	5	38	
S21W24	320			10				60	150	1490	820	320	40	180	1670	50	1000	
S21W27	6690	1					1	5	15	5	1		1	1	29	1	23	
		120				40		20	580	110	30		10	10	340	40	790	



図 175 豎穴 3 実測図、出土土器実測図・拓影 (1)



图 176 豎穴 3 出土土器実測図・拓影 (2)

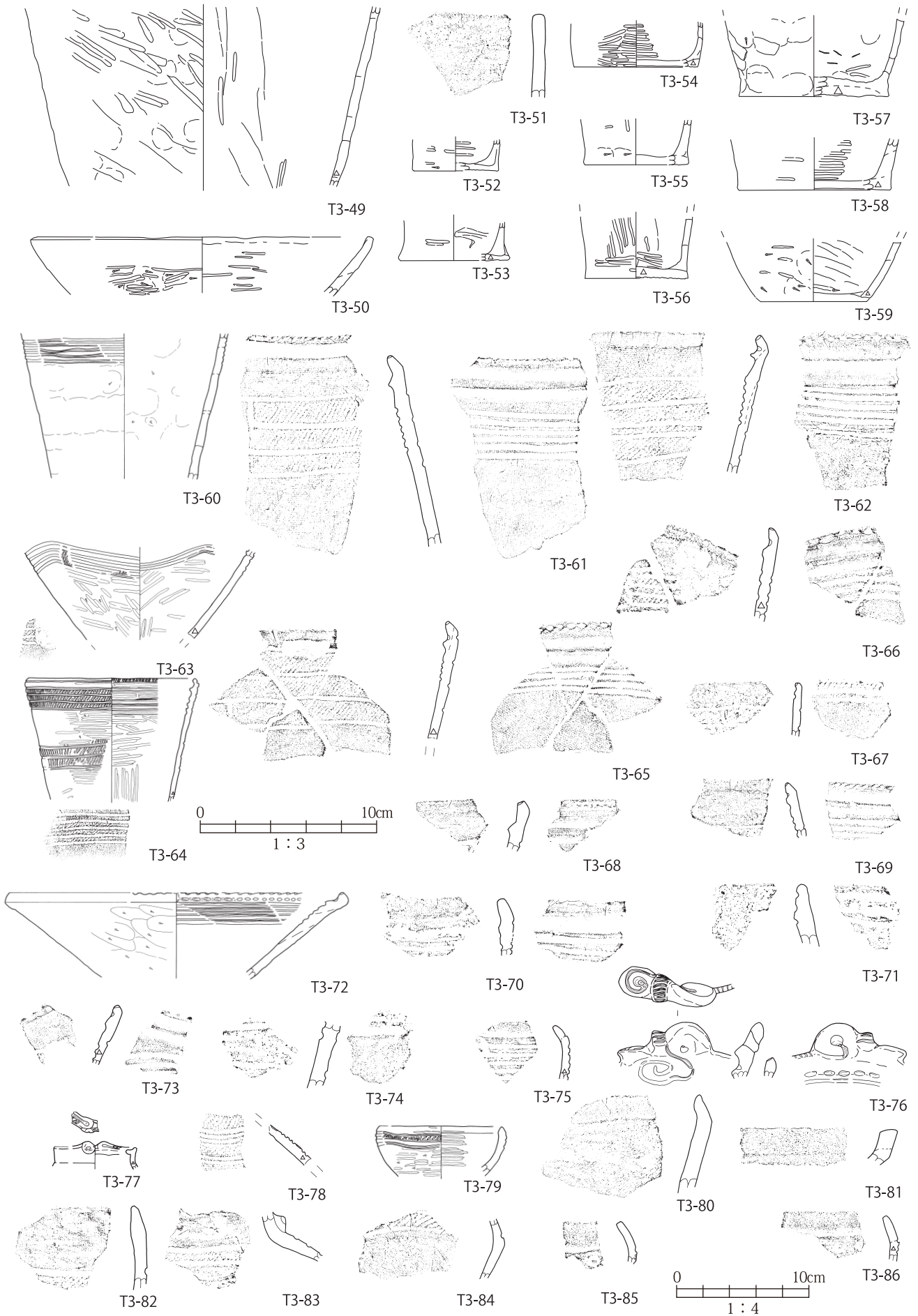


图 177 豎穴 3 出土土器実測図・拓影 (3)

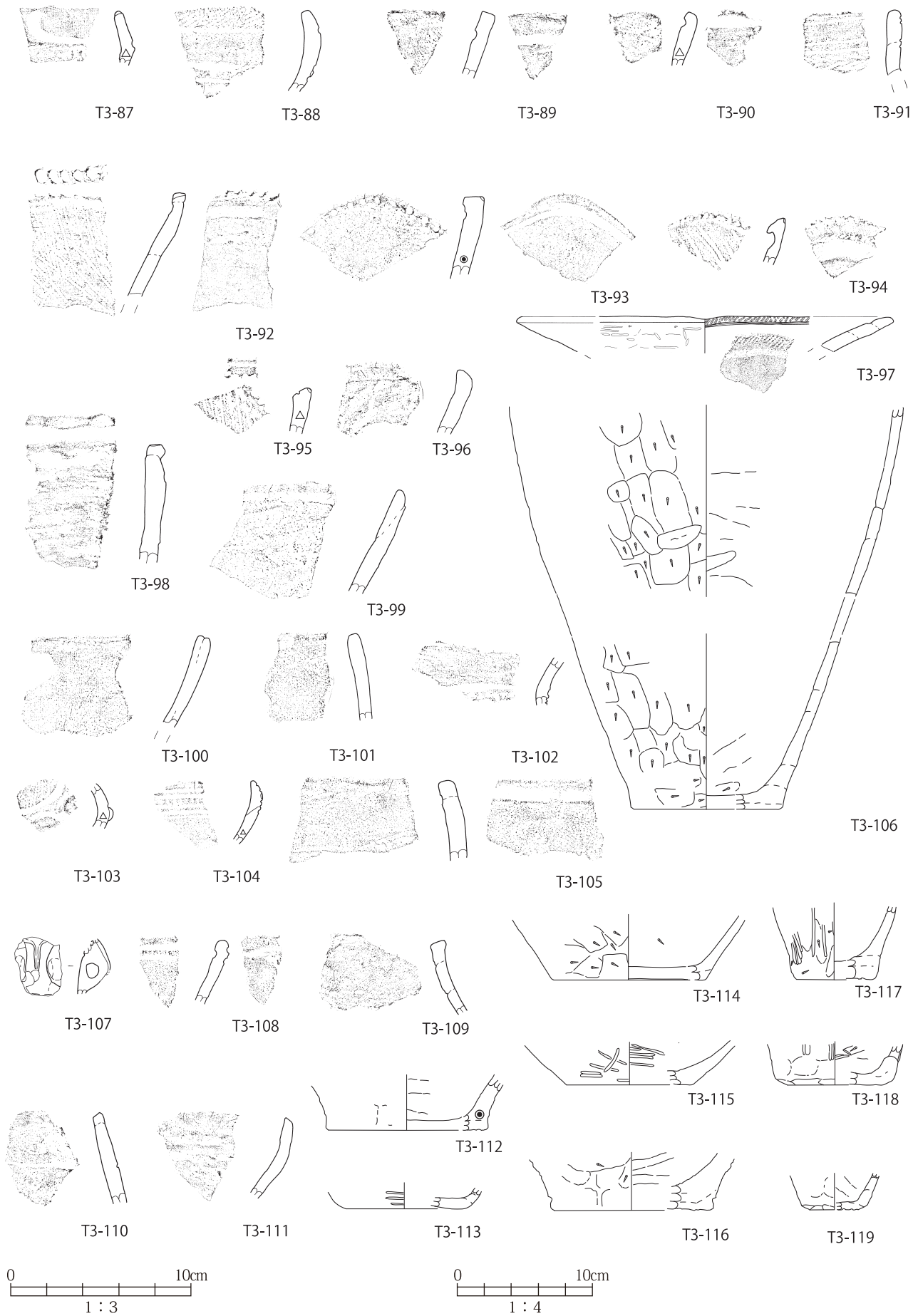


图 178 豎穴 3 出土土器実測図・拓影 (4)

3分される。いずれも破片は小さく、決定的な材料にはなりにくい。重複するグリッド出土の目立つ土器(T4・G1～T4・G6)は、晩期前葉が主体である。なお、中実板状の土偶胴部が1点あり、堀ノ内2式と関わるだろう。なお、蓋形土器T4-123の縮尺は1:2である。

竪穴4の帰属時期は決め手を欠く。時期別個体数・重量表では堀ノ内式が最多で、範囲がほぼ重複するS30W24グリッドも同様である。中期後葉の包含層に堀ノ内2式期の遺構が構築され、晩期に至ってその上部を損壊するような行為が行なわれて、その折に晩期の遺物が混入したといった経過を憶測するのが第1案である。堀ノ内2式期だとすれば、竪穴4は小ぶりすぎて住居とは言いにくい。堀ノ内2式期の包含層中に晩期の遺構が構築されたとするのが第2案である。炉こそないものの、晩期ならば竪穴4は竪穴住居の可能性が出るだろう。だが晩期土器破片は小さく、時期幅もありすぎる。なお、竪穴4の上に乗る配石21は遺物がなく、包含層中の検出なので、縄文時代の遺構だとしか言えず、竪穴4の時期特定の役にはたたない。第1案がやや優位かと思うが、第2案も併記して結論とせざるを得ない。P7だけは中期後半の別遺構の可能性があろう。

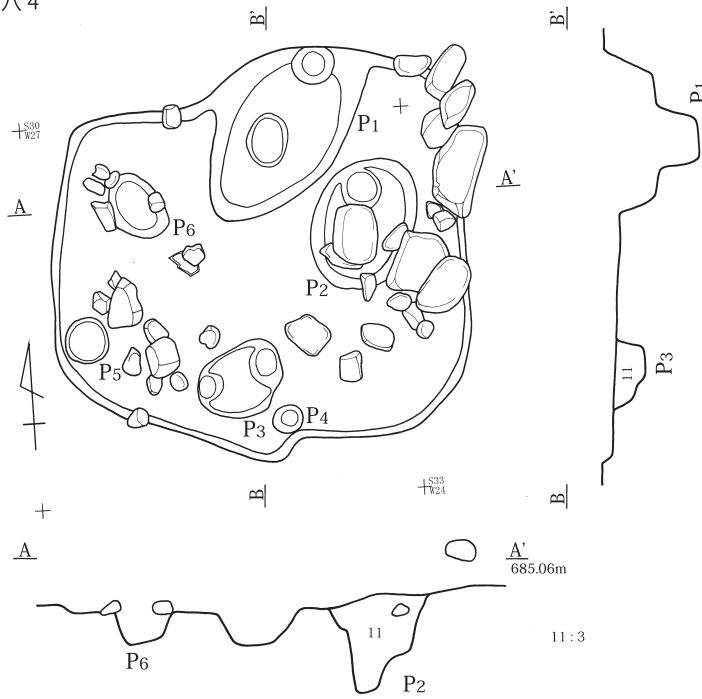
(35) 炉1 [図183、184、写真図版33] 【佐野式以降】

S0W15グリッドに位置するがその北西端にあたり、谷状低地の中に位置する。後期後葉以降、この低地は廃棄場に利用されたが、S0W15グリッドは晩期前葉の廃棄場になる。炉1の位置は晩期前葉を中心とする廃棄場の末端付近で、第IV層上面で石囲炉の縁石を検出した。径40cmほどの範囲に、長辺20cm程度の円礫を6個、ほぼ円形に置いてあり、掘り方は不明だ。炉の内部に被熱痕跡は無い。その他の施設の痕跡は無い。炉1は他住居の炉と特段の相違点は無いので、住居の施設と考えないわけにはゆかないだろう。N3W15、N3W18、S0W15、S0W18の4グリッドが住居範囲の候補になる。竪穴住居だとすれば、壁は第III層中にあるはずだ。

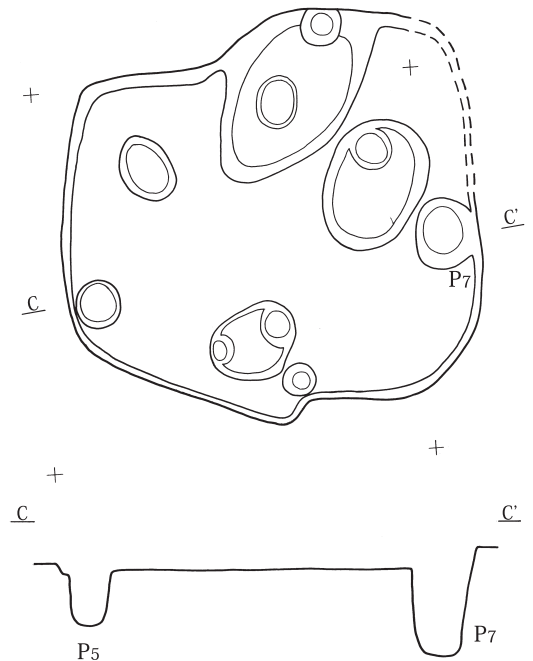
炉内出土土器で図示しうるのは小破片2点に過ぎない。R1-1は低波隆帯文深鉢で中ノ沢B類型第5段階、R1-2は隆帯文タイプの無文粗製深鉢だ。また耳飾も1点あり、R1-1よりは古いだろう。すべて晩期前葉に属し、廃棄場からの転落品の可能性を否定できない。

第III層中から掘り込まれた竪穴住居だとすれば、廃棄場の包含層を切って構築されたはずである。その場合、S0W15・S0W18グリッドの包含層は晩期前葉の土器が卓越するので、それより新しい時期、佐野式以降だということになる。住居範囲候補の4グリッドには上ノ段式～佐野2式の土器もある程度存在する。晩期前葉以前の土器は周辺の廃棄場からの転落品と言うことになるが、佐野式は炉1の住居に帰属する可能性が出る。晩期中葉には配石遺構が構築される等、谷状低地の利用・使用が進展することと関連付けられるかもしれない。しかし、佐野式の時期の廃棄場は下流側に隣接するS3W21グリッドが中心で、そこからの転落品が4グリッドに混入した可能性も高い。4グリッド出土土器は廃棄場出土土器の中で報告する。

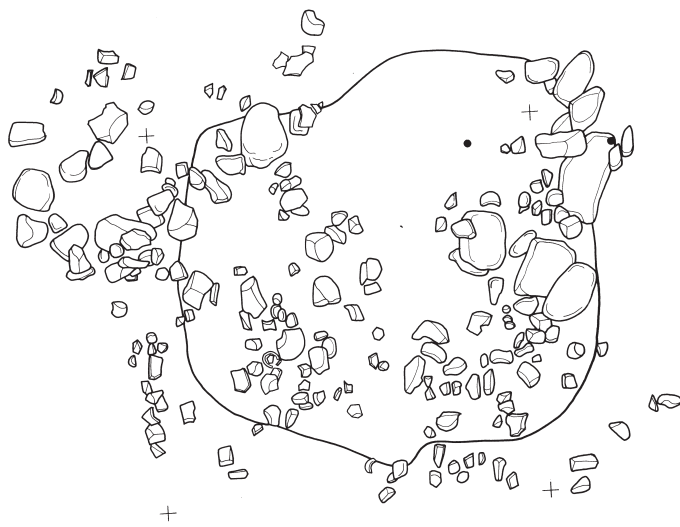
竖穴 4



竖穴 4 完掘状况



竖穴 4 遗物出土状况



[P1]

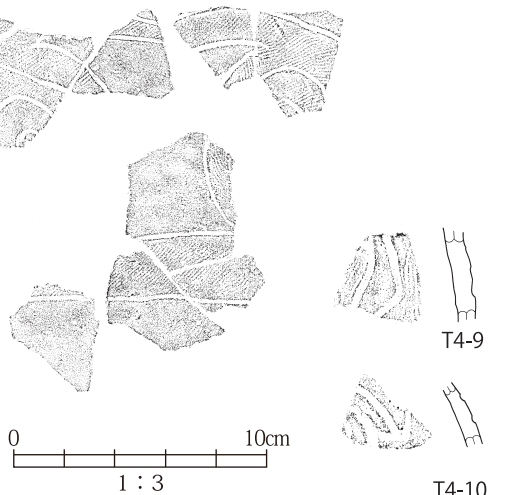
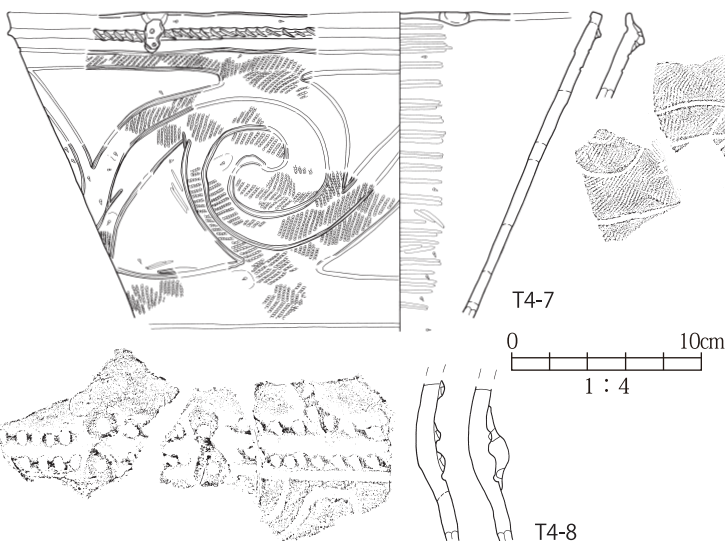
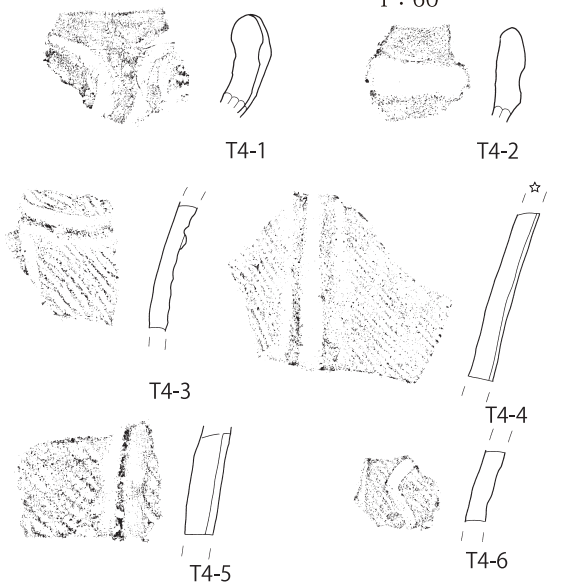


图 179 竖穴 4 实测图、出土土器实测图・拓影(1)

豎穴4・関連グリッド出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期				晩期			後晩			
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
豎4	11075		1 10	1 240	3 60		1 10		18 410	6 70			5 130	10 180	1 90	54 2020	5 30	21 940
S27W21	30800			2 20					46 830	23 520	9 150	10 320	10 90	30 760	5 100	114 2560	8 140	91 3730
S27W24	32200		1 30	3 90			1 20		47 520	36 660	8 160	4 110	6 150	11 240	1 100	129 2220	3 20	72 2580
S30w21	7125			2 100			4 210		3 300	2 10	8 220		1 50	5 610	1 20	15 210	2 10	9 910
S30W24	27755			2 50					30 390	10 340	2 10	7 130	4 80	18 280	3 40	119 1850		64 3030

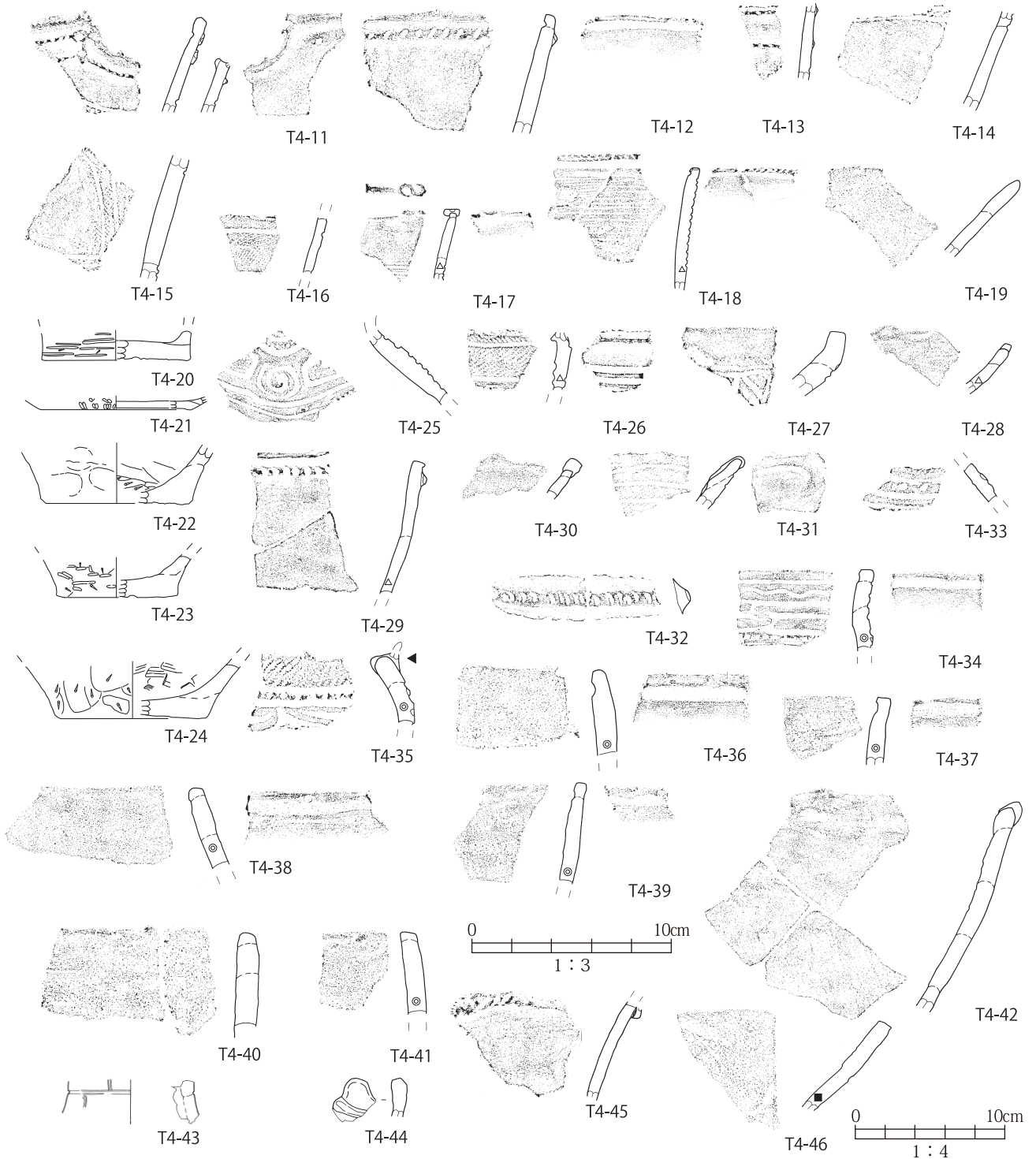


図 180 豎穴4出土土器実測図・拓影(2)

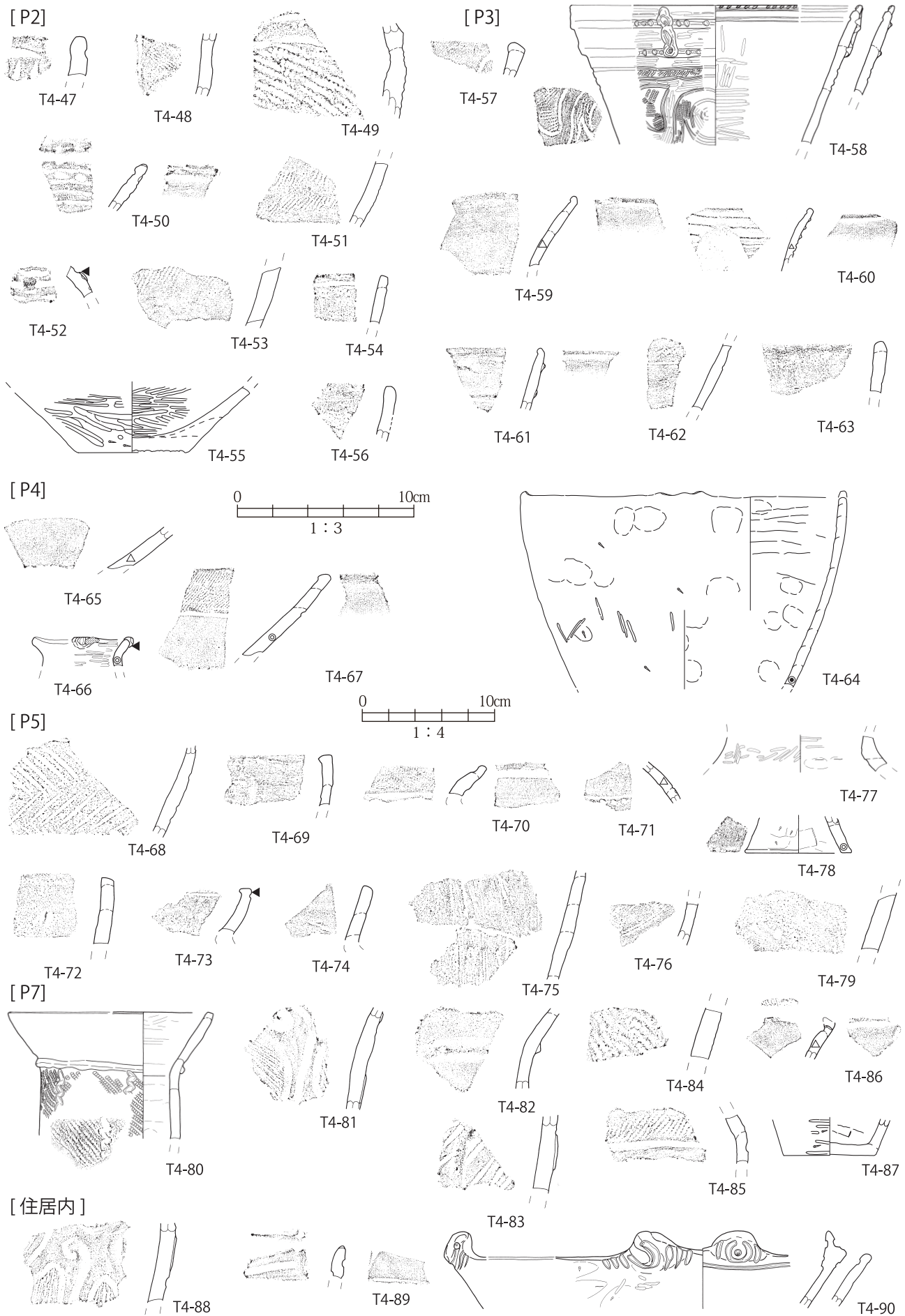


图 181 竖穴 4 出土土器実測図・拓影 (3)

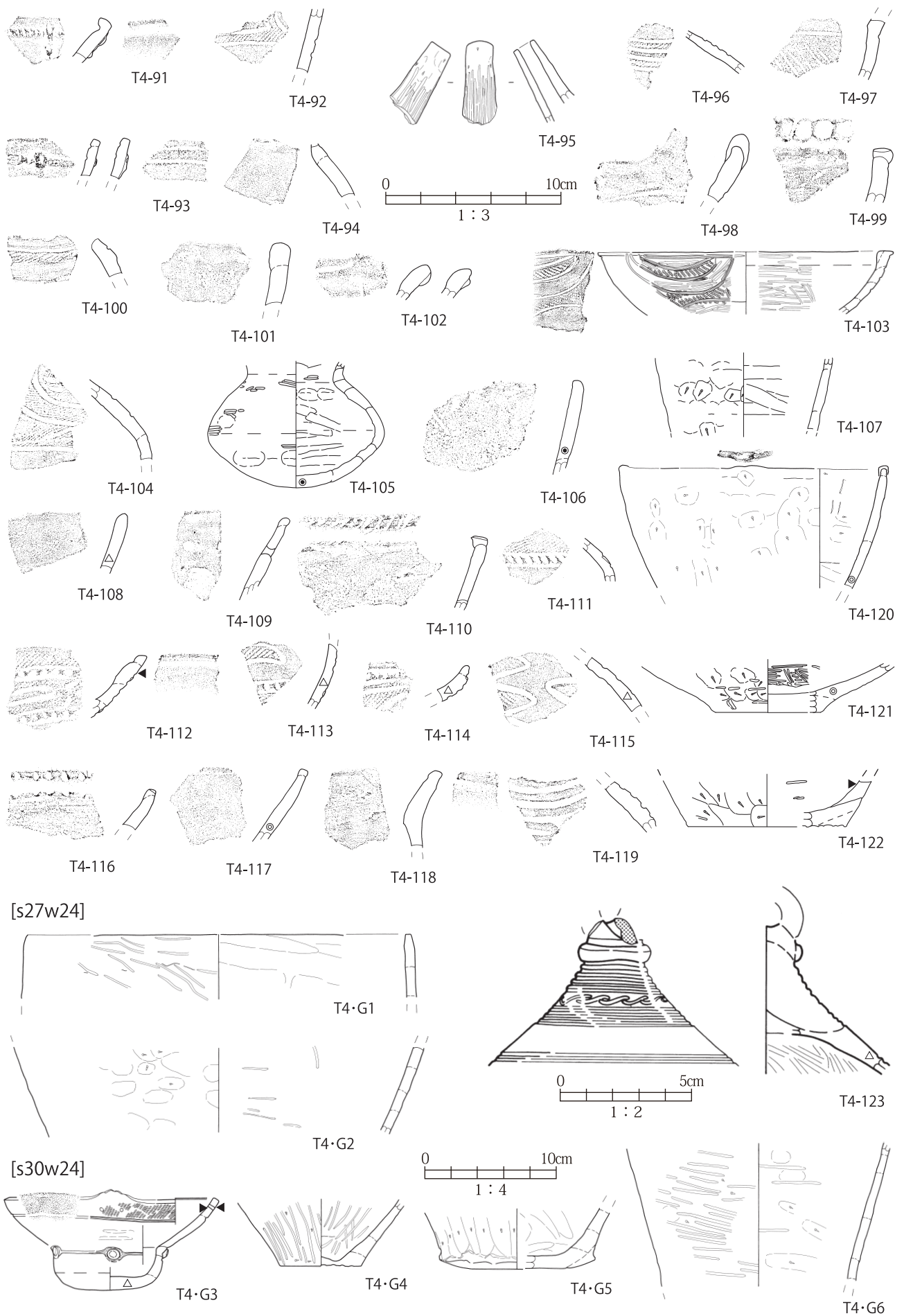


図 182 竪穴 4 出土土器実測図・拓影(4)、関連グリッド出土土器実測図

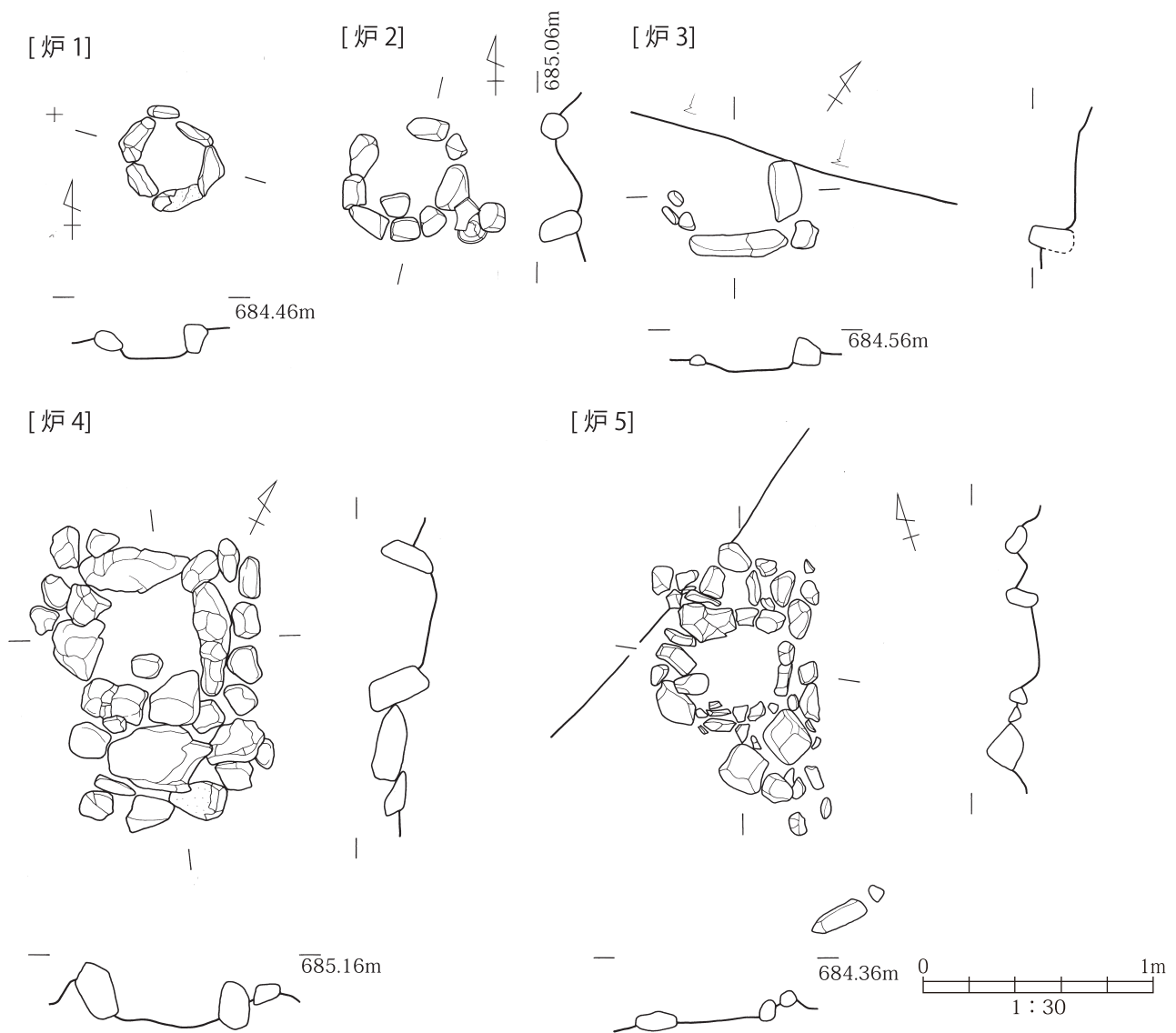


図 183 炉実測図

(36) 炉 2 [図 183、184、写真図版 33、48] 【佐野 2 式】

S0W9 グリッドに位置する。第IV層上面で炉 2 の石囲炉縁石を検出し、続いて施設の礫の列を端緒に 36 号住居を検出した。炉 2 は住居に伴う施設だと思われるが、その住居の掘り方やその他の施設は検出できなかった。炉 2 は 36 号住居西辺と推定される位置に接しており、住居は切り合うはずだが、平面では何も把握できなかった。しかし、出土土器に明瞭な相違があったので、36 号住居埋土上に炉 2 の住居が構築されたと判断した。炉 2 の住居の北辺は谷状低地に近接する可能性がある。付近の廃棄場は炉 2 より古い時期の土器が主体を占めるので、住居と谷状低地が重複するなら、住居北辺は谷状低地に形成された廃棄場の上に乗ることになる。住居の床面らしい硬化面は認められず、ピットなどの施設も不明で、炉だけを把握するに留まった。炉は径 50cm の範囲に人頭大よりやや小ぶりの円礫を 8 個、ほぼ円形に並べた石囲炉で、北西辺の縁石 1 個を喪失している。縁石の一部は被熱で風化しており、炉中央はわずかに窪み、被熱で赤化していた。炉南東側の縁石に隣接して土器が出土した。完形に近い R2-1、大形破片 R2-2、小破片 R2-3 ~ R2-9 がそれで、炉の時期決定の有力な根拠となる。

R2-1 は佐野 2 式の無文粗製深鉢、R2-2 も同時期の肩部文様帯型深鉢、R2-3 と R2-4 は佐野 2 式の破片、

炉1～炉5・関連ケリッド出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
炉1	70												1 10					
N3W15	27505		1 60						1 10	8 90	6 80	21 400	46 1160	26 560	4 110	127 1800	5 30	58 2860
N3W18	29685	1 20				1 30			2 50	8 80	7 50	7 90	26 330	42 1460	5 90	158 1830	15 90	67 2230
OW15	33510		2 100	3 40			2 90	1 30	11 160	42 540	54 1370	94 2510	256 10090	77 1570	6 180	542 10280	29 230	252 12750
OW18	59680		1 80	4 50					7 130	19 260	35 740	42 1060	215 6230	119 2710	9 140	697 14860	54 490	262 15320
炉2	1145												1 10	3 1800		1 20		4 830
OW6 (36住・炉2)	34870			9 250	6 130			1 20	27 530	19 180	35 510	19 310	4 50	9 110	1 10	109 2130	9 200	45 1520
OW9 (36住・炉2)	54720			3 50	6 150			5 150	27 620	26 340	46 920	42 870	52 940	8 120		231 5710	25 330	164 4730
S3W6 (36住・炉2)	36460	2 50	1 10	15 540	4 120			6 150	28 470	9 110	18 370	12 180	10 230	7 180	5 140	140 1840	24 190	81 2350
S3W9 (36住・炉2)	39050	2 10	2 50	23 1030	6 210			4 110	36 490	15 170	11 160	20 350	28 570	22 310		131 2150	23 260	108 4280
炉3	130																	
S3W24	118315			1 40					5 120	13 280	10 150	5 90	57 1130	74 2570	88 3010	434 13420	19 170	207 18480
S6W24	106440	1 10	1 100	6 130	1 10	2 20			10 50	57 880	28 750	27 680	79 1490	66 2370	31 1590	593 10180	25 200	194 9730
炉4	440				1 40											1 10		1 80
S3W12	33435	3 80	2 40	14 300	3 60	5 90	2 60	18 800	50 1240	22 560	22 480	8 200	17 280	2 40	1 10	73 1290	10 80	81 2860
S3W15	55370	1 80	1 20	6 150	2 60	1 10		3 150	10 250	28 680	43 1080	46 990	114 4120	10 290		253 4450	11 190	119 5470
S6W12	20475			8 140	1 20			4 60	9 60	12 200	13 130	4 160	13 160	2 20		75 760	11 80	49 1590
S6W15	14935			2 20				3 130	18 460	5 60	8 60	8 110	11 140	7 80		69 620	5 40	59 1630
炉5	0																	
S6W33	10505	1 60	1 70	6 230		1 30	5 190			6 80	8 120	3 40	6 110	7 100		32 520	3 40	31 1120
S6W36	25275		1 30						3 10	2 30	1 10	4 70	13 160	23 2170	3 80	85 3840	4 20	58 5890
S9W33	13810	1 60	1 70	6 230		1 30	5 190			6 80	8 120	3 40	6 110	7 100		32 520	3 40	31 1120
S9W36	44445	2 330				1 20	3 170		8 80	10 230	6 60	8 170	54 1330	23 590	2 160	179 4440	5 40	75 4820

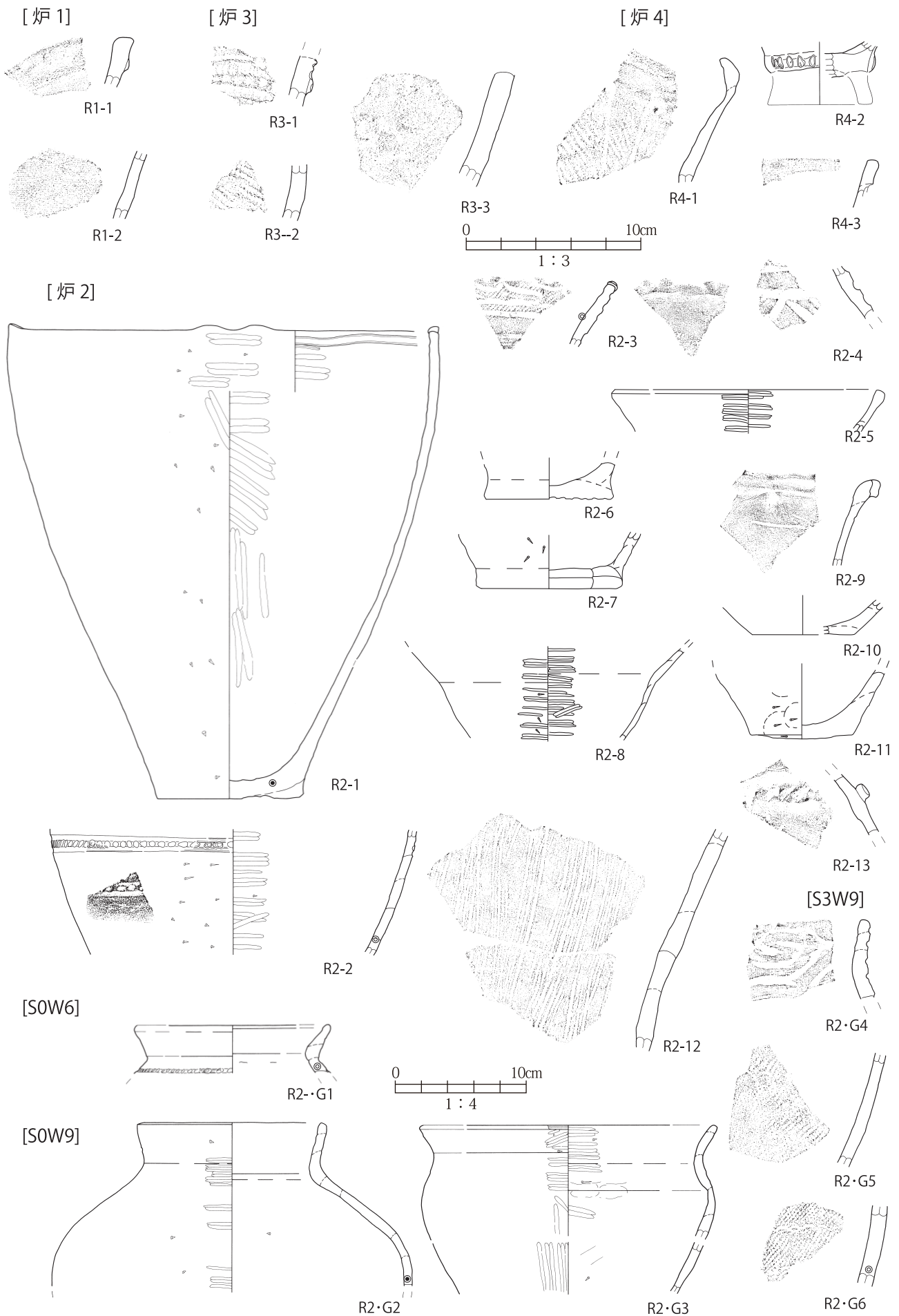


图 184 炉出土土器实测图·拓影

R2-5 は口縁部が外屈する深鉢で、これらを根拠に炉 2 の住居は佐野 2 式期に属すると判断する。それ以外は後期中葉～晩期前葉の混入品だが、浮線文土器 (R2-11 ～ R2-13) もあるのは少々問題だ。炉 2 の住居範囲に入る可能性のあるグリッド出土の晩期中葉の土器を、参考までに図示した。

(37) 炉 3 [図 183、184、写真図版 34] 【堀ノ内 1 式あるいは上ノ段 4 式以降】

S6W24 グリッドに位置し、谷状低地に隣接する。第Ⅲ層の礫群中で炉 3 の縁石を検出、ほぼ同時に 17 号住居、18 号住居、土坑 209 も検出し、また、谷状低地の縁辺も把握した。精査の結果、炉自体はいずれの遺構とも切り合わず、谷状低地とだけ重複することが判明した。決定的な根拠は無いようだが、炉 3 は「谷状低地より新」との調査所見があり、炉 3 が谷状低地の上に構築された可能性が高いと判断される。周囲には炉 3 と関連しそうな施設は発見できなかった。径 40cm ほどの範囲を若干窪め、その縁辺に長辺 40cm 程度の円礫を配置し、縁石とした石囲炉で、北辺～西辺の縁石は喪失している。被熱で風化した縁石はいずれも長く、各辺 1 個で構成できたのかもしれない。炉中央は被熱で赤化していた。炉 3 は住居の炉と特段の相違点は無いので、炉 1 と同様に住居の施設だと思われる。S6W24、S3W24 の 2 グリッドが住居範囲の候補になる。

炉 3 に伴う遺物はわずかで、いずれも中期中葉に属するが、破片が小さすぎて混入の可能性を排除できず、土器からは帰属時期は決められない。

炉 3 の住居は周囲の遺構とも切り合ったはずである。いずれにも切られるならば堀ノ内 1 式以前の住居、2 基の住居埋土上に構築されたなら上ノ段 4 式以降の住居、このどちらかではないかと推測する。中期の住居はⅣ層中で掘り方が検出できるので、炉 3 が中期に遡ることは無いだろう。古く考えるなら堀ノ内 1 式期の可能性が出る。一方、S6W24、S3W24 出土土器の時期別個体数・重量表を見ると、浮線文期が最も多い。最も新しく、量も多いのなら浮線文期は有力な候補になるが、別の問題が生じる。それは廃棄場が時間と共に谷状低地の下流側に移動していることで、佐野式期の廃棄場の中心はすぐ隣の S3W2 1 グリッドだった。S6W24、S3W24 の浮線文期土器は廃棄場に由来する可能性も高いのだ。炉 3 の住居は堀ノ内 1 式、上ノ段 4 式～晩期のいずれかの可能性がある、とまでしか言えそうも無い。

(38) 炉 4 [図 183、184、写真図版 34] 【後期前葉～後葉】

S3W12 ～ S6W15 の 4 グリッドの境界に位置する。第Ⅲ層中で石囲炉の縁石を検出し、周囲を精査したが住居の掘り方は検出できず、関連しそうな施設も発見できなかった。炉 4 は径 40cm 程の範囲を若干窪め、その縁辺に円礫を方形に配置して縁石とする。すべて被熱で風化した縁石の最大は 1 辺 50cm ほどで、立て並べた状態である。東辺と南辺の縁石の外側には、控えの礫が配置されるが、南辺の礫は大きい。多重の石囲炉というよりは、炉の周囲に石敷きが為されたように見える。こうした構造は敷石住居やその系譜を受け継ぐ後期中葉～後葉の住居に見られる。炉内には焼土が残されていた。炉 4 から取り上げられた遺物はわずかで、図示しうるのは 3 点に過ぎない。R 4- 1 は加曾利 E 式末期、R 4- 2 の高台付底部は後期後葉～晩期前葉か。R 4- 3 は後期以降の無文粗製土器だ。まとまりが無く破片も小さいので、時期決定の根拠にはならない。炉の形態から後期前葉～後葉の住居の一部の可能性があると考える。S3W12 ～ S6W15 の 4 グリッドが住居の範囲の候補になる。炉 4 を中心とした直径 4m ほどの範囲は、土坑やピットが皆無に近く、小規模遺構の空白域となっており、炉 4 の住居の存在と関連のある現象かもしれない。後代に敷石を剥ぎ取られた敷石住居の跡、というのは憶測が過ぎようか。

周辺グリッドのうち廃棄場を含む S3W15 グリッドを除外して出土土器の時期別個体数・重量表を見ると、堀ノ内式をピークに、称名寺式～加曾利 B 式が多く、晩期土器はわずかしかない。先記した憶測とは整合

的ではある。

(39) 炉 5 [図 183、写真図版 34] 【後期前葉～後葉】

S9W36 に位置する。第Ⅲ層の中位～下位で炉の縁石を検出、ほぼ同時に炉 5 を取り囲む 16 号住居の掘り方と、谷状低地の縁辺を平面的に検出した。炉 5 が 16 号住居埋土中に構築されるのは明白で、谷状低地の埋土の上に炉 5 の縁石の一部が乗ることも確認できた。炉 5 は両者よりも新しい時期に帰属する。炉 5 は径 40cm 程の範囲を若干窪め、その縁辺に人頭大～拳大の円礫を方形に配置して縁石とする。北辺と南辺の縁石の外側には、控えの礫が配置されるが、南辺の礫はやや大きい。多重の石囲炉というよりは、炉の周囲に石敷きが為されたように見える。縁石の半分は被熱で風化し、炉内には焼土が残される。出土土器は無いので帰属時期を決められないが、炉 5 が 16 号住居の上に乗ることから、中期中葉Ⅱ期より新しいことは確実である。

炉 5 は炉 4 と似た造り方なので、敷石住居の系譜を受け継ぐ後期前葉～後葉の住居の一部の可能性があると考えられる。住居の範囲は S6W33、S6W36、S9W33、S9W36 の 4 グリッドが候補である。その中で目立つのは S6W36 と S9W36 の佐野 1 式～2 式だが、この 2 グリッドは谷状低地斜面の廃棄場を含んでおり、佐野式は廃棄場に帰属する土器だと判断する。それ以外の土器は散漫で、時期決定の根拠にはなりにくい。

中期中葉Ⅱ期以前の 16 号住居の上に乗る位置に、後期前葉～後葉に炉 5 の住居が構築された。いずれの住居もその北辺は谷状低地の斜面にかかり、あるいは斜面の一部を埋めて構築された。住居廃絶後、降雨などにより住居北辺は流失し、自然の斜面に帰った。そこに晩期中葉の廃棄場が形成された。以上が推測できるシナリオである。

2 埋甕

(1) 埋甕 1 [図 185、写真図版 35、49] 【堀ノ内 1 式後半】

S36W42 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で 11 号住居を検出、同時にその埋土中に埋甕 1 の埋設土器を発見した。精査の結果、埋甕 1 が 11 号住居を切ることを確認した。2 個体の土器を埋設した埋甕である。住居の埋土中ということもあって掘り方は明瞭には把握できなかったが、埋設土器のサイズから見て、径 50cm 以上の掘り方を設けたはずだ。その中に深鉢 U1-1 の下半を、やや傾けながらほぼ正位に置き、その中央の 10～15cm ほど上位に、深鉢 U1-2 の底部を正位に置いている。U1-1 を埋置して少々土を入れた中に、U1-2 を重ねて置いた状態といえるだろう。深鉢 U1-1 の上半は粘土帯の接合部分で欠損しているが、意図的に打ち欠かれたかどうかは不明だ。埋甕埋土には特別な所見はない。

埋 U1-1 は体部下半が丸く、上半が大きく開く鉢で、体部が主文様帯となる。太い沈線で渦を描き、その両側に三角構図を描き、それらのモチーフ内に縄文を充填する。U1-2 も同様の器形で、描かれる構図も似ているが、縄文ではなく沈線が充填される。2 点とも堀ノ内 1 式後半に位置付けられよう。

(2) 埋甕 2 [図 185、写真図版 35、49] 【晩期前葉】

S39W30 グリッドに位置する。周囲は遺構が疎らで、孤立した位置に当たる。第Ⅳ層上面で埋甕 2 の埋設土器 U2-1b を検出した。精査の結果、掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 60cm 以上の掘り方を設けたはずで、その中に U2-1b の体部下半が正位に埋置されていた。U2-1b の底部は欠損し、体部最大径辺りより上位も欠損する。同一個体と判断される口縁部破片 U2-1a が一緒に取り上げられているが、接合はしない。後述する埋甕 4 や埋甕 7 も同様な状況が観察された。埋置された略完形品(底部毀損)が、後代の攪乱などで損壊した可能性と、埋置時に上半も故意に打ち欠き、その破片と一緒に埋納した可

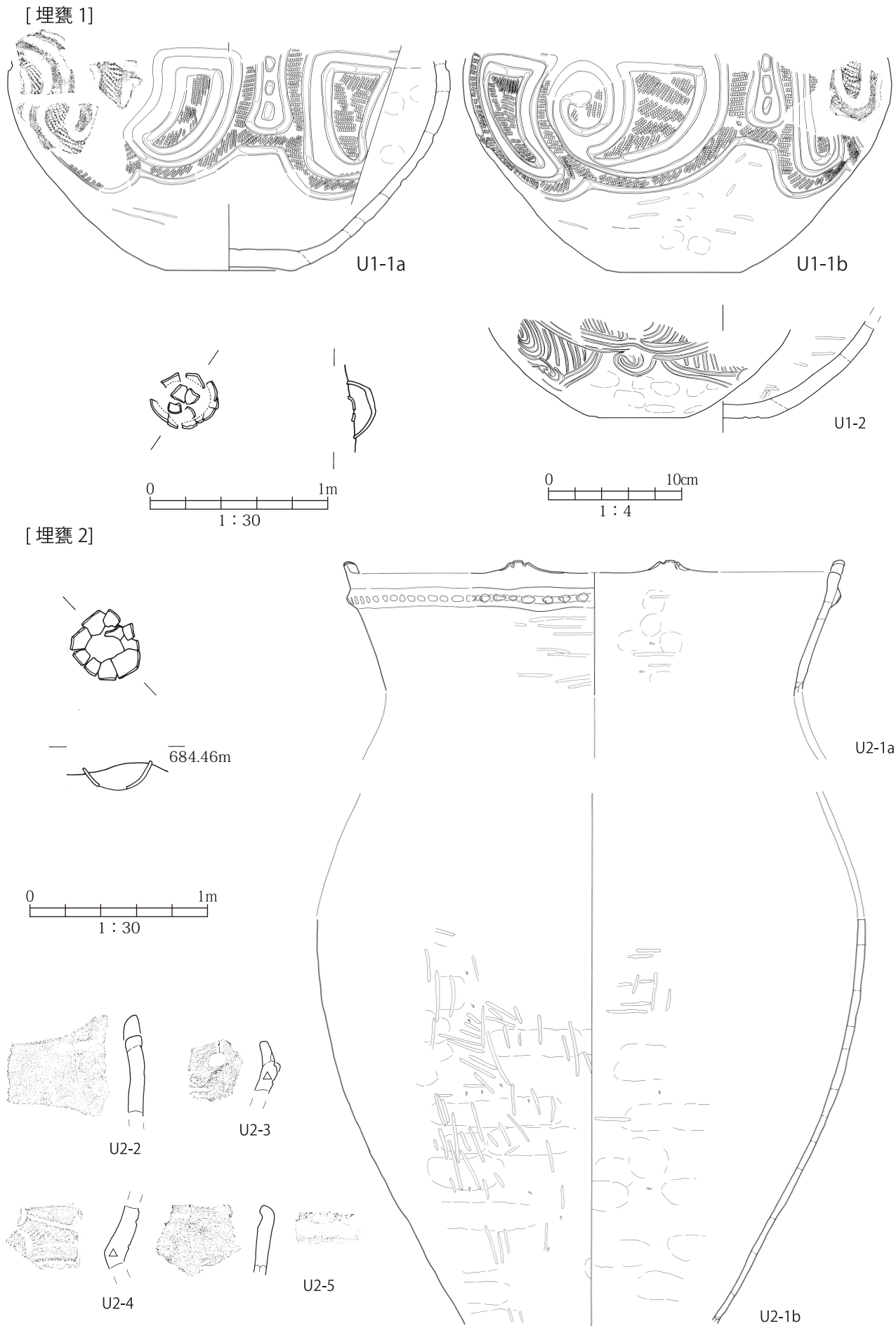


图 185 埋甕 1、埋甕 2 実測図

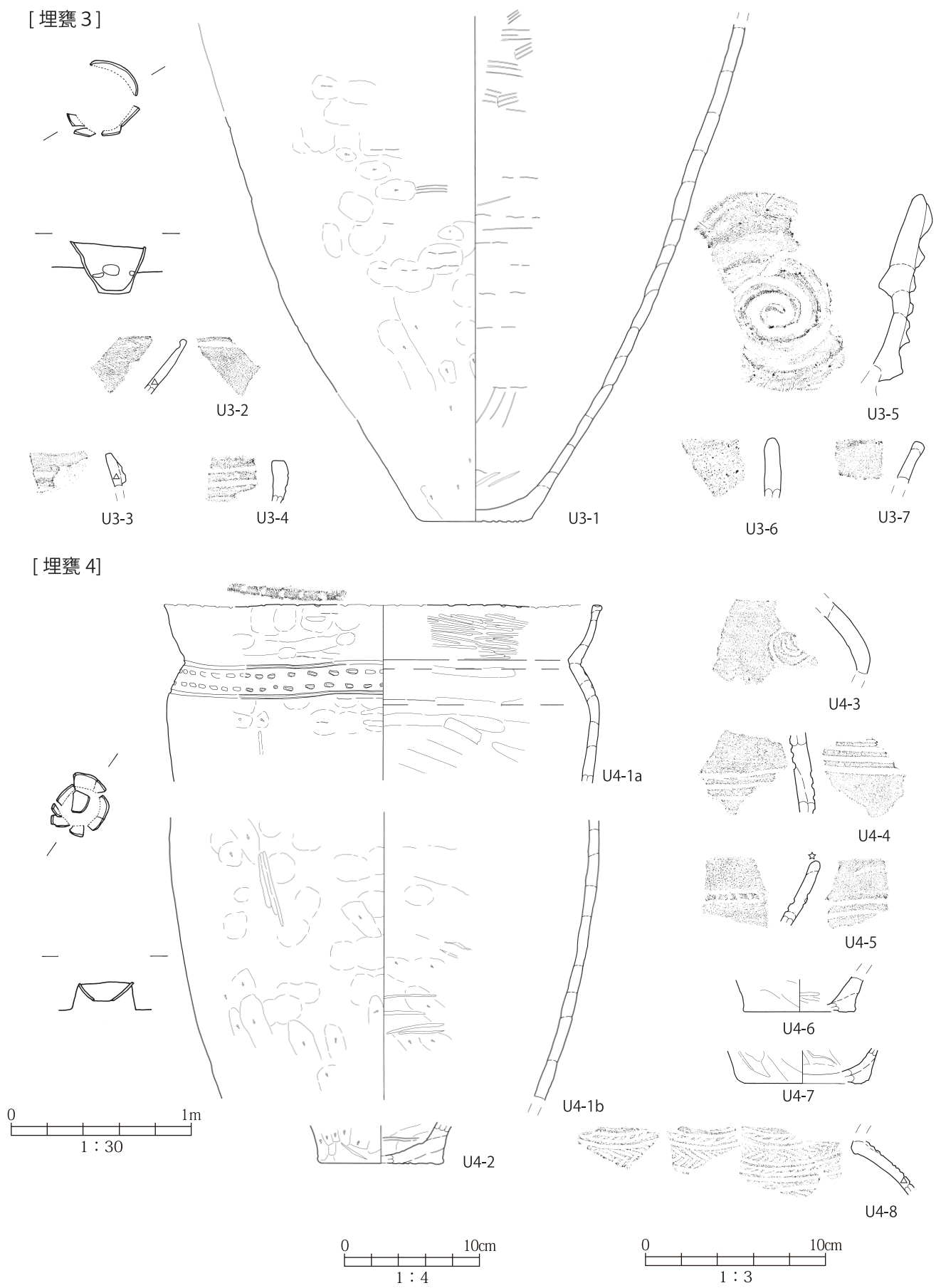


图 186 埋甕 3、埋甕 4 実測図

能性とが考えられるが、埋甕7の状況から見て、後者の可能性が高い。埋甕埋土には特別な所見はない。

U2-1aは平縁隆帯文深鉢で、隆帯上には爪跡付の横位指圧痕が残るので、中ノ沢B類型第5段階に相当する。口縁突起と1条隆帯が完全に分離しており、第5段階でも後半だと判断する。晩期初頭ではなく、前葉の可能性が高いだろう。体部下半U2-1bは器壁が薄く、オサエ痕が残り、ケズリは部分的にしかないなど、隆帯文深鉢の標準的な製作技法を示す。同時に取上げられた小破片U2-2以下は、U2-1とは時期的に合わないので、取り上げ時に混入したのだろう。

(3) 埋甕3 [図186、写真図版35、50] 【後期中葉】

S30W27グリッドに位置する。第Ⅲ層の礫群中で検出した配石23の精査時に、第Ⅳ層上面で配石を取り囲む33号住居の掘り方と、33号住居埋土中の埋甕3を検出した。埋甕3が33号住居を切るのは明白であった。掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径60cm以上の掘り方を設けたと推測でき、その中にU3-1が正位に埋置されていた。U3-1は底部から体部上半、口縁部近くまで残存する。口縁部の欠失が意図的かどうかはわからない。底部周辺は被熱で変色し、風化が進んでいるので、日常的に使用された土器が埋甕に利用されたと判断する。埋甕埋土には特別な所見はない。

U3-1は無文で器壁が厚く、下半部内面側は粘土帯の接合痕が顕著に残り、外面側は広汎にケズリがなされる。上半部内面側は工具を用いたナデ、外面側はオサエ痕が顕著で、ケズリも光沢もない。器厚と技法から、後期中葉の粗製土器ではないかと推測する。一緒に取上げられた小破片のうち、U3-3は時期が近そうだが、いずれも取上げ時の混入だろう。

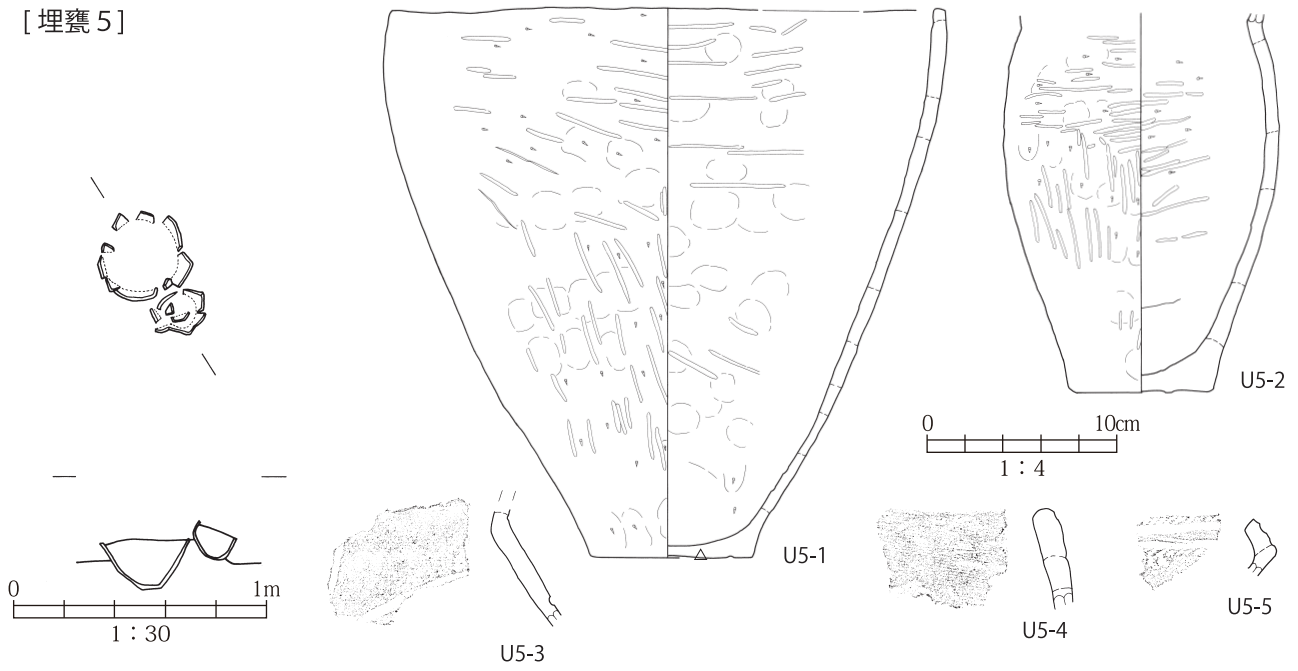
(4) 埋甕4 [図186、写真図版35、50] 【佐野1b式?】

S24W21～S24W24グリッドにかけて位置する。第Ⅳ層上面で埋甕4を検出した。切り合う遺構はなく、掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径50cm以上の掘り方を設けたと推測でき、その中にU4-1b体部が正位に埋置されていた。

U4-1の体部下半以下は欠失し、体部最大径辺りより上位も欠失する。同一個体と判断される口縁部破片U4-1aと一緒に取り上げられているが、接合はしない。こうした状況は埋甕2とそっくりで、埋置時に口縁部を故意に毀損させ、その破片と一緒に埋納した可能性が考えられる。埋甕埋土には特別な所見はない。

U4-1は口縁部が屈曲して外反し、肩部が張る深鉢で、肩部に文様帯が設定されるので、肩部文様帯型深鉢と呼ぶのが良いだろう。口縁部・肩部はほぼ同径だが、肩部の径が時間と共に大きくなる傾向がありそうだ。口唇部には疎らに圧痕が加えられるが、突起が付された可能性もある。文様帯は上下を単純な沈線で画し、中央に2条の短線列を充填する。界線が単純な沈線であることと、単位文代用の点列が刺突や圧痕ではなく短線であることは、古相を示すと思われるので、佐野1b式ではないかと推測するが、佐野式の編年観には未確定部分が残るので、最終所見は第4分冊で示したい。一緒に取上げられた小破片のうち、U4-1、U4-3は時期が近そうだが、いずれも取上げ時の混入だろう。

[埋甕 5]



[S21W21]

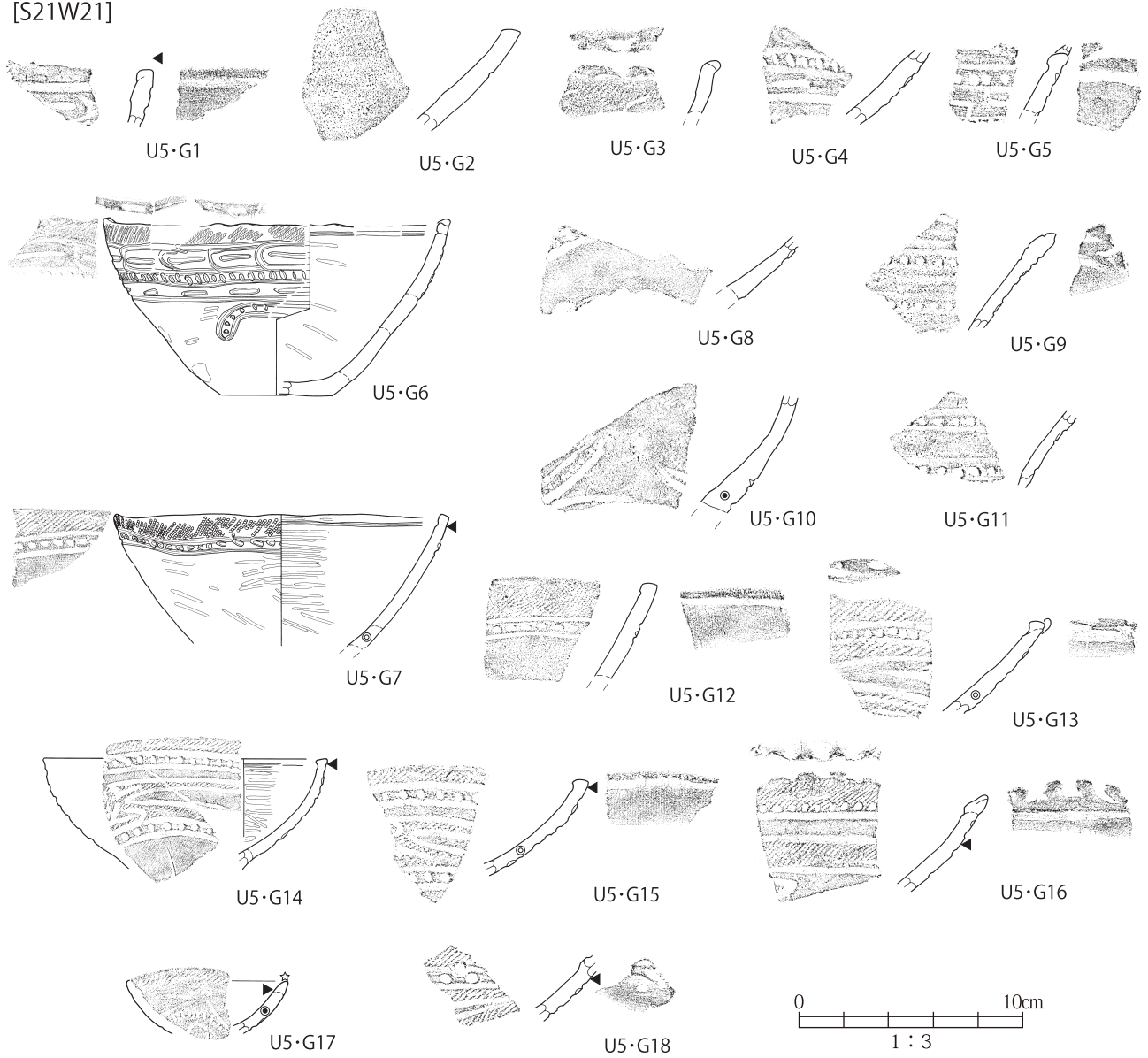


図 187 埋甕 5 実測図、関連グリッド出土土器実測図・拓影 (1)

[S21W21]

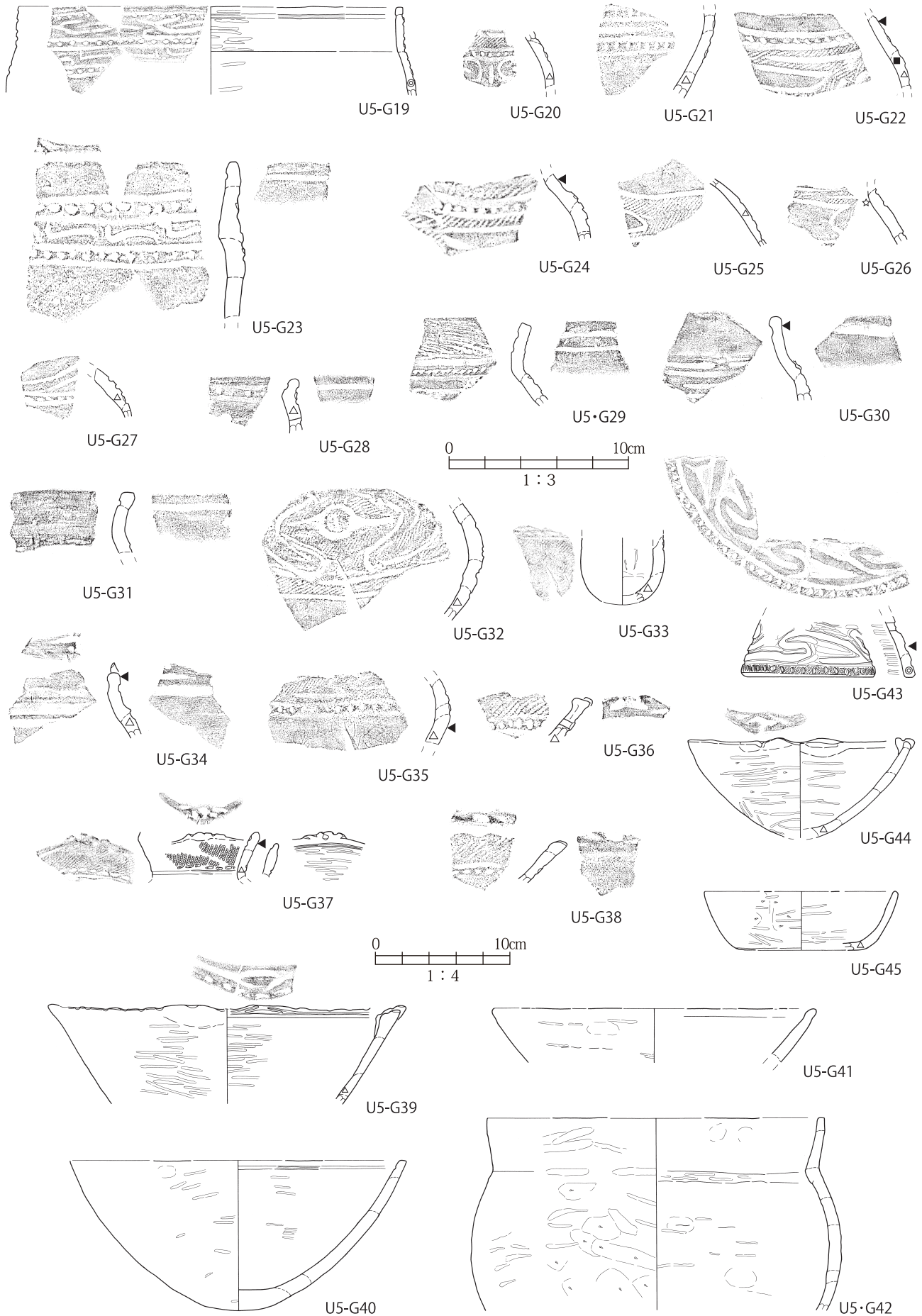


図 188 埋甕 5 関連グリッド 出土土器実測図・拓影 (2)

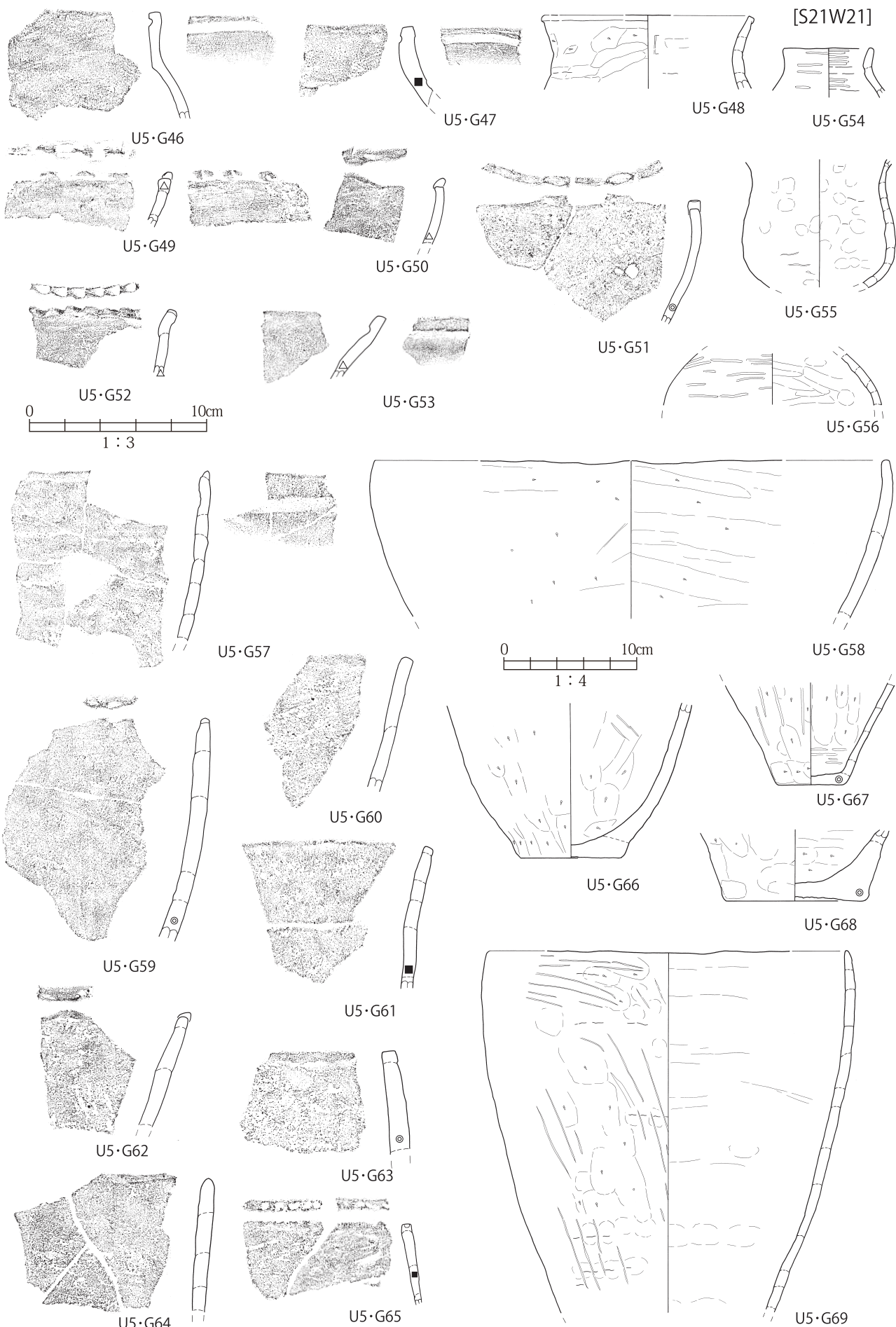


図 189 埋甕 5 関連グリッド 出土土器実測図・拓影 (3)

(5) 埋甕 5 と S21W21 グリッド出土土器 [図 187～190、写真図版 35、36、50] 【佐野式】

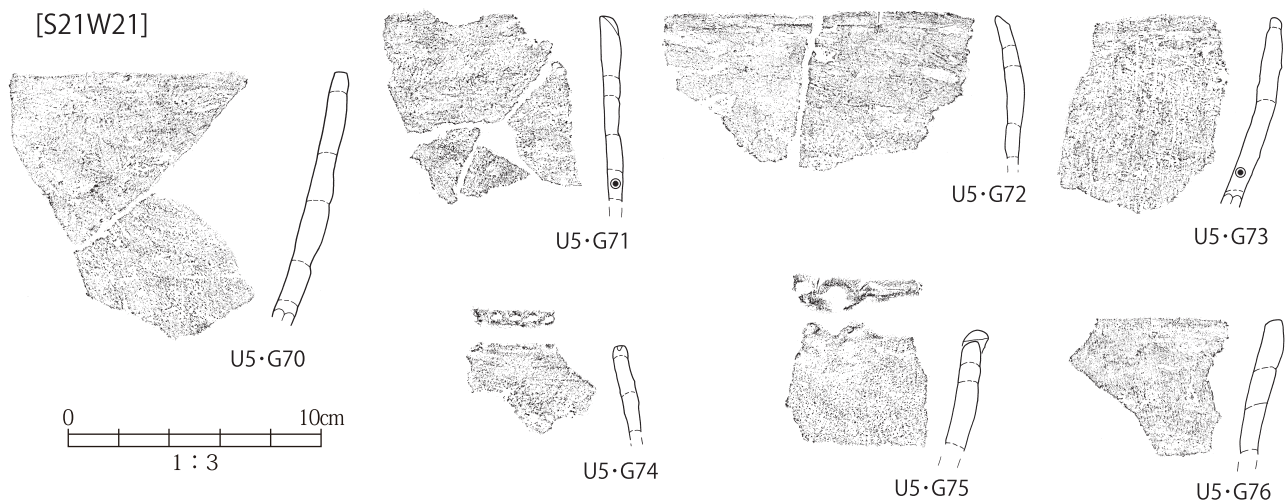
S21W21 グリッドに位置する。第IV層上面で埋甕 5 の 2 個体の埋設土器を検出、引き続いて埋甕 5 と切り合う土坑 403 も検出した。埋設土器が損壊していないので、埋甕 5 が土坑 403 を切るのは明白である。掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 60cm 以上の掘り方を設けたと推測する。その中にほぼ完形の U5-1 が正位に埋置され、その斜め上に密接するように、完形に近い U5-2 が若干傾きつつもほぼ正位に置かれていた。U5-1 は底部から口縁部まで揃っており、U5-2 は口縁部が欠損するものの、底部から体上半部まで揃っている。U5-1 の体部下半は被熱によって明色に変色しており、日常的に使用された土器が埋甕に利用されたと判断する。小形の U5-2 も体部下半内面側に変色しており、使用痕跡があると考え。埋甕埋土には特別な所見はない。2 個体の完形土器を、相互に接するように順次埋設した埋甕である。

U5-2 は器壁が薄めの深鉢で、口縁部が外反し、外反部以上が欠損する。緩い外反ならば平縁隆帯文深鉢の可能性、はっきりした屈曲なら佐野式の無文粗製深鉢の可能性もある。外面は全面ケズリのうえミガキを加えて光沢があり、器面は凹凸がない。内面も広汎にケズリ、部分的にミガキも加える。総じて精度の高い整形で、小形品だということも合わせれば、隆帯文土器よりは佐野式の可能性が高いだろう。ほぼ完形の U5-1 は単純な砲弾形の無文粗製深鉢で、口縁部だけが 1/3 程度欠損している。器壁は薄いほうだ。口唇部は平坦で、突起などの付加的装飾はないらしい。内面側にも沈線などの文様はない。外面は全面に浅いケズリを施すが、オサエ痕は消しきれない。内面にケズリはなく、オサエ後にナデで仕上げるが、器面の凹凸は著しくは無い。隆帯文系とも佐野式系とも言い切れないが、U5-2 と共伴するからには、佐野式の可能性が高いのではないかと。なお、一緒に取上げられた小破片 U5-3～U5-5 は後期土器ばかりで、取上げ時の混入だろう。

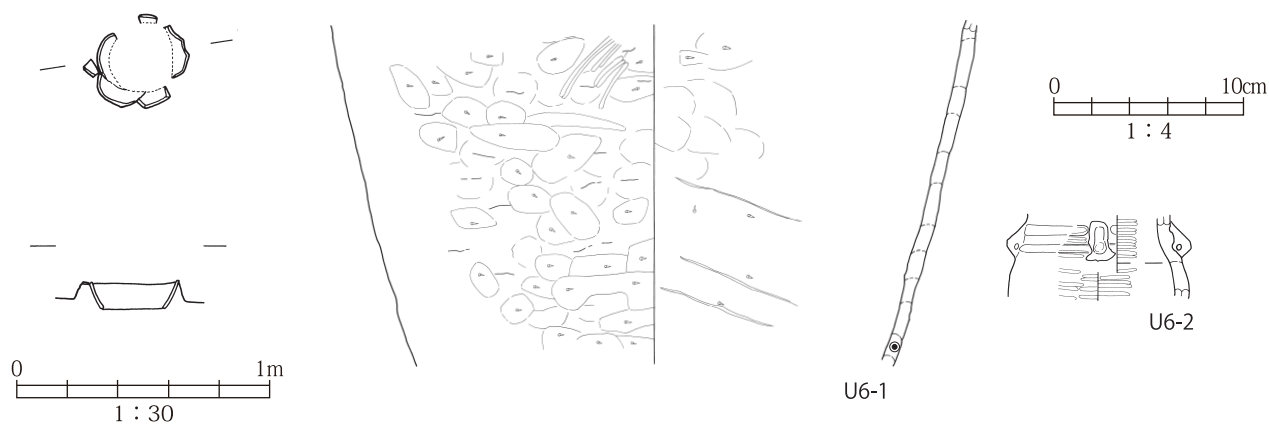
埋甕 5 の位置する S21W21 グリッド出土土器の時期別個体数・重量表を見ると、佐野式が圧倒的である。佐野式が集中するグリッドがあるのは 22 号住居周辺も同様で、発掘段階では 22 号住居の範囲を小さく見すぎていたのではないかと、判断を変更した。だが、S21W21 グリッドのみに佐野が集中するのは、住居のような規模の大きな遺構を把握しそこなったからでは無いと思われる。遺構としては小規模な埋甕 5 に関連して、遺物が集中した可能性を考えたい。そこで、S21W21 グリッド出土の晩期土器もここに掲載した。

S21W21 出土の晩期土器の一括性は保証されないものの、佐野 1b 式～佐野 2 式にほぼ限定される。晩期前葉に遡るのは U5・G1、U5・G2 のみで、無文粗製深鉢のうち U5・G69～U5・G76 にその可能性が残るが、これらは佐野式の範疇に入る可能性もある。浮線文期に下る土器は無い。有文土器は、屈曲を持たず単純に開く浅鉢や鉢と、体部上位が張り出して外屈する口縁部がつく鉢や深鉢に大別できる。後者は張り出す肩部に主要な文様帯が設定されるので、肩部文様帯深鉢(或いは鉢)と呼称する。単純な浅鉢、肩部文様帯深鉢とも、文様帯の上下を画するのに、点列を挟んだ 2 条の沈線が多用される。「点列界線帯」と呼称したい。肩部文様帯深鉢は佐野 1b 式で明確化して佐野 2a 式から主体的となり、点列界線帯は佐野 1a 式で萌芽し佐野 2a 式から多用される、という中村豊の見解[中村 1997]に従えば、こうした要素が集中的に見られる S21W21 出土土器は、佐野 2a 式が主体を占める可能性が高い。それらには主文様帯の鍵ノ手文やそれから派生するクランク構図と、雲形文を祖形としそうな硬直化した弧線モチーフが多用される。U5・G19 の口縁部には安行 3c～3d 式の要素が導入される点には注意しておきたい。U5・G29～U5・G31、U5・G46～U5・G48などは佐野 2b 式粗大工字文と関わるか、それに後続する可能性もあろう。

佐野式の埋甕 5 と、佐野 2a 式を主体としそうな S21W21 出土土器との同時性は確定できないが、時期的に重なる可能性があることは否定できない。埋甕 5 に伴う祭祀の場合、祭祀後の廃棄場などの可能性が浮かぶように思われる。さらに、S21W21 の両隣の S18W21・S24W21 には、甕 5 と近接する時期の可能性のある埋甕 4 と埋甕 6 があり、この近辺は埋甕が集中する特別な意味のあるエリアの可能性が高い。



[埋甕 6]

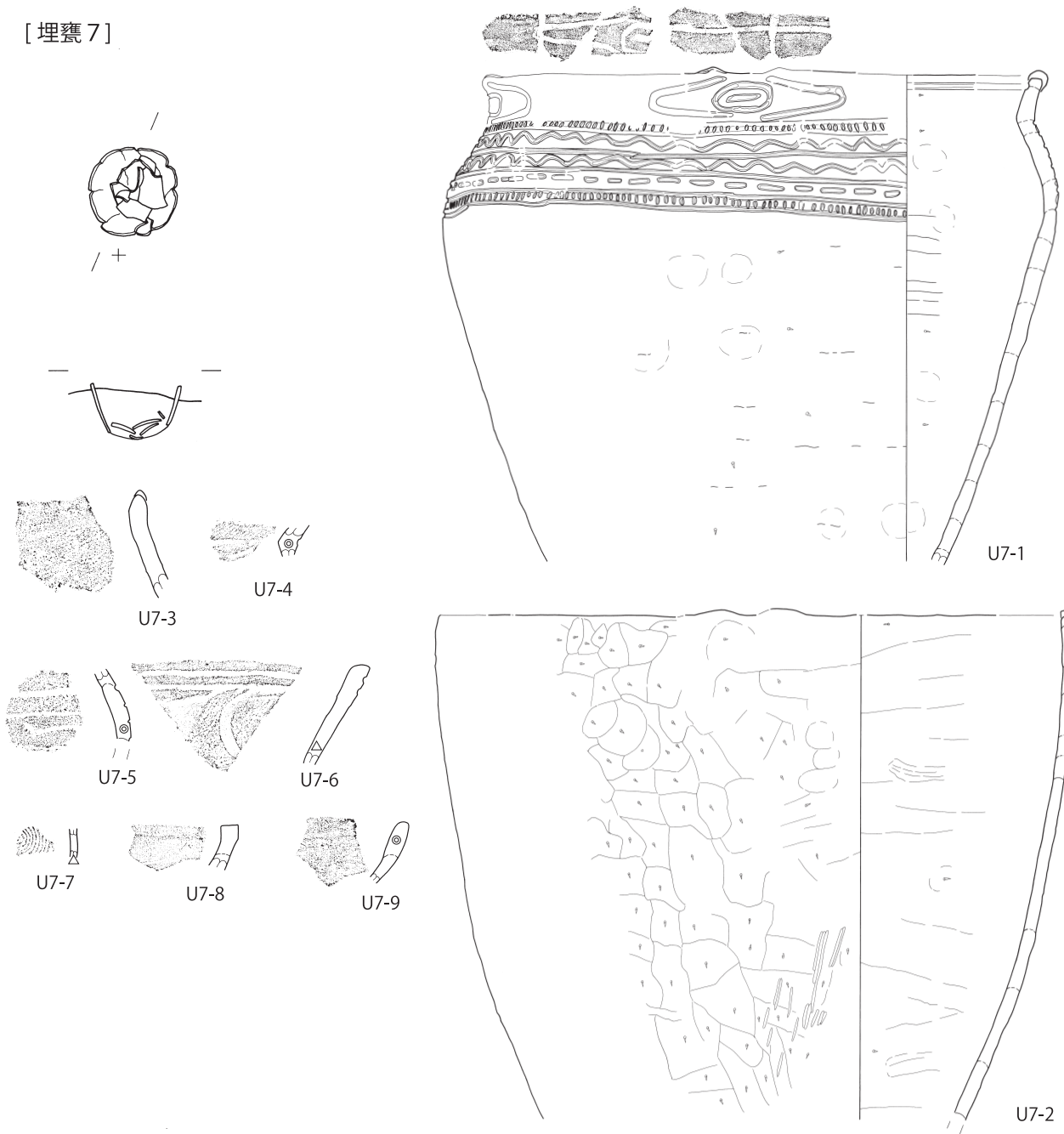


埋甕関連の時期別個体数 (上段 : 口縁部破片数、下段 : 口縁部重量 g)

地点	重量 g	中期					後期				晩期			後晩				
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
埋甕 1	1825																	2
埋甕 2	1515							1	1			1			1		1	1
埋甕 3	3770			1				10	10	10					2		3	3
埋甕 4	1920			120				10	10	10					20		3160	3
埋甕 5	3080							2	50				1				3	6
S21W21	30060			1				8	16	3	1	6	36		113	1	66	2610
S21W24	320			30				100	320	50	10	90	1570		3670	10	4010	
埋甕 6	870							1	30						2	1		
埋甕 7	5485											1	1		4			
埋甕 8	1705											30	3150		1110			
埋甕 9	1945													1	2			
埋甕 10	8910			1										1700	50			
埋甕 11	805			1				1	520									1
				30														740

図 190 埋甕 5 関連グリッド出土土器実測図・拓影 (4)、埋甕 6 実測図

[埋甕7]



[埋甕8]

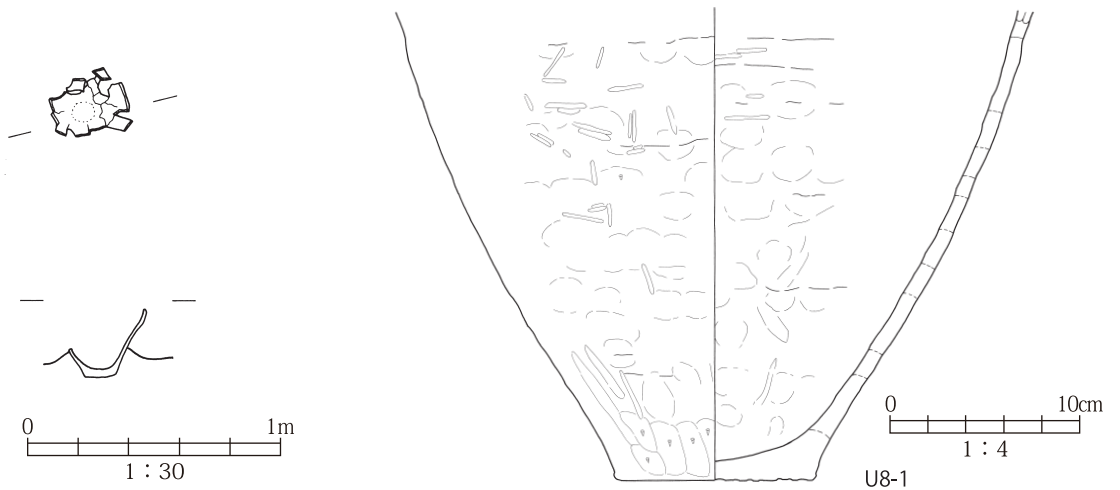


图 191 埋甕7、埋甕8実測図

S21W21 出土土器と、このエリアの最終評価は、第4分冊で果たしたい。

(6) 埋甕6 [図190、写真図版36、51] 【晩期前葉～中葉】

S18W21 グリッドに位置する。第IV層上面で埋甕6を検出した。切り合う遺構はなく、掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径50cm以上の掘り方を設けたと推測でき、その中にU6-1の体部が正位に埋置されていた。U6-1の体部下半以下は欠失し、体部上半も欠失する。下半は意図的な欠損か欠損個体を選択されたのだろうが、上半の欠失理由は不明である。埋甕6出土として一括で取上げられた破片以外とは接合しなかった。U6-1の下半は被熱によって明色に変色しており、日常的に使用された土器が埋甕に利用されたと判断する。埋甕埋土には特別な所見はない。

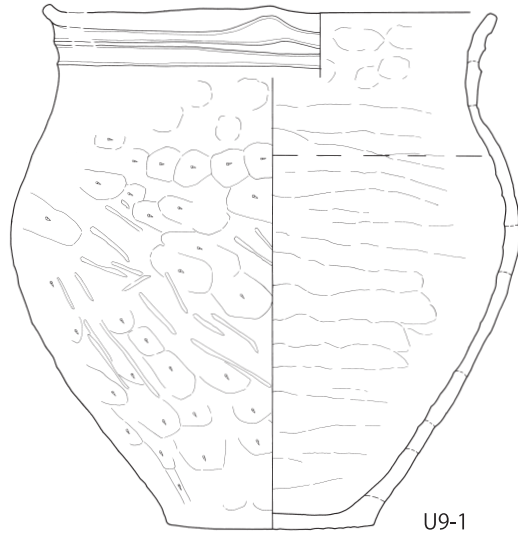
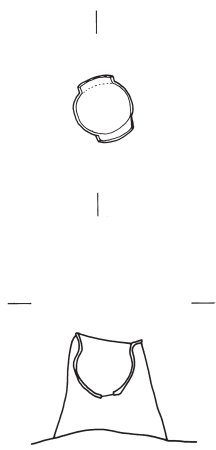
U6-1は無文粗製深鉢の可能性が高い。器壁は薄く、内面・外面とも全面的に浅いケズリが施されるが、オサエ痕跡を消しきれず、器面に凹凸が残り、特に外面は顕著だ。佐野式よりも隆帯文系土器の技法に近いように見受けられる。帰属時期を確定しきれないが、晩期前～中葉の間に位置付けることはできそうで、底部を欠いた土器を埋甕に使用するのは、同時期の埋甕との共通点だろう。U6-1と一緒に取上げられたU6-2は、あまり類例のない小形土器の破片で、U6-1と整合するかどうかかわからない。なお、時期別個体数・重量表には埋甕6の数値が記載されていないが、口縁部・底部が欠けているため、数値表示の対象とならなかったことによる。

(7) 埋甕7 [図191、写真図版36、51] 【佐野1b式?】

S18W15～S18W18 グリッドにかけて位置する。第IV層上面で埋甕7を検出、続いて39号住居主体部の掘り方と出入り口施設の石敷きを検出した。埋甕7は39号住居埋土中に構築され、埋設土器がほぼ完存するので、埋甕7が39号住居を切るのは明白である。掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径60cm以上の掘り方を設けたと推測でき、その中にU7-1の体部が正位に埋置されていた。U7-1の体部下半以下は欠失するので、底部のない、或いは底部を打ち欠いた個体を選択されたのだろう。検出時には短く外反する口縁部も欠失していたが、U7-1として取上げられた小破片と接合して口縁まで復元できた。口縁部は打ち欠かれたのではなく、発掘時に破損したと推測される。U7-1の底近くには、U7-2の破片が内面側を下にし、一部はU7-1の内面に立てかけるようにして置かれていた。復元の結果大破片2片にまとまって、口縁部から体部下半までである同一個体の深鉢と判断されたが、直径の1/3ほどしか残っておらず、大破片が埋納されていたと考える。U7-2の下半は被熱によって明色に変色しており、日常的に使用された土器が埋納されたと判断するが、U7-1は全面的に風化が進み、被熱の有無は観察できない。埋甕埋土には特別な所見はない。

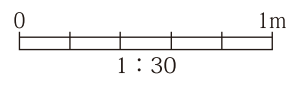
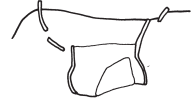
U7-1は肩部文様帯深鉢で、口縁部は短く外屈し、最大径は肩部にあるが、大きく張り出すわけではない。口唇部は平坦で、加飾のない小突起が4単位付加され、その直下に単位文が描かれる。肩部文様帯の上下は点列界線帯で画され、文様帯はさらに3帯に細分し、波状沈線と短線列を挿入する。口縁内面には沈線1条が一周する。点列界線帯は佐野1b式以降普遍化し、佐野2a式で多用されるらしい。肩部文様帯の細分と合わせ、佐野1b式の特徴ではなかろうか。U7-2は無文粗製深鉢で、外面は全面ケズリのままとし、内面もケズリののちナデで痕跡を消すが、器面は凹凸がない。丁寧なつくりで、これは佐野式の粗製土器の特徴だ。U7-1とU7-2は整合的だ。一緒に取上げられた小破片は取上げ時の混入だろう。埋甕7は佐野1b式段階の可能性はあるが、結論は保留とし、最終所見は第4分冊で示したい。

[埋甕 9]

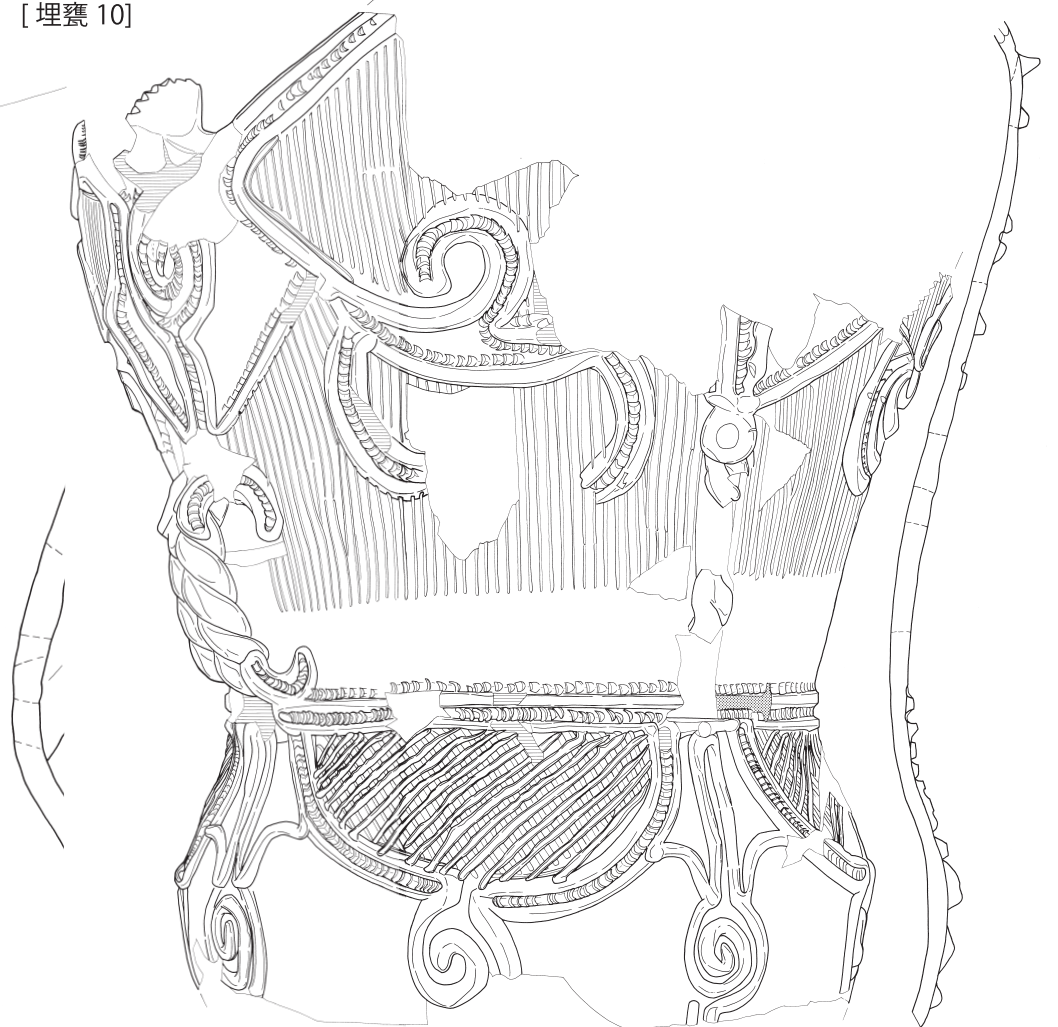
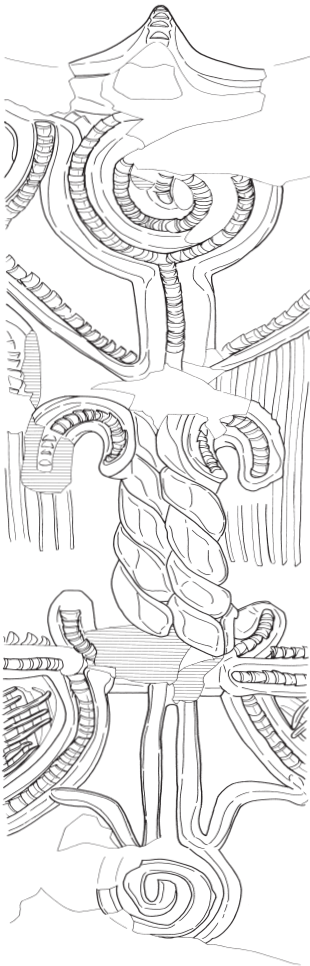


U9-1

[埋甕 10]



[埋甕 10]



U10-1

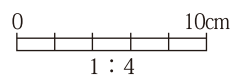


图 192 埋甕 9、埋甕 10 实测图

(8) 埋甕 8 [図 191、写真図版 36、52] 【後期】

S6W12 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で埋甕 8 を検出した。切り合う遺構はなく、掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 50cm 以上の掘り方を設けたと推測できる。その中に U8-1 がやや傾きつつも正位に埋置されていた。U8-1 の底部は完存するものの、体部下半は 1/5 程度しか残らず、体部上半は完全に欠失する。全体として遺存状態が悪く、攪乱などによる欠失部分が大きいと推測され、埋納状態の復元は困難である。U8-1 の下半は変色が認められないが、日常的に使用されない土器だったとも言い切れない。埋甕埋土には特別な所見はない。

U8-1 は粗製深鉢もしくは、精度の低い有文深鉢体部下半で、器壁は厚い。外面のケズリは部分的で、オサエ痕跡が顕著に残るが、底部直上だけは全面的にケズリが行なわれる。内面はケズリがなく、オサエ痕が顕著だ。後期の粗製土器の技法だと推測するが、それ以上は不明だ。

(9) 埋甕 9 [図 192、写真図版 36、37、52] 【浮線文期】

S36W21 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で 28 号住居の掘り方を平面的に検出し、ほぼ同時に、その埋土中に埋甕 9 を検出した。埋甕 9 の埋設土器は完存するので、埋甕 9 が 28 号住居を切るのは明白である。掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 50cm 以上の掘り方を設けたと推測できる。その中に U9-1 が正位に埋置されていた。U9-1 は口縁部の一部が欠損するもののほぼ完存する。完形個体が選ばれて埋設されたのだろう。U9-1 は風化が著しく、特に器体上半の外面は変色して、2 次焼成の可能性がある。底部付近は変色がなさそうだが、煮沸痕跡の有無はわからない。埋甕埋土には特別な所見はない。

U9-1 は装飾の少ない深鉢だ。直径は 25cm 弱とやや小ぶりで、器高は 30cm に満たない。体部上半に最大径があり、緩くくびれて、口縁部は小さく開く。口縁部に幅広い沈線を 2 条巡らし、上位の沈線はどこどころ口端に接し、その接続部分が小突起状をなす。この沈線 2 条は隆線手法の変形かと思われ、浮線文甕の中に類例を見る。浮線文系土器の甕ならば器高はずっと高いはずで、肩部も稜をもたせるはずだ。かなり異相を呈するといわざるを得ないが、浮線文系の変種と考えたい。

浮線文並行期に東海地域以西では甕棺墓が普遍化する。中部高地ではあまり知られていないが、埋甕 9 はその数少ない類例ではなかろうか。

(10) 埋甕 10 [図 192、写真図版 37、52] 【中期後葉Ⅰ期】

S12W48 グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で 2 号住居(新)と 2 号住居(旧)の掘り方を平面的に検出し、ほぼ同時にその埋土中に埋甕 10 を検出した。埋甕 10 の埋設土器は完存するので、埋甕 10 が新旧双方の 2 号住居を切るのは明白である。掘り方は把握できなかったが、土器のサイズから、径 80cm 以上、深さ 60cm 以上の掘り方を設けたと推測できる。その中に U10-1 が正位に埋置されていた。U10-1 は口縁部が 2 ヶ所大きく欠損し、波状口縁波頂部も欠くが、虫食いのな欠け方なので埋設当初は完存していたと推測する。一方、体部下半～底部は全面的に欠損しており、こちらは意図的な毀損だと推測する。U10-1 の体部下半の欠損部周辺は被熱によって明色に変色しており、日常的に使用された土器が埋納されたと判断する。埋甕埋土には特別な所見はない。

U10-1 は完存すれば高さが 100cm もありそうな特大品だ。くびれが緩いキャリパー形の、櫛形文土器の系譜を受け継ぐ深鉢だ。波状口縁は 4 単位と見られる。体部上半は非常に幅広い文様帯となり、2 条の隆帯で単位文を繋ぎ、区画内には腹竹管の沈線を充填させる。くびれ部～体上半部にかけて貼付される 2 条の粘土紐を振り合わせた把手が特徴的だ。体部下半は櫛形の区画が 4 単位配置され、籠目文が充填される。中期後葉Ⅰ期に属する。

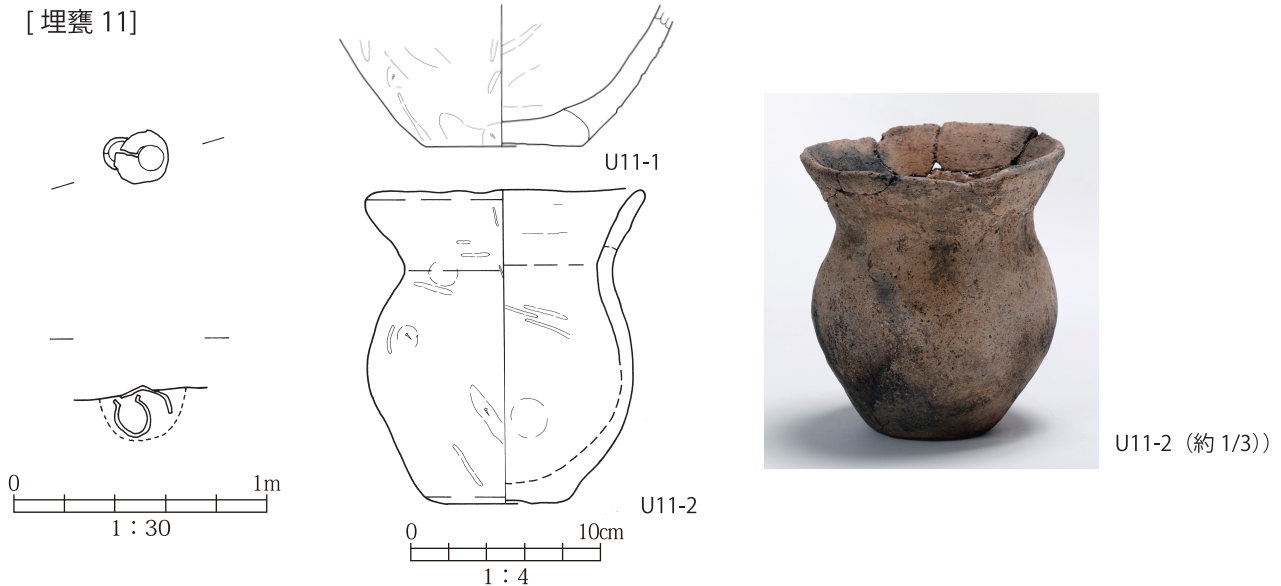


図 193 埋甕 11 実測図・写真

(11) 埋甕 11 [図 193、写真図版 37] 【後期前葉？】

S9W18 グリッドに位置する。第IV層上面で埋甕 11 を検出した。切り合う遺構はない。掘り方は識別できなかつたとの記録があるが、写真では径 50cm ほどの掘り方があるように見受けられ、どちらが正確なのかは不明だ。いずれにしても掘り方の中に 2 個体の土器、U11-1 と U11-2 を重ねて埋設していた。U11-2 は小形の完形深鉢で、U11-1 は深鉢の底部だ。U11-2 をわずかに傾けつつ正位に置き、その上に U11-1 を伏せて、U11-2 の口縁部を塞ぐように重ね合わせており、蓋をしたような状態であった。おそらくは蓋にする目的で、底部だけを打ち欠いて利用したのだろう。埋甕埋土には特別な所見はない。

U11-2 はいったんくびれて口縁部が単純に外傾する。やや厚めで、底部は上げ底にし、文様は全くない。器面はフラットとはほど遠く、明瞭なケズリやミガキはなく、かといってオサエ痕も不明瞭で、整形に手がかけられていない。底部周辺に被熱による変色は認められない。U11-1 は中央に網代圧痕が残るが、ほとんどナデで消されている。外面のうち半分は明瞭なケズリが残るが、半分はナデ痕跡しか残らない。被熱による変色は少々ありそうだが、定かではない。2 点とも特徴は乏しく、位置付けに苦しむが、後期前葉の可能性を考えておきたい。

(12) 晩期前葉～中葉の埋甕

11 基の埋甕の内訳は、中期 1 基、後期 4 基、晩期前～中葉 5 基、晩期後葉 1 基である。その中で注目すべきなのは晩期前葉～中葉の 5 基である。

この 5 基に共通する特徴を挙げる。第 1 に住居の施設ではなさそうである。5 基の埋甕周辺を精査したが、住居に関わりそうな遺構・施設は発見できなかった。一方で、この時期の竪穴住居を炉 2 と F1 号住居も含めて 9 基発見したが、いずれも埋甕はなかった。遺存条件が悪い遺跡ではあるが、屋内施設ではないと判断してよさそうだ。第 2 に構築位置だが、埋甕 2 以外は 10m 四方程度の範囲に集中し、埋甕 2 も含めて見れば、住居から 5m ～ 10m 程度離れた場所になる。隣接はしないが、日常生活空間の一角に当たりそうな位置だ。第 3 に日常生活で使用した煮沸痕の顕著な深鉢を利用している。U5-2 以外は大形で、有文の精製深鉢であっても精度は高くなく、無文の粗製深鉢も用いられる。第 4 は全て正位で埋設される。

次は例外がある共通点である。第 1 は U5-1・U5-2 を例外として、意図的に底部を欠損させた土器が使用

される。第2は意図的に欠損させた口縁部を埋甕内に投入するか、口縁部欠損は無いが別個体を埋甕内に投入する。有文深鉢使用の3基がこれに該当する。無文深鉢の2基・3点が口縁部を欠損するのは、有文深鉢の埋甕と共通すると見ることできる。

埋甕2は埋甕4・埋甕5・埋甕7に先行すると思われ、時間と共に共通性が少しずつ変化してゆくのではなかろうか。埋甕に伴う作法のようなものが、変化してゆく過程を示す事例ではなかろうか。

晩期前葉～中葉の埋甕比較表

No.	土器(深鉢)	底部	口縁	埋甕内投入	数量
埋甕2	中ノ沢B類型深鉢	欠損	埋納時毀損	口縁投入	1個体
埋甕4	佐野1b式深鉢	欠損	埋納時毀損	口縁投入	1個体
埋甕5	佐野式無文深鉢	あり	欠損		2個体並置
埋甕6	無文深鉢	欠損	欠損		1個体
埋甕7	佐野1深鉢	欠損	欠損せず	別破片投入	1個体